

歪められた真実の歴史
—幕末水戸藩に於ける—考察—

M 3 A (3 5) 結城明姫

《記述上の注意点》

- ・人物の年令は基本的に満年齢で書くようにした。
- ・月の名前は閏月の記述があるものはそのまま書いたが、資料によりはっきりしないものもある。当時の暦がとても複雑なので、この論文では西暦との置き換え等の暦の処理には不十分なところがあるかもしれない。
- ・年号は年令を推定する目的等、一部では、計算しやすいように西暦で統一して記述した。他はすべて元号で記述し流れをつかむ上で、必要に応じて西暦を付記した。また、付録の年表に関連年代の元号と西暦のすべての対応を示した。
- ・数字の記述に関しては、読みやすさを考慮して、年令、年号、月日等は西洋数字を使用し、石高、順番、回数等は漢数字を使用した。
- ・引用文は文中『』に括りその直後に（）で通し番号がふられている。文中にただ（）で通し番号がふられているものは、その記述内容を論述している主な参考文献を表す注である。また通し番号は、引用文献、参考文献で区別をしていない。
論文末の注に書かれている「文献番号」とは論文末尾の「参考文献」にふられた通し番号のことである。

水戸藩内部抗争の参考文献は一次資料や、それをもとに纏められた信憑性の高い資料が極めて限られている。たいていの本はその出展を辿ってゆくと、10点にも満たない文献にたどり着いてしまう。特筆すべき出来事については、いちいちこの手法で参考として文献を示してある。この記述方法は、水戸市史（文献番号 10. 11. 27）や、水戸藩の学問教育史の研究（文献番号 6）の手法を踏襲した。

- ・文中、引用部分に「？」が入る事が稀にある。これは、文献が古い為、解読不能に拠るものである。しかし、その部分が無くとも意味は通じるもののみ引用している。また、「？」が入る文献は特にその後に引用部分の簡単な解説を付加するようにした。但し、解説は「」（引用）の後に「」（大意）で解説する形式と、○○○○は○○○という・・・と、文章のまま続ける形式のどちらかを前後関係、文章の流れにより使い分けている。また、文中に「？」が入る文書は作者死後 50 年は確実に過ぎているもので、著作権の心配は無いものばかりである。
- ・水戸藩党争始末（15）については所蔵資料が明治期に筆写された物なので頁番号はふられておらず、引用の部分は資料名のみ記した。

例：『結城寅寿名ハ朝道初めの名ハ晴明父祖世々水戸藩に仕ふ』（15）

旧漢字は主に新漢字に直してある。また、明治期以前に使われたひらがなの「し」を「志」と当て字にするなどの旧書体も、主に新書体に直した。ただし、ひらがなの「は」をカタカナの「ハ」とするカタカナ文法はカタカナのまま記載した。これは、読みやすさを考慮に入れた上で、原文の印象、内容を損なわないようにするためである。

- ・結城一万丸は万丸や旧字の一萬丸、萬丸の記載も多いが「一万丸」で統一した。人名

については旧字体でも一般に通用しているものはなるべくそのまま使用した。

- 党派の名称は諸生党、結城派、天狗党、藤田派など党派の名称は様々だが、その時代にあった名称を使用した。主に、斉昭擁立時を「改革派」「門閥派」または、「斉昭擁立派」「清水公擁立派」とし、結城寅寿、藤田東湖健在時、を「藤田派」「結城派」とし、その後は「諸生派」「天狗派」「諸生党」「天狗党」とした。また、天狗党が激派、鎮派に分裂した後は、「天狗激派」「天狗鎮派」または、「激派」「鎮派」とした。（実際天狗党という名称は、初期につけられた名であるが、対応させるためにあえて後期にのみ使用した。）

目次

《記述上の注意点》

《序文》 p.1

《用語の定義》 p.3

1. 幕末水戸藩に関する人物概暦

(1) 水戸藩とは

〔1〕 概暦

- ① 水戸藩建立
- ② 水戸藩の位置づけ

(2) 水戸斉昭

〔1〕 斉昭概暦

- ① 徳川斉昭とは
- ② 斉昭擁立
- ③ 改革の連続
- ④ 斉昭謹慎から復権
- ⑤ 斉昭薨去

〔2〕 斉昭の性格

- ① はじめに
- ② 種痘
- ③ 郷校
- ④ 藩内検地
- ⑤ 廃仏毀釈
- ⑥ 寺社奉行騒動
- ⑦ 蝦夷地開発
- ⑧ その他

(3) 結城寅寿

〔1〕 寅寿概暦

- ① 幼年期
- ② 出仕から執政へ
- ③ 失脚から処刑へ

〔2〕 寅寿の性格

- ① 育ちの環境
- ② 寅寿の性格が関わった政治的事柄

- (4) 藤田東湖
 - 〔1〕 東湖概略
 - ① 生まれ
 - ② 謁見から謹慎
 - 〔2〕 東湖の性格
 - ① 私生活面での個性
 - ② 家族に対しての東湖
- (5) 藤田と結城の違い
 - 〔1〕 政治的面での比較
 - ① 政治上で重視したものの違い
 - ② 二人の年齢差がもたらしたもの
 - ③ 東湖、寅寿を継いだ者たちについて
 - 〔2〕 党の統一の仕方の差異
 - ① 東湖中心の派閥
 - ② 寅寿中心の派閥

2. 党争の流れ

- (1) 両党の結成
 - 〔1〕 党派の源流
 - ① 彰孝館学派
 - ② 水戸藩主跡継ぎ問題
 - ③ 「天狗党」呼称
- (2) 斉昭の四台藩政改革
 - 〔1〕 門閥派の反対した改革
 - ① 改革開始
 - ② 門閥派の処罰
 - 〔2〕 四大改革
 - ① はじめに
 - ② 定府制廃止
 - ③ 藩士の土着
 - ④ 弘道館と郷校
 - ⑤ 藩内検地
- (3) 結城寅寿採用から政治党争へ
 - 〔1〕 蜜月から亀裂まで
 - ① 寅寿登場

- ② 寅寿用達へ
- ③ 寺社奉行の入れ替え
- ④ 寺社奉行変更の余波
- 〔2〕 水戸学とは
 - ① 初期水戸学と光圀の考え
 - ② 後期水戸学と尊皇攘夷
- 〔3〕 斉昭処罰・結城派の躍進
 - ① 斉昭謹慎とその理由
 - ② 東湖と寅寿の処分の差
- (4) 未研究資料解釈
 - 〔1〕 「日光文書」解釈
 - ① 寅寿の書簡について
 - ② 日光社参に関する書状
 - ③ 内容についての考察—金右衛門について—
 - ④ 内容についての考察—行列人数について—
 - 〔2〕 稼堂の掛け軸に対する解釈
 - ① わからない一本の軸
 - ② 推定
- (5) 結城寅寿謹慎・斉昭復権の微動
 - 〔1〕 斉昭謹慎解除
 - ① 藤田派の挽回策
 - ② 「天狗党が正党で諸生党は奸党」の呼称の起源
 - 〔2〕 斉昭藩政関与まで
 - ① 黒幕としての結城寅寿—長女美智誕生—
 - ② 斉昭の反撃
 - ③ 地図上の結城の屋敷位置
 - 〔3〕 嘉永年間前後の結城派・藤田派の交流
 - ① 3つの資料について
 - ② 寅寿と東湖のつきあい
 - ③ 肖像画の画家
 - 〔4〕 結城寅寿終身禁錮まで
 - ① 平安の終わり
 - ② 結城派—斉罷免
- (6) 東湖圧死と寅寿処刑
 - 〔1〕 東湖の死

- ① 攘夷論主張
- ② 安政の大地震
- ③ 藩主慶篤の弱腰
- 〔2〕 処刑へ
 - ① 斉昭の杞憂
 - ② 寅寿罪状と処刑
- (7) 嫡男結城一万丸の年齢推定
 - 〔1〕 結城一万丸
 - ① 推定する目的
 - ② 関係ある記録とその解釈
 - ③ 一万丸の関与の程度
- (8) 寅寿処刑後
 - 〔1〕 天狗騒動
 - ① 水戸藩激派活動
 - ② 斉昭の薨去
 - ③ 天狗党騒動
 - 〔2〕 寅寿処刑が兵を挙げての闘争につながった理由
 - ① 党争激化の要因
 - 〔3〕 諸生党狩り
 - ① 諸生党後権と崩壊
 - ② 武田金次郎の諸生党狩り
 - ③ 諸生党の戦いのもう一面
- (9) 郷土と支配層・上級藩士の繋がり
 - 〔1〕 政治的関わり
 - ① 結城派・藤田派郷土の地位と関係
 - ② 結城派郷土の盛衰
 - 〔2〕 血縁関係
 - ① 結城派郷土の関与

3.その後の水戸藩・水戸藩士

- (1) 明治期
 - 〔1〕 本当に改革は是であり、江戸期の日本は非であったのか
 - ① 日本という国
 - 〔2〕 諸生党のその後
 - ① 諸政党残党の活動

- ② 今なお残る確執
- ③ 慰霊祭にて
- ④ 天狗・諸生犠牲者の碑
- ⑤ 中山家と結城家の関わり
- (2) 今に至るまで—エピソードとこぼれ話—
 - [1] 脱藩
 - ① 逃亡
 - ② 隠遁
 - ③ 巻物返却
 - [2] しこりをとく人々

《結論》

《反省と今後の課題》

《感想》

《謝辞》

《参考及び引用文献》

《資料》

《年表》

《序文》

討つもはた 討るるもはた 哀れなり
同じ日本の みためと思えば

幕末水戸藩の動乱で処刑された武田耕雲斎の辞世の句である。

動乱のために、討つ側も討たれる側も同じ日本人であり、日本の「御為」を思っている、哀しさや虚しさを詠った歌である。

またこの歌には

討つもはた 討るるもはた 哀れなり
同じ日本の みだれと思えば

と詠ったという説もある。こちらの一首ならば、討つ側も討たれる側も同じ日本の「乱れた」時代に生きなければならない悲しみを詠っている。

武田耕雲斎と対立していた市川三佐衛門は、

君ゆへに すつる命は おしまねど
忠が不忠に 成るそかなしき

と、主の為に命を捨てて行動して来たが、時代の流れで忠義だったものが不忠義になる不条理を嘆いている。

いずれの辞世の句にせよ、同じ乱世を生きた者が、変動甚だしい政道の不条理さを嘆き、主義主張の違いにより官軍賊軍と名付けられ、どちらが官か賊かも刻々と反転し、その中で殺しあうことの虚しさを、哀しんで残した歌である。

この二首が詠われた舞台になった「幕末・水戸藩」。

水戸藩の争いは、動乱期・幕末の日本をさらに混乱させた。

江戸時代の終末の大きな要となった水戸藩党争には、様々な側面がある。

最後に勝ち残った「天狗党残党」が自らの都合の悪い過去を隠すために変えた歴史なのか、滅ぼされた「諸生党」が自らの正当な部分を誇張した歴史なのか。

だが今、俗説として通っているのは、勝利を収め、明治政府により「官軍」とされた天狗党から見た記録が主である。

敗者には口はなく、勝者の歴史のみが創られた。

どちらが正しいと断定できる問題ではないが、その「歪められた真実の歴史」を勝者・敗者の両者の歴史を通して、できるだけ真実へと近づけたい。

特に、天狗側——勝者の——資料は公開されないものも多くある。それに、頼んだところで見せてはくれないだろう。そのうえ、詳しい資料は無いに等しい。戦闘で焼失したか、敵方に奪われ破られたか。

水戸藩の党争について上塗りされた「事実」しか、今は光が当たっていない。その「真実」は一部しか解明されてないといっても過言ではないだろう。実際、後述する結城一万丸の生年は不明のままである。結城寅寿処刑についても何説も通り、罪状もあやふやである。

この現状では新たな面の研究には限界がある。また、僅かに残る家の資料も光を当てていないままである。そこで私は、以上に述べた問題も含めそこから自分なりに展開し、考察する。また、今通っている俗説の信憑性についての疑問にも一石を投じられればと思った。

今、この時代に水戸藩の動乱についてのテーマを選んだ私は、これに二つの意味込めた。

一つは、真実の歴史に近づくことで、党争のもっとも大きな傷跡として残る水戸両党の「しこり」の解消に少しでもつながるのではないかという思い。

もう一つ、こちらが重要なのだが、この水戸の動乱が今問題となっているアラブ、中東の紛争、東欧、アフガニスタン近辺の民族紛争及び宗教党争等と共通点を見出すことが出来ること。そこに、現代の問題解決に繋がる視野を見いだせるのではないかという思いである。

「歴史研究とは現代の社会に役立たせることが出来るものである必要がある。」

これは今年、2005 年で没後 30 年になる歴史学者であり、社会学者でもあるアーノルド・J・トインビーの言葉だ。

意味を転じれば、現代の社会に役立たせるように結び付けることが出来なければ、歴史としての意味を持たないと言える。

歴史を学ぶということは、温故知新の考えにも基づく。

「古きを学んで新きを知る」の実現を行って初めて、歴史学の正当な意味が持てると私は考える。

私は「水戸藩の動乱」といえる日本史を調べると共に、それを通しての現代の問題解決につながるような、現代に反映できる視野を見出そうと考えた。

《本編》

1. 幕末水戸藩党争に関する人物概歴

幕末水戸藩について考える際、当時の社会に多大な影響を与えた改革派・保守派の党派争いが重要となってくる。

ここでは、水戸藩についての概要と党派争いに於いて重要と思われる各党の首領について触れたいと考える。ここでは、党派争い初期の党を指す。理由としては、初期の各党の首領となった者達の生き様、死に様が、幕末・維新後の惨状を引き起こす原因として一番強いと考えられるからである。

(1) 水戸藩

〔1〕 概略

① 水戸藩建立

関ヶ原の合戦以前、常陸の大半と下総、そして陸奥の一部は禄高五十四万石・佐竹氏の国であった。

関が原合戦後、家康は五男・武田信吉を下総佐倉より移封して、十五万石の水戸城主としたが、信吉が病床につき慶長8年（1604年）9月に没した為、十男・徳川頼宣を後継ぎとし二十万石を与えた。

慶長14年、御三家設立の際に頼宣を紀州へ転じ、十一男・徳川頼房に二十五万石を取らせ水戸藩城主とした。

頼房入国の12年後、水戸に東照宮が立てられる。東照宮は神仏習合の神社であり『仏が神という仮の姿をとってあらわれている、それが東照大権現の家康』(1)である。斉昭が神道統一政策を行った際、東照宮の存在が彼の失脚へと繋がった。

その後水戸藩は、三代水戸藩主・綱条時代に幕府より三十五万石と公認される。

これが水戸藩設立の主な流れである。

② 水戸藩の位置づけ

水戸藩は、徳川幕府の制度上で尾張六十二万石、紀州五十五万石と並び、徳川御三家と称された。御三家は、徳川宗家の下で最も家柄の高い三家である。

水戸藩は御三家内でも特異な存在であった。

第一に、尾張藩主、紀州藩主の極位極官は従二位権大納言であったが、水戸藩主の極位極官は従三位権中納言止まりであった。

第二に、水戸藩のみが参勤交代を免ぜられていて、代わりに藩主の江戸在住が定められていた。これを定府制という。他藩と違い藩主が自国（水戸）へ帰ることは少なく、帰国の回数は『初代頼房、二代光圀（義公）が十一回、三代綱条（肅公）が四回、九代斉昭（烈公）が3回、中には八代斉脩（哀公）の如く一回も帰国しない藩主もいた。』

(2)

また、藩主が江戸在住のため、藩政はもっぱら江戸が中心であり、水戸城の管理は城代に任せられていた。藩政上で問題が起きた場合は、水戸において討議を重ね決定した事項を江戸に上がって藩主に報告、そして容認を得るやり方であった。

この特異な二政府制度が後の時代の藩政に混乱を生む事になった。

例えば、藤田東湖の斉昭擁立運動の際、保守派・改革派に党派が分かれていた為、各派が個別に討議を行い、別々に物事を進めていった。東湖等改革派は連判状を多く獲得して江戸に上がり、藩主に自派の主張を説得、容認させ斉昭擁立にこぎつけた。これは「南上」と呼ばれるようになる。この『連判状の多いほうが南上して勝利者になるという悪例』(3)はその後の党派争いにも使われ、水戸と江戸の二政府制度が党争を一層混乱化させたのである。

(2) 水戸斉昭

〔2〕 斉昭概歴

① 徳川斉昭とは

徳川斉昭は、七代水戸藩主治紀を父に持ち幼名は敬三郎、寛政 12 年（1800 年）3 月 11 日に三男として生れた。母は外山といい大納言烏丸光祖の次男・烏丸資補の息女で治紀の側室の地位にあった。といっても、治紀の正妻、紀州徳川家・治貞の息女は早くに亡くなり長男以下、皆側室を母として持った。

長男は斉脩(後の哀公)が既に存在し、斉昭は部屋住みの身の上であった。四歳のとき母を師として勉学をはじめ、7 歳のときから会沢正志斎が斉昭の教授につく。会沢はこの時代の水戸学の権威・藤田幽谷の弟子である。(4)

② 斉昭擁立

文政 12 年（1829 年）10 月 4 日八代藩主斉脩薨去。(5) 世子はおらず、ここにきて斉脩存命以前から表面化してきた後継ぎ問題が激化する。

斉脩の生母・浄性院は斉昭の生母・英想院と不仲であった為、保守派の重臣達が推す家斉の四十五子・清水恒之允を後継ぎとして推進した。この建前は『水戸家は東照宮の血統である。将軍家はもとより東照宮の血統である。従って、水戸家と将軍家は同一の血統であるから、清水公を水戸藩主として迎えてもさしさわりの無い』(6) というものである。実際は、将軍家の子息を藩に迎えることで、幕府から財政の補助を受けられ、また大奥に於いても力が持てるという目論見である。

それに対して、藤田東湖ら、身分の軽い者が中心となった改革派は斉昭擁立を主張した。このとき、藤田東湖、幽谷とは学派争いをしていた立原杏所（立原翠軒の長男）や青山延于（立原派）など、保守的思想を持つ者達もが手を結び、後継ぎとして斉昭を推

した。(7)

このことから伺えるように斉昭擁立の争いがそのまま、後の天狗党・諸生党の党争に繋がるわけではない。この後、結城寅寿が登場し本格的な政治党争が始まった際には、保守門閥派の中に立原派の流れを汲む者達が多く存在する。(8)

『東湖と政権を争いしは結城寅寿（名は朝道）にて結城の薦引せし人材には立原派の者少なからずここに於いて学問上の党派と政治上の党派と相混して藩庁の上に相亀裂し日夕ばく克争乱せしかば次第ここに熱度を増し来たつて遂に決裂四出復た收拾すべからずに至りしなり』(9)

「東湖と政権争いをした結城寅寿の派閥の者には立原翠軒派のものが多くいた。ここにおいて、政治上の党争と学問上の党争が混在し互いの間の対立は激化した。」(上記大意)

この改革派（革新派とも言うが）の中でも藤田東湖が中心となり、「南上」を行った結果、半ば強引に幕閣にいた清水公擁立派を説得し、清水公擁立は阻止され斉昭襲封となる。何よりも斉脩の遺書より、斉脩が九代藩主に斉昭を望んでいたことが明らかとなったため、斉昭擁立派の勝利となった。同年 10 月 14 日斉昭 30 歳の秋である。

③改革の連続

同年 12 月から翌年 2 月にかけてまずはじめに斉昭は清水公擁立派である門閥派の処罰を行う。(10)

そして翌天保元年(1830 年)、斉昭は藩政改革をはじめめる。1 月には農民に向けて質素儉約令を発し、封事の上申認可、奢侈禁止令発布、3 月には家中に風俗取り締まり令をだす。同年、有栖川宮織仁王王女吉子と婚約を結ぶ。(11)

天保 4 年斉昭 34 歳、第一回目就藩。10 月に領内の火葬を禁止。光圀以来武士は土葬と決められていたが、このときを持って庶民にもそれが及んだ。(12)

天保 5 年、前後に四回領内視察をし、2 月江戸の藩邸火災に合う。4 月 26 日江戸へ帰府す。(13) 9 月神武天皇陵修造を、10 月蝦夷地開拓を、11 月十二万石相当の土地増封をそれぞれ幕府に要請。(14) 天保 6 年(1835 年)には幕府より毎年五千両づつ五年間にわたり下賜金を頂く事が決定した。(15)

天保 7 年(1836 年)斉昭 37 歳の 2 月大砲の鑄造を命じ、3 月 29 日長く続いてきた家臣の常府制を廃止している。7 月には那珂湊に砲台を築いた。

このように、斉昭は襲封後からただちにめまぐるしいほどの急進的な改革を続けていた。

天保 8 年(1837 年)、半知借上げを実施。これは、天保 10 年(1839 年)に再度実施された。半知借上げとは藩の財政を助けるために家臣の知行地の年貢の半分を領主の蔵に納入させることにあたり、家臣に負担のかかる制度である。

斉昭が2度目の就藩（天保11年(1840年） 斉昭41歳）時これが家臣たちの怒りにかう事になり、「半知借り上げを廃止するか、今回の就藩を中止していただきたい」との旨が、保守派の小山小四郎、伊藤主殿、額田久兵衛等、約七十名より伝えられる。(16) 東湖が彼等を諫めた為、事無きを得たが、斉昭は半知借り上げの廃止を進言した家臣を処罰するに到った。

左遷され鬱憤のたまっている門閥派を刺激する行動に斉昭はでるべきではなかった。が、そこを踏みとどまらなかった面からも斉昭のいきごみの大きさと軽率さ等感情的な面が多く伺える。

2度目就藩の際、7月24日藩内総検地を行う、天保13年(1842年)に終了。この検地で名目上の石高は減ったものの豪農の隠匿していた陰田が多々発見され実際の石高は上昇した。

天保12年、この頃、財政不足を助ける政策として郷土制がよく行われるようになった。郷土制とは、農民、町人から納金させて見返りとして士族に名を連ねさせることである。同年、幕府老中より水戸にとどまり国政を行えとの内意が届く。これに対し、斉昭を水戸から遠ざけようとする策であるという風聞が流れた。(17)

天保13年(1842年)、検地終了、12月には種痘が開始される。この種痘開始は、斉昭の改革の中で一番革新的なもので、また利用価値のあるものであったと思える。

天保14年(1843年)8月21日、水戸東照宮を唯一神道に改める。これは斉昭謹慎の際の罪状の一つに数えられる。

④斉昭謹慎から復権

天保14年(1843年)(12月2日より弘化元年)、斉昭45歳。「2. 党争の流れ (3) [3] ①斉昭謹慎とその理由」で詳説するが、幕府より致仕・謹慎を命じられる。嫡男・慶篤が藩主となって、同時に三連枝が後見につく。斉昭の改革は一旦頓挫することを余儀なくされる。また、改革派も一掃される。

慶篤は当初、斉昭とは不仲であり主に門閥派と手を結んでいたが、結城寅寿の処刑など保守門閥派の力が弱まった後は専ら改革・天狗党の側へついた。慶篤藩主の時代は党派争いが激化し慶篤は「藩主」と名ばかりの地位についた人形のように扱われていたようだ。言いようによっては朝令暮改、日和見主義の迷惑な人物であったともいえる。しかし、過激な党争の中で自身を護る最も適切な対応であったとも思われる。

同年から翌年(弘化元年(1844年))にかけて、斉昭の謹慎解除を要求し南上する者が多い。また、同年10月には雪冤運動が頂点に高まる。

幕府は11月26日斉昭の謹慎解除をする。(18) 但し、藩政関与は認めなかった。

弘化2年(1845年)、斉昭は老中阿部正弘へ密書を送り保守門閥派重臣の結城・興津・尾羽・大嶺・藤田晴軒の処罰を願い出るが、老中阿部正弘はこれを拒否。同年2月、斉

昭復権運動が高まる。(19) これに伴い、藤田東湖等の蟄居が解かれた。彼らが水戸謹慎へ刑を免じられると共に改革派の勢いが増すことになる。

弘化4年(1847年)老中阿部正弘より付家老・中山へ結城の処罰と、東湖等『義民』の釈放を命じる。(20) これは斉昭・東湖等改革派にとっては大きな前進であった。

嘉永2年(1849年)、斉昭50歳、藩政関与を許可される。9月には将軍が小石川邸へ先代藩主夫人である妹の様子を見に赴き、斉昭、謁見する。また同月、三連枝の後見が解かれる。これをもって、斉昭の権勢完全に復活、改革派の勢いが盛んとなる。(21)

嘉永5年(1852年)11月に、将軍に召還され城中の宴へよばれるなどして厚遇される。

この頃から、海外情勢の悪化に伴い斉昭の主張や献策が幕府にとって重要な位置をしめ始める。

嘉永6年(1853年)6月、老中阿部正弘より国防についての意見を問われ、7月には幕府海防参与に列する。(22) 同7月10日、『海防愚存』を幕府へ提出し、12月には大砲74門幕府へ献上し五千両を借り入れる。

しかし、幕府が海外との和親に傾くと、それに反対し嘉永7年(1854年)(11月27日からは安政元年)に3月18日海防参与辞任を申し出る。しかし、外圧の高潮に危機感を感じた幕府は、煙たがりつつも斉昭の政策を重視せざるを得ない。その動きは複雑になり、7月5日斉昭は幕府の軍政参与となる。11月、外圧に対する防衛に力を入れる斉昭は、自らの発議により鐘を壊して、大砲鑄造する為の太政官符を下す。

この頃の斉昭の登城は多く、毎日の登城には及ばないとの命令を受ける。(23)

安政2年(1854年)4月以前から潰えていた鳥迫い狩りを復活させる。安政2年8月には幕政参与となり、同年11月那珂湊の反射炉第一工事完了。反射炉は大砲鑄造の為の精錬施設である。(24)

しかし、安政の大震災で片腕たる藤田・戸田——いわゆる両田——を失い、心情的な焦りが表れる。幕府とも方針がずれ始めたため、安政4年(1857年)、斉昭58歳の7月に軍政参与を辞退する。これはペリー来航による開国を反対したもので、幕府の攘夷に消極的な態度に憤慨し、『国内での外国貿易を一切拒否し、自分がアメリカに赴いて出貿易する』(25)と堀田老中に提案。が、あまりに無謀な案で退けられた。

安政5年(1858年)、6月斉昭・一橋慶喜等、不時登城を行う。日米修好通商条約締結に猛反対の姿勢を示すが、7月には、不時登城を責められ謹慎処分に処される。8月、朝廷より戊午の密勅が下る。この密勅には外圧を排せよという内容が主であった。その為、当時斉昭は歓喜したのであるが、これが原因となり賛否で天狗党は鎮派・激派に分裂。幕府からの密勅返納命令と、藩内激派の同年9月に行われた小金屯集の板ばさみによりどちらを取る事も出来ず、斉昭の立場はますます危ういものになる。

安政6年(1859年)8月ついに斉昭は幕府より国許永蟄居を命じられ、9月斉昭江戸を立ち水戸に帰する。(26)

⑤齊昭薨去

その翌年の安政 7 年（1860 年）、齊昭 61 歳心臓の病が原因となり薨去。毒殺との説もあるが、有力な死因は心筋梗塞である。

死の間際で『戸田（銀次郎忠則）を呼べ、戸田を呼べ』（27（）は文献番号 21. の著者注と思われる。）と叫んだというが、そこで事切れた。これは、藩士床井親徳の「秘笈日録」にある記事ということで、「戸田が当時生存中であり、たまたま出仕していなかった」（上記大意）と書かれている。しかし、齊昭死去の際、戸田銀次郎忠則はもうこの世から去っているのだ。つまり、「戸田」が間違っているのか、日記の著者が戸田が生きっていると勘違いをした為の混乱か、あるいは 21. の著者の解釈である「銀次郎忠則」でなく別の戸田某が用達にいたかのどれかであろう。推測すると、齊昭の記憶の混乱により、もう亡き片腕の戸田を呼んだと考えられる。

その後、烈公と諡され、そう称されるようになる。

徳川齊昭、通称烈公——烈公は齊昭の死後つけられた呼び名である。時代を先走ったほどの急な改革や、波乱万丈の人生により「烈公」の呼び名がつけられたのであろうが、齊昭には「尊皇攘夷」の改革的な思想の反面、「倒幕」の思想は全く無かった。このような保主的な面も多々見られる。そのために、水戸藩は多くの優秀な人材がいたにも関わらず、彼等を皆党争によって失いそれを持って時代に取り残されることになった。

〔2〕 齊昭の性格

①はじめに

齊昭の性格を見るうえで、それに関係する齊昭が行った代表的な活動を挙げると、下記のようなになる。

1. 種痘(有効な改革)
2. 弘道館・郷校の設立(効悪両面を出してしまった改革)
3. 藩内検地(財政を助ける改革)
4. 大砲鑄造(内容的には改革、思想的には攘夷)
5. 廃仏毀釈(大混乱を招いた、庶民に迷惑な改革)
6. 蘭学書の交換・異国研究(内容的には革新、思想的には攘夷)
7. 廃仏毀釈時のそれに伴う寺社奉行変更(藩内家臣の混乱を招いたの改革)
8. 蝦夷地開発(水戸藩石高上昇のための政策)

以下、この事項について解説を加えてゆく。

②種痘

1. 種痘は、斉昭が行った改革の中で一番近代的であり、有益に実を結んだ改革である。

まず、種痘は天然痘を予防するものである。天然痘とは別名痘瘡といい、痘瘡ウイルスが原因となって気道粘膜から感染する伝染病だ。高熱や湿疹が主な症状で、感染性、死亡率ともに高い。今となっては身近に感じられない天然痘だが（1980年にWHOによって絶滅宣言が出された）、江戸時代には日本各地を襲い村一つ単位で死滅させた。人々にとってはまさに脅威であったが、西洋でも開発されてまもなくの種痘法が伝わった。しかし、国内ではなかなか普及することはなかった。

水戸藩は種痘法伝来以前から種痘の研究を重ねていた。(28) その為、早い時期に斉昭が、藩医でシーボルトに学んだ本間玄調を呼び種痘を実施した。日本の中で種痘がきわめて初期に行われた記録は1847年の水戸藩にある。

これより2年前の天保6年(1835年)に斉昭は今の丹下牧場で牧場を開場した。是は種痘の「牛痘法」とかかわりがあるように思える。『蘭国から長崎へ齎した牛痘法よりも先に着眼されたのである。又牛酪を製して博く施し、自身には早くから牛乳を愛好された。』(29) ともされ、斉昭の種痘に対する情熱が伺い見られる。(30)

1847年、弘化4年(1847年)この年天然痘流行。本間玄調の力を得て藩内に種痘を実施。(31) しかし、一旦感染させることに対する恐怖も強く、天然痘の死亡率は高いというのになかなか普及されなかった。

〈本間玄調像〉

本間玄調は文化元年(1804年)

茨城郡小川村で生まれた。漢

医と蘭医がお互い刺激しあい、

交流している時代に育った。

医師であると同時に有益な

医療行政を行った。(32)

これは日本人の中に根強く残っている先入観、視野の狭さ——引いて言えばそれが鎖国の原因の一でもあるのだが——によるものである。種痘の効果を信じずにただの外国

から流入した迷信であると頑なに拒絶するものも多かった。

そこで斉昭は家臣に奨励を働きかけ、また斉昭自身も種痘についての知識を深めるなどの努力をしたようである。

種痘に関する手紙を天保9年(1838年)3月2日に家老・若年寄・側用人へ、天保13年(1842年)1月17日には小姓頭取へ、同年10月18日には郡奉行へ差し出している。以下はその内容である。

『天保九年此三月二日家老等へ命じたる手簡 兼て承り居候植痘瘡とて二ノ腕へ牛の痘瘡を取付け候へは至て軽くいたし候処牛の痘瘡は難得者故猿の痘瘡を用候処是も難得候故、人の痘瘡を用候よしにて二郎丸存生の節右の義申付候処 道圓位にては不安心故いたし候ともよく存候者へ申付候方と申、夫切にいたし申候処此度方庵下り候処右の者は定て長崎にて存居候・・・中略・・・今日早々方庵を呼寄委細に承り可申候也 三月二日 家老共 若年寄共 側用人へ』(33)

書中に数度、方庵の名が出てきている。柴田方庵は牛痘の種を斉昭の為に得てきた医者だ。水戸に限らず各地でも、種痘を行い広める一役を担った。

1850年、嘉永3年3月江戸から柴田法庵が到着。斉昭に牛痘株を渡した。1851年、嘉永4年(1851年)4月斉昭は郡奉行に命じさせて種痘を実施させている。

柴田方庵は水戸藩多賀郡会瀬村(現在の日立市)の出身である。寛政11年(1799年)に生まれ、文化10年(1813年)に14歳にして江戸で朝川善庵に儒学を学んだ。学友として関係したのは本間玄調、伊東玄朴、戸塚静海等、藩政改革の種痘時に名を馳せる者も居た。天保2年(1831年)6月に32歳で長崎は遊学へ行く。蘭法医学も修めつつあった方庵は数年にして長崎にも認められる医術、学問を得る。方庵の目標は学問を収め水戸に帰り医者として開業することであった。天保4年(1833年)には来春帰国予定であったが、長崎の人々に引き止められ帰国を延長した。また、方庵は長崎にて種痘の達人と言われた。また、外国人に対しては長きにわたり診察、治療を行っている。だが、父母兄は彼の長崎在中に没した。嘉永2年(1849年)江戸に上がる途中で種痘を行いながら小石川邸へ向かう。しかし、嘉永2年12月15日長崎に急用の為もどっていった。嘉永3年の1月に長崎に到着、用を済ませてからすぐに往来手形を申請し江戸へ再び向かう。3月27日に小石川邸に到着し斉昭に種痘の苗を献上する。このまま長年の願望であった水戸帰郷を行い開業するのかもしれないが4月13日駒込中屋敷の島村志摩を訪ね「ロンドン遠眼鏡壺本」を差し上げ、19日に斉昭からの拝領品を受け取り、5月江戸を立つ。そのまま長崎へと戻った。

そしてその後の年月を長崎での治療に費やし、日本的に見ても種痘の普及に一役を買った人物であった。安政3年(1856年)10月8日長崎で病没。ついに水戸に帰ることはなかった。(34)

『水戸表江罷帰候積、新宿舟渡シ場迄参り故障之義有之引帰ス』(35)

嘉永3年(1850年)4月8日、方庵は『故障』により水戸の地へ足を踏み入れなかった。今となってはすべてが過去の闇の中であるが、その故障は単なる「家族の死」というものであったのか、「身体の衰弱」であったのか。海外が目の前にある長崎の地で暮している者の視点が、水戸や江戸の者たちとずれているのを感じたのか、それともほかに方庵にしかわからない理由があったのかは定かではない。方庵著の『日録』などにも触れられていない件もある。方庵は自分の内面に関して、徹底した秘密主義をもっていたのかもしれない。

水戸藩をはじめとする日本の種痘は、世界的に見ても先端を進むものであった。種痘という技術自体が、斉昭が種痘を行った少し前にヨーロッパで始めて確立されたものであった。

ヨーロッパ自体でも確立して間もない技術が、少し遅れたとはいえすぐに日本に伝わっている。情報吸収、活用能力は江戸期でも活発だ。だからこそ、日本がここまでの高度経済成長を遂げるにいたる技術情報を日本はすぐに吸収することが出来たのであろう。斉昭が主導となった水戸藩の防衛医療は、他にもコレラ流行などに多くの対策を施している。(36) 以上の点から斉昭は迷信に惑わされない理性的な判断力を持ち、有益な蘭学の吸収には柔軟であったことがわかる。

③弘道館と郷校

2. 弘道館と郷校の設立は斉昭が力と予算を大きく傾けた改革のひとつだ。平たく言えば後に述べる水戸学の忠孝一致を教育するものであり、改革思想に拠る物であった。(37)

斉昭は天保8年(1837年)に東湖に藩校設立の草案の起草を命じ、青山延于、会沢正志斎等による推敲を重ね、翌年3月に今言う「弘道館記」が完成した。

藩校の設立は分離してしまった学問と政治を一体化させ反省の向上を図るものである。『忠と孝は不可分だ、文と武は矛盾しない、学問と事業は、効果においては同じだ』(38) という思想に基づく。(39) 弘道館はいわゆる総合大学的なものであって、設立にも長い時間がかかった。天保11年(1840年)に斉昭は帰国、執政・渡辺、参政・戸田、側用人・藤田を弘道館係に任命する。その時から本格的に工事も進み天保12年(1841年)には仮開館式が行われた。天保14年(1843年)に医学館を増設など規模は増し、本開館式が行われたのは16年の年月を隔てた安政14年。東湖はもう圧死し、寅寿も処刑後。大荒れに荒れる天狗・諸生の党争の真只中のころである。

一方、郷校は武士を教育するためと、農村上層部を教育するため二つの意義があって、水戸各地に作られた。郷校に関しては、闘争の原因に関わる四大改革の一つとして「2.

党争の流れ (2) [2] ④郷校」に後述する。このように斉昭は水戸学を重視し、その啓蒙には大きな力を注いだ。思い込んだら一直線の斉昭の激しい気性もが表れている。

④藩内検地

3. を斉昭が実行した結果は先にも書いたように名目の石高は減少、実際は上昇した。家臣の実力、権力は知行で現される場合が多い。大名の場合実力は、個々の領地の石高で示される。名目上の石高が減ると言う事実は他の大名ならば耐えられない打撃だ。が、ここで斉昭は名目上の石高の減少は気に留めず、実質の石高が増加したところに満足の意を示した。この点からは、斉昭の「見目を重んぜず実を取る」性格と水戸藩の財政の危機の切迫性が伝わる。

⑤廃仏毀釈

4. 5. 6. より廃仏毀釈を斉昭が行った理由のひとつは金属を集めて、大砲を鑄造することである。もうひとつは、天皇の祖先を神と考える神道に宗教を統一させようとしたためであった。

大砲鑄造について新たな外国の強力新兵器を、国内で作成しようとした点では、今までにない革新的な部分が見られる。しかし、斉昭が大砲を製造した理由は「攘夷」「鎖国の維持」である。この二点は斉昭が死ぬまで掲げ続けた信念であった。黒船来航など、維新の予兆が現れ幕閣にも開国を主張するものが多くなった時代、あくまでも「保守的」に攘夷を主張し続けた。

また、神道に統一した事については、幕府の建前は「天皇」を重んじ將軍はそれを護る役目となっているので、保守・古風の考え方である。だが実際、幕府が一番重んじたものは「東照宮」であり家康である。その面から見れば、改革と言える。が、改革という言葉より古風、逆行したといったほうがしっくりと来るだろう。これは、王権神授説と同じ考え方で、民意の反響からは程遠い。

総合的に言って、斉昭は革新的に見えつつ極めて保守的な頑なさがあったと思われる。

6. については 5. とほぼ同じことが言える。斉昭は実際に蘭学書を読み学んだ。(40) しかし、蘭学を認めたわけではなかった。逆に廃仏毀釈・神道統一時に、邪教として仏教・キリスト教を排除すると同時に、学問としての蘭学も排除しようとした。このことから、文献番号 4. 5. と同じ古風な考えも伺える。

また、文献番号 4. 5. 6. より、当時大衆に広まっていた蘭学、根付いていた仏教を急激に排除しようとする斉昭がわかる。宗教、思想の改革は時間をかけてゆっくりと行うのが得策である。今まで毎日信仰していた対象を変えるということは、日常生活を根本から覆すに等しい。これを踏まえて考えれば、廃仏毀釈等、宗教の変革から、斉昭の過激さと焦りが読み取れる。

⑥寺社奉行騒動

7. の寺社奉行の変更もまた斉昭の保守的な一面を出している。

「2. 党争の流れ (3) [1] ③寺社奉行の入れ替え 及び ④寺社奉行変更の余波」にも後述するが、廃仏毀釈を行う寺社奉行は庶民からの憎まれ役である。その役職に結城派は藤田派の今井を左遷した。これに対し東湖は斉昭に辞表を提出するなど抗議の姿勢を示した。が、斉昭はこのとき結城寅寿の意見を通した。結城寅寿もまた、東湖と同じく斉昭に目をかけられて藤田派中心の政権の中、執政にまで取り立てられた人物である。このとき斉昭が結城を重んじたのは「東湖の才能は希であり急進的な改革を進める今には必要であるが、その才能が望めるのは一代限りであり安定したその後の藩政を任せられるのは寅寿の様な門閥家達である」という思いと「また、身分の軽い東湖に任せ政策が失敗するよりも、門閥家の寅寿に任せ失敗した場合のほうが先祖に顔向けが出来る」(9) という思いからである。

また、斉昭がここで今井が寺社奉行に適切と主判断を下したのではないと言い切れる理由は今井に軽率なところがあった点を斉昭が知っているはずだからである。「2. 党争の流れ (4) [1] ③内容についての考察—金右衛門—について」参照。

これは、改革のみに重点をおかず、藩政の安定した時期までもにも考えを巡らした斉昭の慎重深さも伺える。また、この文の中の「先祖に顔向けできる」という一語は、幕府の世襲制度に影響され、改革にのみ専念できなかったという斉昭の「古風的思想」ひいては「保守的思想」を表している。

ここで、3. で述べた「斉昭の見目を重んぜず実を取る」と言う面との矛盾が見られる。先祖に顔向け云々と言うが、実際は世間の風当たりと、自分の心情の中での躊躇でしかない。実を重んじるのならば、ここでは下から引き上げ、才気に富む東湖を取るべきであった。が、斉昭は対面を重んじ寅寿を加護した。ここに斉昭の思想・行動の矛盾性も現れる。

また、別の見方をすれば、検地の場合は石高が上がり財政困難な水戸藩にとっては見目よりも重要と考え、寺社奉行においてどちらをとるかは所詮斉昭の下での党派争いでしかなく、特別東湖を加護する気もなかったのかもしれない。確かに、斉昭は擁立時改革派の力を借りた。しかし、そのことで、政権を改革派にとられることは避けようとした。藤田派が力を持ちすぎてしまったと斉昭の目には映り、力の均衡をとろうと今度は結城派に肩入れをしたと言う考え方も出来る。

斉昭はバランス感覚を持ちながらも、自負心が強く、その時々感情や思い込みに左右されがちである。

⑦蝦夷地開発

斉昭は天保 10 年(1839 年)当時脚光を浴び始めていた。蝦夷地を領地へと望んだ。あるいは、蝦夷地開拓を水戸藩としての事業として許可するよう、東湖らを使い強く幕府に働きかけていた。(42) 家臣や夫人とも蝦夷地へ渡ることを語り合っている。(43)

斉昭の考えは開発と防衛を目的にしていた。蝦夷人を懐柔し、日本の風習になじませ支配した後のロシアへの防衛を目的としていたのである。(44)

具体的な案を立てているが実現の可能性は低く、幕府の許可も下りなかった。卓上の空論で終わってしまった蝦夷地開発は、当時の水戸の財政や知識状況を考慮に入れば、斉昭の無謀でロマンチックな一面が現れた計画といえる。

⑧その他

また、質素儉約を命じ、自らも励行した。

全改革を通して斉昭は質素儉約を命じた。改革により酒の一切の禁止、一汁一菜と言う清貧ぶりである。この徹底には『斉昭公の儉約行われしこと見るにたれり』(45) との言葉を水戸に遊学した館林藩士・岡谷繁実^{おかのやしげざね}が残している。

が、これは、ただの儉約の成功に対する賞賛のみでなく、水戸藩士民の貧しい生活に対する皮肉も感じられる。斉昭の儉約は功を奏し水戸藩の士は、藩主一同正月というのに屋敷の直しもせず、つつましく生活している他、との記述もあり、信憑性は十分だ。

だが、その反面で並行して鷹狩りなどをおこない、風雅とともに防衛上の楼閣をも併せ持った好文亭への多額な投資もあった。この両面をあわせ見ると、斉昭は質素に酔いつつも一面で徳川宗家の流れを汲む上級武士としての豪奢が好きであった事が伺える。

また、斉昭の多くの著作や何千通という手紙も残されている。この面から見る限りでも活動的であり(46) 且つ、自分の中に一つの藩主を超えた者としての情熱(47) という狂信的部分も持っていたとも思える。

全体を通して考察すると、過激で感情的であり、慎重で、理屈屋、と矛盾が現れるが、ただしそれは別々の政策の面において言える事であり、すべての面に通して共通して言えることではない。活動の広さから大名としては才芸は群を抜いていた。けれども、藩主として行動するよりも、徳川の代表の一人として行動している面が目立つ。(48)

言い換えれば、要するに、斉昭は江戸幕府体制の範囲内に於いて古臭く、プライドが異常に高い。また目新しいものも好きでありながら、当時模範とされた質素を表面では装って満足するなど、有能で優等生であろうとし続けた。

また、斉昭の私生活面として『女色に卑しすぎ、病的なほどであったと述べている。』(49) と、藩主として表に出すには立派ではない面もあったようだ。これは、一藩の藩主でありながら子女が 37 名(内早世したものを除けば 18 人とはなるが)いた(50) ことにも表れている。子持ちで有名な将軍・家斉と肩を並べるほどである。

この多面性に水戸藩の人々は踊らされ、崩壊へと一歩踏み出したのではないだろうか。
斉昭の死後、天狗の激派は、攘夷を主張しすぎて倒幕へ走った。それは斉昭の意思であつたとは言い難い。斉昭は幕府の存続の中で尊皇攘夷を目指していたのである。

〈斉昭と慶喜の像〉

息子の教育に力を入れる。
優秀な血統を多く残すこと
が大切と考えていた。

(3) 結城寅寿

〔1〕 寅寿概歴

①幼年期

「寅寿」は通称で、本名は「朝道」である。当初は「晴明」であったが途中から「朝道」と名乗るようになった。この理由については不明である。「晴」と「明」の2文字は結城家代々よく使われる文字である。(51)

父親は結城晴徳(通称、数馬)であり、使番、歩行頭、書院番頭と出世したがそこまでで、文政7年(1824年)10月28日に享年46で没。嫡男・九十郎が早世したため次男・寅寿が後継ぎとなり家を継いだ。

結城の家は鎮守府將軍・俵藤太秀郷(藤原秀郷)の末裔・朝光が祖となる。結城一族の中でも、朝光の子の長男・広綱は下総結城の祖となり、次男・祐広は白河結城の祖となった。「資料14ページ 資料o」

南北朝の騒乱時、南朝の忠臣といわれた結城宗広は白河結城であり、その後秀吉から家康の時代に白河結城はお家騒動が主因となり没落、農民に身を落としていた。

二代水戸藩主・徳川光圀が大日本史編纂の為に資料探索を行った際、白河結城の末裔・藤左衛門定時の持つ古文書に目を止めた。そして、白河結城の没落を哀れに思い、扶持米を与え寄合組として水戸家に仕えさせた。また、中畠姓を名乗っていたため結城の姓を戻し、白河結城の宗家と定めた。(白河結城は三派に分かれ各々、自らが直系だと主張していた。近代までその宗家争いは引きずられていたが、調査により幕府が水戸結城を白河の宗家と認めたことが確認され決着した。(52))

水戸藩に仕えてからは、三代・結城晴久が従五位下諸太夫と官位を賜り、美濃守として執政になり千石を賜った。当時、晴久の権勢は盛んであり、水戸城炎上の際に殿閣城門等を再築した程であった。(53)

さて、寅寿自身は 文政元年(1818年)に結城数馬と渡部興次右衛門の息女との間で誕生。

当時の水戸藩主は斉昭の兄・斉脩であった。

文政7年(1824年)、父・数馬が死去して寅寿は家督を継ぎ千石を賜り、寄合組となる。

当時寅寿は6歳。嫡男としてではなく、当主として寄合の席についた。

文政10年(1827年)、天保3年(1832年)にかけて(寅寿9歳から14歳)勉学に励み、才気があるとの聞こえがある。「門前を通る時、読書の声を聞かない事は無い。」(54)と感嘆したものもいた。

②出仕から執政へ

天保4年(1833年)3月16日、藩内の評判により同年3月5日より帰国中の斉昭が目を留め、召しだされる。寅寿15歳で小姓となる。

寅寿の結婚した年については、この後直ぐと断定できる。まず

1. 天保6年(1835年)3月4日に寅寿17歳の時長女が夭逝(戒名・還到院本國知善童女)(55)

2. 『奥様は吉村道三郎と云小身の方より参られて名はお花さん名高い美人で結城さんよりは三ツ位お若く』(56)

1. より、遅くとも天保5年(1834年、寅寿16歳)頃までに結婚した事が伺える。

2. より、2、3才は若かったと考えられる。例え、子が産めるのを12歳からと考えたとしても、寅寿16歳の時(天保5年)、お花は13か14歳。寅寿15歳の時(天保4年(1833年))、お花は12か13歳。

それ以前の可能性も有りはするが、当時の家臣の家柄、結婚相手の世話好きな斉昭(57)の存在という事を考えると寅寿凡そ15、16歳、おそば近くの出仕を期に、身を固めたと考える。

天保9年(1838年)(寅寿20歳)。同年、6月14日寅寿、使番となる。この年の3月28日には次女が夭逝するという悲しみの後の喜びだった。

天保11年(1840年)1月11日、小姓頭となり、9月には若年寄となる。同年、弘道館の造営が始まり、その係と郷村係鷹方馬方支配を兼任する。

天保12年(1841年)3月、斉昭の北郷大能牧・旧跡視察の供をする。4月25日後勝手改正係を命じられる。

この頃、寅寿と交流する者が多くなる。寅寿はこの後、保守派(＝門閥派)の代表とされ、其派の首領として党争の渦中に巻き込まれてゆく。この頃交流した者は主に身近にいた保守派とも思える。しかし、寅寿は昔から改革派、農民を問わず広い交友があり、身分の高い者から、百姓や女性、子供によく親しまれていた。(58) また、『隠然人心の収攬をつとめ藤田派の人々にも好みて交際す』(59)

このように、将来の敵味方問わず幅広い交流があり、この頃から一派を形成しようなどというはっきりとした野心があったとは思えない。

天保13年3月4日(1842年)寅寿24歳、用達(執政)となる。天保11年からの3年間は『結城さんの勢いは飛ぶ鳥も落ちるようで、羨まぬ者はありません』(60)

寅寿が保守派と手を組み、派の首領と見なされるようになった頃から、保守派は結城派ともよばれるようになる。

③失脚から処刑へ

天保 14 年(1843 年)、寅寿は党争の渦中に在り、執政として権勢を持っていた。この年、党敵の参政・今井金次郎を寺社破却の執行役、士民からの憎まれ役である寺社奉行に左遷。

寅寿の母親は熱心な法華経信者であり、徳川光圀の生母・久昌院の冥福を祈り、建てた久昌寺の住職との交流が盛んであった。この事も、寅寿が寺社破却に心情的には否定的で、世間の非難と抵抗の大きさを杞憂して、自派から寺社奉行を出さなかった理由の一つだろう。寅寿は早くに父と死別していたため、母を大切にする親思いで知られていた。(61)

「1. 幕末水戸藩に対する人物概略 (2) [2] ⑥寺社奉行騒動」で述べたように、この時斉昭は東湖の意見を退け、寅寿の意見を通した。これを機に、寅寿、それに付随する結城派の権勢は益々盛んになり、また改革に対し不平を抱く旧家家臣(門閥家)の接近により勢力は増大する一方だった。また同時に、藤田・戸田等の改革派との対立は著しく激しいものとなった。

天保 14 年(1843 年)(寅寿 26 歳)8 月、水戸藩政策に疑問をもたれ幕府より斉昭及び改革派一同は謹慎を通達される。その際、執政の座にありながら寅寿はひとりだけ処分を免れる。

これが、寅寿が斉昭を追い落としたと世論で風聞される原因のひとつとなる。

その後、斉昭の謹慎解除を要望する「雪冤運動」の高まりを鎮めるために、同年執政を辞職し、11 月 10 日大寄合頭列となる。

しかし、執政の任を退いても寅寿の勢力は後退せず、弘化 3 年(1846 年)(寅寿 28 歳)、結城派の腹心は皆、要職につく。

寅寿は、弘化 4 年(1847 年)11 月 24 日(寅寿 29 歳)に斉昭の参政再起に伴い、致仕・謹慎を命じられた後も、影の黒幕としての勢力を嘉永 5 年(1852 年寅寿 34 歳)まで保ちつづける。

嘉永 6 年(1853 年)(寅寿 35 年)谷田部籐七郎、尾羽平蔵等と寅寿は小石川邸(藩主・慶篤の居住)の侍女萩野を使い慶篤に密書を送り、天狗派の後退を謀ったとされる(62)。しかし、密書の事が露見し、寅寿を処刑するべきとの声が高まる。しかし、藤田東湖がこれを拒否。10 月、処刑の代わりに松平松之允お預けとなる。

寅寿はお預け後も警固する足輕に賄賂を渡し同士と密通する事が多く、長男・一万丸も寅寿の命で下総結城へ密行、政権回復の手段をめぐらしたとされる。(63)

安政三年(1856 年)寸前まで勢力回復の手段をめぐらせていたが、事は実らず、4 月 25 日処刑。

東湖が安政の大地震で圧死した一年後の事である。

[2] 寅寿の性格

①育ちの環境

寅寿の人柄についての資料は主に文献 9. による。一般に寅寿に関しては政敵東湖著の「結城寅寿行状録」が引き合いに出される。東湖の記述は個人の主観によっているとはいえ、決して一方的な非難の論調などではなく、かなり正確に寅寿の行動様式を捉えているように思える。しかし、やはり寅寿の反対派として行動の解釈の部分に疑問が残る。「人柄」ばかりは、はっきりと「確実」とはいえないものである。そのため、あえて今回、参考にした資料は当時の敵味方を問わずに寅寿と関わりの深かった人物の口話とした。

1. 『才気学問はもとより政治上の手腕も立ったが、特に感情にもろい性にてあるから、部下を愛する事も深かった』(64)
2. 『結城は幼少の頃から目上の者と遊ばずに目下の子どもを友として自分が下知し候事を好み、小姓となり候ても目上の者から下知を嫌い』(65)
3. 『結城は大身で金も融通ができるから金の使い方が奇麗で、よく人の困るのを救う様子であった・・・(中略)・・・藤田晴軒は結城を水戸家国家初以来の人才と信じていた』(66)
4. 『結城は一藩中に恐るる者は一人も居ないが唯篠虎(東湖を指す)は骨のある男でなかなか食えないと言った』(67)
5. 女性客が来た時には『女の喜ぶような世間話をなされました。人品は無い方でありましたがドコとなく威のある方でありました』(68)

などがある。(これらはすべて、同一書から引用したものであるが各々が当時の党争に少なからず関わった人物の直接の口話なので、比較は可能と考えた。)

2. は当時中立的ではあったが、寅寿処刑に踏み切った張本人の口話である。
- 以上の五つから、寅寿が人心をつかむことに長けていて、また情にもろい事が伺える。

②寅寿の性格が関わった政治的事柄

この寅寿の性格は政治上の様々な面で現れた。寅寿の性格が深く関与したと考えられる事柄を挙げると

- a. 廃仏毀釈時、東湖は推進し賛成したが寅寿が心情的に違和感を覚え東湖ほどの賛成はしなかったこと
- b. 郷土たちのなかで「門閥家」が主である保守派(=諸生党)に共感する者が多かったこと
- c. 寅寿処刑後に保守派(=諸生党)が天狗党のように鎮派・激派に分かれなかった事となろう。

(4) 藤田東湖

〔1〕 概歴

②生まれ

私生活、個人としての藤田東湖の姿は、今日、神格化され人間性を失った東湖像よりは、はるかに平凡で野卑な部分も持ち、人間味あふれる、政治上から考えられる東湖の人間性を良い意味でも、悪い意味でも覆すものがある。

(ここでも、結城寅寿の人柄について考察したのと同じく、殆どがひとつの書籍を参考にしている。これは他の書籍では書かれていない東湖の私生活や、政治から外れた部分を当時の人々が話し、纏めた書物であるからだ。)

さて、まず東湖は古着商人の家柄であった。家としては裕福であったが、士農工商の身分制度で言えば身分があるとはいえない。しかし、彼の家は父・幽谷の時代から学者として名を馳せていた。そして、武士として取りたてられたのである。

元の名前は藤田虎之助といった。後に正式に東湖と改めることになる。

東湖自身もちろん、父・幽谷に引き続き、その才を開花させ弘道館で実権を握るに至った。改革派としての活躍を通し斉昭に協力し、側用人にまでなった。

しかし、見方を変えれば藤田派として派閥をまとめ、弘道館でも権威を持つほどの才能を持ちつつも「側用人・海防御用係・・・」そこまでなのであった。彼は、いくら才能や藤田派としての権勢を持っていたも家老、執政にはなれなかった。これは、封建社会の階級をよく映し出している。

②謁見から謹慎

斉昭擁立の無願出府で形だけの処分を受けたあと、天保元年(1830)東湖 25 歳のとき斉昭 32 歳に謁見した。そこから、斉昭と東湖の本当のかかわりが始まった。東湖は、たびたび斉昭に封事を呈上し、時には自分の辞職を請う事もあった。また、出仕しないなどのストライキも起こし自己の主張を臆することなく述べていった。学問でも、政治上でも斉昭を助けて活躍する。

天保 6 年(1835 年)には御用調役として江戸勤務となる。水戸に行っては検地や弘道館関連の協議を重ねた。天保 11 年(1840 年)には格式用人上座に進んだ。

その後も順当に多くの職をこなす。しかし、弘化元年(1844 年)に斉昭蟄居と共に幕命により江戸で幽閉される。弘化 4 年(1847 年)に水戸に移り蟄居を続ける。さらに、5 年後の嘉永 5 年(1852 年)遠慮を解かれ 8 年ぶりに自由の身となる。大番組に入った。

そこから再び斉昭の片腕としての活躍が始まるが、僅か 3 年後(1855 年)の安政の大地震で小石川藩邸内で圧死。享年満 49 歳であった。

〔2〕 東湖の性格

①私生活面での個性

東湖はきっちりと万事が万事堅苦しく礼儀正しいのが肌に合わなかったようだ。もちろん、公式の場では礼儀作法を身につけていただろうが、私生活の友人と話し合ったときなど、帰りに友人・武田耕雲斎が草履を用意して、供を用意して・・・とやっているうちに、裸足で走って帰ってしまったと言う。また、『其儘縁側へ酒の盆を持出し尻をクルリとまくつて、馬鹿な話ばかりして居た、小便がしたく成ると、主人公御免蒙つてここでやらかさうト言ながら庭先へ垂れて平気な顔をしている』（69）など少々下品な部分もあったようだ。だが、これらは、きさくに場の緊張や堅苦しさを取り除こうと、東湖なりに気を回したとも思える。

また、もうひとつ東湖の砕けたきさくさをあらわすエピソードとして次のようなものがある。

東湖に罵られた久木と東湖が口論になる。刀を久木が怒って抜く。すると、東湖は自分の刀を放り出して『お互に御扶持を貰っている身で切合をしては必ず一人倒れるソレでは不忠になるから果し合いやめだ、其代りお前とはモウ絶交すると言ふ、よろしい絶交します』と久木は怒り覚めやらぬまま、玄關に向かう。しかし、このときにはもう東湖としては怒りなどなかったようだ。久木が門についたときには、東湖が後ろから羽交い絞めにした。『サアどうだ動けまい、どうだト、言われたが大力にゞられて一句も出ない、先ず先ず絶交もやめにしやう、また遊びに来るがよい』（70）と東湖は言って久木を門の外へ押し出してしまったという。

一方で、東湖は馬鹿なまねをしたものに対してかなり毒舌だった。鉄瓶をひっくり返した者に『居候のできぬ男』（71）といった。これは東湖に言わせれば役に立たないという意味なのだそうだ。

渡井量蔵が20歳程度のころ、東湖の家を訪ねた。すると、美人と有名な米屋の娘について、「今日はどうだった」（大意）と聞く。これを聞いた渡井が困って『私ハ女などに頓着しませぬから何をして居たか存じません』（72）と言った。すると東湖は『一寸と見てくるがよい直ぐいって見ておいで』（73）と言い、渡井は困ってしまったようだ。いつも東湖は、『こんな調子で他を愚弄する事が多い。』（74）

②家族に対しての東湖

また、子供に対してももっぱら一家の大黒柱的性格であった。親をからかおうと東湖の子・小四郎が冗談を言う。しかし、東湖はそれに耳を貸さずに客として来ていた久木に『あの通り親を馬鹿にして居るから仕様のない奴だ』（75）といった。返事もしない東湖に小四郎も負けずに、また、いたづらを返す。東湖が、手を打つと夫人が何か御用ですか、とやってくるのを見て、小四郎は『お母さんお手が鳴ったら銚子をとれト唄い

出した』(76)すると、さすがに東湖も怒って『無礼な奴めト鞭をとつて追廻したが、小四郎素早いから逃げて仕舞つた』(77)という。これは日常の喜劇だ。小四郎は妾腹の生まれであるが東湖の息子たちの中でも才能があったという。

他にも、東湖が謹慎中に、子供たちが外の祭りを見たがった。当時、親が謹慎中では門外に出て祭りを見るができない。10 歳程度の子供たち 2 人は屋根に上り、木に上りと大変である。そこで、東湖は来客の庄司春村に『アレだから困る子供の事だから無理もないと思ふと憫然になってくる』(78)と嘆息し、それに対して庄司が豪傑の東湖でも子供のことで悩むのだな、と言った。すると、東湖は『誰でも人情は同じだ、子供が門外に出たがる度に苦しくなると言れた』(79)

東湖の家族に対する人情、愛情は他の者と変わらなかった。そして、これらの東湖の私生活は党争に明け暮れる歴史で忘れ去られる「愛情」「喜楽」を、日常では皆持っていたことを語っている。東湖自身、権力の最盛期にありながら、母親を庇って地震により圧死してしまった。

今振り返ると、非情な印象が真っ先に浮かぶ幕末日本も、今と変わらない「楽しみ」「冗談」「笑い」「愛情」「友情」等があった。負の印象のつよい幕末は、絶望であり、開国で変えなければいけないと現代人に思わせる。だが、それは印象でしかない。東湖は激動の時代・党争に直接関わった人物。彼の生活、人柄を見ると「日常」以上の負の感情は浮かんでこない。

東湖についての人柄の推測を通して、幕末日本の日常の幸福な一面が浮かび上がる。

(5) 藤田と結城の比較

〔1〕 政治的面での比較

①政治上で重視したものの違い

「1. 幕末水戸藩に関する人物概略 (3)〔2〕②」で述べた「a. 廃仏毀釈時、東湖は推進し賛成したが寅寿が心情的に違和感を覚え東湖ほどの賛成はしなかったこと」から寅寿と東湖の政治思想の違いを見る。

このとき、寅寿の性格から考えて彼は、「庶民の身になって」この政策の是非を考えた事と思われる。そのため、廃仏毀釈によっておこる農民の反発と、藩へと向けられる不平を、「自分が庶民であったら」どれほどの不平が出で、藩に対してどれほどの鬱憤がたまると、切実に想定できたのだろう。

逆に学者であった東湖は、庶民の反発や不満を考慮した上で、彼等を切り捨てての廃仏毀釈実行を行った。彼には信ずる「思想」があった。しかし、そこで彼の考え馳せた卓上の論理は、彼と同じ「思想」を信じているわけではない民衆がもつであろう反発・不満を予想しきることができなかった。このことが、藩として予想以上の打撃を僧侶や庶民から加えられる事になる。

ここに、東湖と寅寿の幕府の出方に対する意見の相違が確認できる。

東湖たち改革派が基礎にした思想（水戸学）については、「2. (3)〔2〕水戸学とは」に詳しく述べるのでここでははぶく。

東湖は、学問的正当性を掲げ「御三家水戸藩が幕府の意向に従うのは当然であり、問題となっている廃仏毀釈の本質は大砲鑄造である。国家的大義の前に大きな反対の理由も見つからない」と考えたのではないだろうか。

それに対し寅寿は幕府がそれに対しどういう感情を持つのか、一藩の藩政として考えたと思える。

寺社は庶民に密着して成り立っている。寺社は全体的に繋がりを持ち、幕府にも密着している。また、寺社の権力を持つということは其の礎となっている庶民の統制を崩すに等しい。これほど危険なことがあるだろうか、と危惧をしたと思える。

上記で寅寿が「庶民や僧侶の身になって」考えられた、とほぼいい切れる理由としては、
ア. 前述のように「感情に脆い」

イ. 前述のように「幼少の頃から目下の者と交流する事を好み、成長した後も自分と全く違う環境・境遇の者の心境が理解しやすい性であった」

「弱者を助ける事をより好んだ」などの性格がある。

また、「寅寿は組織力を持ち、身分の高い先輩、百姓町人、女、子供によく親しまれて、信頼を勝ち得た。」(青山延寿口話 7大意) 等のように広い意見が耳に入りやすく、

自身もそれに意識を向けやすかったと思われる。

一方で、東湖については、幼い頃から彰弘館の学生としてその才気で若い時から上を見つめていたことや、才気盛んで立場の上のものとの交流が主であったことが、「学者」としての東湖を確立したと思われる。父・幽谷の強い影響で、生粋の攘夷論者だ。東湖は「学者」として客観的にから庶民を見ることは出来たが、庶民に近いがために改革の必要性を感じながらも、その根拠に思想を置いたとき、目的と手段が逆転してしまったような気がする。自分とかけ離れた境遇の者に対する影響力の大きさを重視する事は思い浮かばなかったのかもしれない。

ここまで考えてきたことや、次に述べる『だれかさんの悪夢』及び『服従の心理』引用に関してで推測を続ける限り、この件に関しては寅寿の考えが現実起きて痛み因習の反応に近かった。

地震の際に、母親をかばって圧死した事からも伺えるように、東湖に情がないというわけではない。ただ弱点としてあげるのならば、シミュレーション能力の不足とはいえないか。「その立場にある自分をシミュレーションしてみる」というシミュレーションである。つまり、「人の身になる」というのは、当時は当たり前すぎる暗黙の道德観で「思想」というほどのものでもなく重要視されていなかった。何度も挙げるが東湖は政治上で「学者」、早く言えば理詰めで感情の侵入を許さない性格であったためいまさら、このような「情」や「道德観」を政治的判断に持ち込まなかった。

政治上で感情を切り捨てられることは必要とされる事であるが、政治とは即ち人と人の集合をまとめる事である。人には感情がある、為政者がいつも少数であれ不平不満の感情を切り捨てていては、「廃仏毀釈」のように予想を超える反発にあってしまう。

その面、寅寿はシミュレーションの面では性格的に優れていたと言える。

これと共通点を持つ物語を星新一は、「だれかさんの悪夢」中の「指」で書いている。指は、見開き1ページからなる。ショート・ショート内でも特に短い物語だ、この内容はおおよそ次のとおりである。

平凡な青年が夜、街中で拳銃を突きつけられ、言うことを聞くよう命じられる。おびえた青年だが、不審者の要求はひとつのボタンを押せということのみ。青年は、そのボタンをいとも簡単に押し、開放される。青年を脅していた一団の一人が最後に言うのであった。『第三次大戦の火つけ役となる、不意打ち攻撃の核ミサイル発射ボタン。指が震え、事情を知っているわれわれには、とても押せませんものね。司令官閣下。』(80)と。

これはただの創作ではあるが人間の心理をよく捉えている。人は、恐ろしいことが起こると身をもって知っているか、あるいは間接的にでも実感しているときはそれを実行することは強くためられる。

このことは、『爆撃機のパイロットは爆弾が人々に苦しみと死を与えることを理論的には想像できるが、この知識は実感を欠いており自分の起因する人々の苦しみに対しての情緒的反応は起こらない。』(81) と言い換えることも出来る。

東湖の弱点として上げたい彼の「卓上の論理」とは、まさにこのことである。東湖は民衆の人間心理について、シミュレーションが甘かった。

②二人の年齢差がもたらしたもの

ただ、寅寿はいくら才気があるともてはやされていても、年は東湖より 12 も年下である。

書物を読み勉学に励む時間も、学のある者と論議をする時間も、東湖と比べれば大学の先生と生徒ほどの違いがある。東湖が寅寿の言う事を汲み取り理解する「先生」であったのならばまだしも、ある時期以降、お互いに揚げ足を取り合う政敵の間柄となってしまう。これであれば論議の面で、東湖に及びようがなかったと思われる。これは推測でしかないのだが、様々な面において寅寿が人心に訴えかける方法をとった事から、寅寿が「理論的事柄」をそれほど重要視していなかったのではないかと考えられる。

また、寅寿は古着商の息子から上へ這い登った東湖に比べ、門閥家の子息として甘やかされていた存在であった。市野沢寅雄氏は『寅寿は酒を飲むほかになかった親(数馬)に比べて野心家であり、政治屋だったが学問はなかった。大変な大人物でもないと思う。』(82)と語る。

また、『結城は天狗派のというような悪逆非道、人面獣心の国賊というような人物ではなく、ただいかにやり手といっても一〇〇〇石取りのご家老の若様育ちで世間知らずであり、二十五、六歳で執政になるような甘やかされた境遇にあり、競争相手の藤田派が幕府の咎めを受けて一せいに失脚したとき、自分もサッと身をひけばよかったが、うかうかしてその地位にとどまったから斉昭―藤田の天狗派とは正面から対立している名門派に利用され、親分にされて深入りしすぎたのだ』(83) ともいわれる。

寅寿において、才気があるといわれるのは父・数馬の時代に零落していた結城家を立て直した事や、また『烈公も結城は深切の者と思召し、門閥家には珍しく才学のあるもの』(84) と当時学問を嫌う者の多い門閥家の者の割に勉学に励み、東湖と対を張って論議をしたことが評価されての事であろう。

もし、寅寿にあと 12 年の歳月が与えられたとしたら東湖と肩を並べるほどの論議を行える才能はあったのかもしれないが、実現は不可能だった。

また、『誰でも東湖の前では頭が上がらないが結城はさうでない様子、ナカナカえらい人物で、斯云男であるから自分は執政で寺院破却の事を奉行して居るが、この事は坊主どもの怨望を受ける仕事であるトチャンと見抜いて仕舞つて』(85) と、政治の先を見る力がそれなりにあったことも、党派が結成されてしまったことの一要因であろう。

一口に言えば、寅寿は人を重視し、東湖は思想を重視した。

いくつかの改革や思想に寅寿が感じた「不安」を、論理的に東湖に伝えることができなかったこと、東湖が寅寿のように不安を感じることができなかったことが分裂を生み出した一因であろう。

〔2〕 党の統一の仕方の差違

① 東湖中心の派閥

1 編 (3) 〔2〕 ②「寅寿の性格が関わった政治的事柄」から見た二党の性質の差異について考える。

まず、両党派の性質の違いを記してあるものとして一番参考になるものにやはり、文献 9. が上げられる。

そこに『・・(前略) 平尾右近、友部八五郎などは人物の衆にすぐれ一器量ある者ソレを斯く一致させたのは結城の力といつてもよからう。反封側の正論家と云ふ方は一向に一致しない東湖先生がマツ首領見たやふなけれど先生と石河徳五郎とは少し意見が違つて居る高橋多一郎と石河は大いに相違して居る、桑原治兵衛と高橋も違ふ、金子と桑原を違ふ、久木と高橋は大違ひ、倉澤と高橋金子も違ふ、領袖株が表面は一致して見えても何か問題が起こると議論が沸騰して仕様がな^い東湖先生が在世中はよく之を纏めて破綻を出さなかつたが、先生が死ぬと直ぐ騒動が起こつてとうとう長岡だの櫻田だのと云事になる。結城派は比較してみると先ず一致しているやうに見えた』(86) とあるように藤田派の黨員には少なからず理念の差異が見られる。

この事より、党派としての集団の存続は、東湖の才知一つにかかっていることがうかがえる。また、藤田派が東湖の死後、鎮派・激派に分裂したことはこれを証拠づける。

上記の点から、東湖が政治には情を介入させず理論的な関係が主となって党が成立していたことが考えられる。これは、個性の強い者達を論理で統率できる東湖の才知があったからであり、中心思想を東湖の存在で「一つの思想」にしておくことができた。だから、東湖が消え中心思想が実はいろいろな解釈や立場がとれるパズル状のものであったことが見えてきたとき、天狗党は一つ一つのピースに分裂した。

言い換えれば、次に述べる寅寿のように生きた人心をつかみ、人情、実生活、安定を軸にした強固な集団を作っていたわけではない。粘土玉を集めて一塊にしてゆくような関わりをつくることに長けていなかったのである。つまり黨員は東湖の希な才知に魅かれていたとのだろう。

② 寅寿中心の派閥

結城派は、寅寿の死後も分裂する事はない。また、各々勝手な方向に走ることもなかった。最初から最後まで大きな理念の変化は見られず、党内の争いも無いに等しかった。

これは、寅寿は黨員一人一人の横のつながりを重視して、各々の信頼を高めることで党の結束力を強めたからといえる。上記したように寅寿は人心をつかむ事には長けた。また門閥家同士、目指すものが同じだった所から党が結成されていったのだ。党内の思想の差異は見られない。正確には「藩全体ひいては自分たちの生活を守る為の考え」以上の確固たる思想があるといえないのかもしれない。これらの事を照らし合わせたところ、黨員は寅寿の考え方や行動と人柄に魅かれたと思われる。

いうならば、社会において一人のトップに依存した一代限りの君主的な社会（この事は、結城寅寿処刑に際し東湖の一言で死罪という考えを謹慎に押し止めたことから考察できる。）と、人のつながりを重視した社会において、トップの死後に社会の行く末がどうなるかの違いである。

すなわち、東湖は学者としての理論的な面で上から党を結束させた。人を論破し、思想の違うものを統率できる点は寅寿より上回っていた。寅寿は、党首として党をまとめる程度の力は確かにあったのであろうが、それよりも、人と人との心をつなぐやり方で情に訴え、党をまとめてゆく方法が得意としたのであろう。

③東湖、寅寿を継いだ者たちについて

また、この党の存続については、もう一つの仮説を立てることが出来る。

これは、西欧マルクス主義の祖とも言えるグラムシの政治思想における党を参考にした考え方である。

J=M・ピオットは著書『グラムシの政治思想』にて『(前略)・・・指揮官なしの軍隊はみすみす失敗するにきまっている・・・(後略)』(87)と述べており、ここで言う軍隊は党とも置き換えることが可能だ。

この考えにのっとって考察をするならば、諸生党は寅寿処刑後も市川三左衛門が「力」のある指揮官として党を統率することが出来たために、最後まで「党」としての存続が続けられたと考えられる。

それと対応させると、天狗党は東湖の死後「力」ある指揮官なるべき人が存在しなかったのであろうか？

いや、それは正しいとはいえない。ただ、東湖という人物の後釜としては、存在が霞んでしまったことであろう。会沢正志斎や、藤田小四郎は指揮官としての力を持っていたが、如何せん東湖のように、思想の違いが表面化している党を、一つのものとして結束させるまでの力は欠如していた。

その上、東湖には劣るが、指揮官としては成り立つ人物が2人いたことも問題である。小四郎と、正志斎では目指すものが違っていた。それも要因となって天狗党は分裂したといえよう。

よって、『指揮官なしの軍隊はみすみす失敗・・・』(88)には、僅かに実力不足の指

揮官が二人いた場合も同じこと・・・つまり「実力の十分にある指揮官なしの・・・」
と言ひ換えることが出来ると考える。確かに、天狗党は党としては崩壊、結局官軍とな
ったも残るは僅かな残党のみとなってしまった点は、如何に勝者といえども、党の本来
の目的からはずれ「党としては失敗」と言えよう。

また、諸生党の市川三座衛門がその「十分たる実力」を持っていたどうか定かではな
いが、もともと上述したように諸生党という党自体が一つに纏まっていた事と、天狗等
が敵として存在し続けた二点。それが幸いして分裂がなかったといえる。

すなわち、上記二つの「寅寿東湖の性格・統率の違い」と、「党としての人材の違い」
の両方共が各党首領死後の崩壊の様子に繋がる。

『内藤久木の諸老人の語る処によれば水戸にて豪傑を以て見るべきは結城寅寿、藤田
虎之助、矢田部運八の三人なり、これは真の豪傑の資なり、この三人に比すべき者三十
五万石中にはある可からず高橋多一郎、金子孫次郎は三等も四等も下る、武田はそれよ
りも下なりと云えり』(88)

以上の事を前提として含めた上で、次章は党争の流れを追ひ、また歴史的事実を考察
する。

2. 党争の流れ

少し前の時代、水戸藩の歴史が書物として構築される時、大きく欠けるものが二つあった。

一つは中立派(柳派)と諸生党の日記や書簡等の文献。二つ目は、それが発見された際に歴史に組み入れる人材。

諸生党側の資料が見つかってもしそれは黙殺し、文献として載せないという暗黙のルールが一部には実際に存在した。『稀に彼ら(諸生党)の書いた日記や書簡が発見されても、従来の藩末史はそれを閑却して採用しない風があった。』(90)

また、諸生党残党の人々が、党争終了後自らの家の家譜や記録を後難を恐れて焼き払うものたちも多かった。(91)彼らは賊徒として後ろ指を指され、時には平穏な日常さえ望めなくなる「家」——この「家」とは、物質としての物ではなく、血縁・一族等をさす抽象的な「家」である——を焼き払ったのである。

(1) 両党の結成

〔1〕党派の源流

①彰考館学派

水戸藩に彰考館という大日本史編纂を司る学問所がある。大日本史とは水戸藩二代藩主・徳川光圀が始めた歴史書の編纂である。1800年前後、彰考館内において二大学者・立原翠軒と、藤田幽谷が大日本史編纂上の方針の違いによって対立した。これによって、彰考館も二分され立原派と藤田派に分かれることになった。この事件には、いろいろな思想上の違いと解釈がなされているが、ここでは「破産寸前の赤字財政と藩士の貧しい生活から大日本史編纂の中止を考えた立晴翠軒彰考館総裁に対して、藤田幽谷が存続を主張したこと、藩主治保公が継続を決めたこと」(92)を理由と考えたい。

結局のところ、立原翠軒と藤田幽谷の学派争いは、翠軒が彰考館を去ることで一段落した。翠軒の弟子と幽谷の弟子の対立はしばしば見られたが大事には至らなかった。

この学派争いは、後の天狗・諸生の党争いに直接関与することはない。しかし、幽谷の子・藤田東湖が天狗党のリーダーとして改革を進めていくため、反対派の諸生党には翠軒の流れを汲む者が多数いたことは事実である。

さて、藩主・斉脩が病床に着き継続問題が活発化した際に東湖は、斉脩の弟・斉昭擁立に向けて革新を望む彰考館の学生を中心に派閥(このときはまだ天狗党という名称はついていない。)を結成した。この際には、前述したように幽谷と対立していた翠軒派の者達もそれに加わった。

②水戸藩主跡継ぎ問題

東湖達の斉昭擁立の目的は、自らが推した斉昭を藩主の座につけることで、東湖等の

望む改革を進めようと考えたからである。

一方、このとき清水恒之允を擁立した門閥派の中心は、中山備後守である。中山家は御三家が成立した際に幕府から遣わされた重臣で「付家老」または、「国老」「元老」との尊称が存在する。この役職は、単なる水戸家の家老というだけではない、幕府からの権威も合わさり中山家・2万5000石は格別の重みがあった。(93) この時、門閥派が清水港擁立を支持した理由としては、1章でも述べたが

a. 斉昭の実母と、斉脩の実母が不仲であったため。

b. 將軍の息子である清水公を藩主に据えることで水戸藩の財政が良好になると推測したため。

c. 大奥に味方が増える。

d. 水戸家は、將軍の血筋ではあるので清水公を藩主としてもなんら差し障りはない。の四つであった。それぞれについて簡単に説明する。

a. 「1. (2) 水戸斉昭」でも書いたように斉脩の生母は浄性院といい、斉昭の生母は瑛想院という。浄性院は、斉脩の正室、峰姫の実弟である十一代將軍徳川家斉の四十五子清水恒之允を跡継ぎとして望んだ。

b. 当時、將軍の子弟、子女を跡継ぎ、正室として迎えたときには専用の部屋を作り、また衣装、家具など上等なものをそろえなければならぬと、財政についてはかえってマイナスと思える。しかし、実際のところ（それらの準備は確かに必要であるのだが）子弟、子女が降嫁する時には下賜金が添えられており、またそれ以上に幕府との関係が強化される。幕府と関係が強化されれば、利息がほぼ無しといっていほどの貸付金を貰うことも可能となる。

実際、水戸藩も様々な方法を取り、幕府との関係を初代頼房以来幕末に渡って維持、強化し続けた。そのため、文政3年(1820年)には幕府からの借金9万2千両の棄捐がみとめられた。(94) 文政7年(1824年)には大久輔令、関十兵衛等の働きで幕府より永續金として年一万両を下賜されることが決定する。(95) 天保6年(1835年)6月からは5年間に渡り五千両ずつ幕府より補助を受けている。(96)

c. 江戸幕府時代、大奥は、多大な権力を持っており、將軍の下第二の幕府とも言い換えることが出来よう。これは、後年斉昭の無実を主張するために坂・元康・伊藤の三医師が大奥に取り入ったことにも現れる。

d. 言ってみれば建前である。が、確かに水戸家と將軍家は親戚に当たり、その本家たる將軍家から養子を貰うことは当時当たり前のことで、正当性も強かった。

清水公擁立派、おもに執政・鈴木石見守重矩、榊原照昌、祐筆頭取・別所左衛門、御庭奉行・関十兵衛は、幕閣の老中・水野忠成、側用人・田沼意正、林忠英等に働きかけ、清水公擁立を確実なものとするための運動をはじめていった。

それに対して、東湖ら斉昭擁立派は一党で連判状を作成した。主になった人物は立原

杏所、藤田東湖、杉山復堂、会沢正志齋、川瀬教徳、山野辺義観、桑原幾太郎、渡辺寅、伊藤孫兵衛、鈴木宣尊、吉成又衛門である。斉昭擁立の理由は「頼房の血筋」「私利私欲に駆られて清水公を推す重役達への対抗」だ。前者は建前（本音の部分も一部あったとも思われるが）、後者は隠した本音と捉えていいだろう。

一章でも述べたが、斉昭擁立派には学派争いを行っていた立原派と、藤田派の両者が共生している。利害の一致といえるだろう。

清水公が藩主となれば必ず門閥派中心の藩政となってゆく。生まれたときから適当な地位が安定し、安穩と暮らしてきた清水公が我先にと率先して改革を進め、学者等を要職に取り立てるとは思えない。立原、藤田両者にとって清水公擁立は喜ばしくないことだ。

東湖等 40 名は、文政 12 年(1829 年)10 月 1 日の夜中に無断で藩を抜けて江戸へ上がった。第一回目の「南上」である。この際に小石川本邸、幕閣に赴き斉昭擁立の説得を始めた。清水公擁立に肯定的であった鈴木重矩、榊原照昌等は彼等の説得に圧され、引き下がることになった。幕府としても、水戸藩と後々面倒ごとになるのは喜ばしくなかった。斉脩の遺書があらわれ、跡継ぎに斉昭を望んだことが確認された時点で、意見は斉昭側へと大いに寄った。文政 6 年(1823 年)10 月 17 日には、斉昭と名を改め 9 代水戸藩主へ就任した。

③「天狗党」呼称

この跡継ぎ問題は改革派の勝利に終わった。が、清水公擁立運動を『一方的に保守派の悪巧みとして決め付けた事は、行き過ぎであると保守派から見られたのも、無理からぬ事である。』(97) とあるように、保守派内ではこの意見を通した改革派こそが「悪巧み」であるとの見解を持ち、「天狗党」などと罵るものが発生した。

これは無理のない話である。ここで言う天狗とは『学問を鼻にかけて威張る成り上がり者』(98) との意味で、天狗党が自らを天狗と言うときの「天狗」と意味合いが違う。

彼等が自分で自らをそう呼称するようになったのは嘉永年間で斉昭が藤田派を庇護し『天狗とは正義、正論の別名で、正義、勇者を意味する』(99) といった事が始まりである。

また一方で天狗は結城派を「結派」、反改革派のことを「俗論派」と呼んでいた。

斉昭擁立の際の南上を不問にふすことは出来なかったが、東湖等改革派は閉門など形式的な処罰しか受けなかった。

本来であれば、許可なくして藩を出す事は厳罰に処せられるべきであり、また世間からも忌み嫌われる行為であった。いくら彼等の推した斉昭が藩主に就任したとはいえ、この寛大な処置は東湖等に対する後々の大抜擢を予想させるものでもあった。

それに対し、清水公擁立を支持した藩重職の処罰は重いものがあった。

これは改革派の要望でもあり、斉昭襲封の年の12月から翌年天保元年(1830年)2月
にかけ、反改革派要職・榊原照昌等十数人に対し致仕左遷を命じた。

（２）齊昭の四大藩政改革

〔１〕門閥派が反対した改革

①改革開始

齊昭は、藩主の座に着き敬三郎から齊昭と名を改めた。

藩主として行った最初の藩政改革は「雑穀切り返しの法の廃止」であった。藩が秋に大豆・稗・えごまの雑穀三種を形式上安く買い上げ、翌春に高値で強制的に農民に売りつけることで差額を税として取り立てていた。この税制を推していたのは主に門閥派家老であり、この法の廃止には門閥派と、門閥派ではないが急な改革には反対の意を示す小宮山楓軒等の一派が共同戦線を結び、門罰派とはまた異なる「反改革派」が結成された。後に反改革派に結城寅寿が巻き込まれ「結城派」へと形態を変える派閥である。

彼等の反対も影響し、「三穀切り返しの法の廃止」が実施されたのは 15 年後も後のことだ。

この「三穀切り返しの法」に、門閥派重臣たちが大いに反対した理由は尤もだ。一言で言うならば「水戸藩の財政難」。これはいつの時代も付きまとった問題である。

清水公が水戸藩主となっていたら手に入る予定であった幕府からの下賜金や貸付金は、齊昭が藩主の座に着いたために水の泡と化した。門閥派であるが、清水公擁立を主立って推進していなかった者達にとっても、齊昭の藩主就任は喜ばしくない事ばかりである。

「頼房公の血筋などよりも藩政のための金を！！」というのが門閥派重臣たちの叫びであったのではなかろうか。

「反改革派」結成などは後に詳しく述べるとして、もうひとつ齊昭が当初から実施を試みていた改革は「藩士の定府制の廃止」である。これは、後の齊昭の四大目標にも掲げられる。

②門閥派の処罰

この二つの改革を進めながら、齊昭は清水公擁立に加担した重臣の処罰、致仕・左遷を申し渡した。

保守派執政の榊原照昌、赤林重興、岡崎朝郷等を取り締まり不行き届きの罪状で解任。改革派の山野辺義観を執政に任じ、藤田東湖、会沢正志斎を郡奉行に任じた。このときの郡奉行は、民衆の声を取り込み藩政に反映させる重要な役目であり、東湖と正志斎の二人が、齊昭の信用を勝ち得たことを表す。また、戸田忠徹を通事へ、武田耕雲斎を使い番へ抜擢。

だが、改革派を多く抜擢したとはいえ藩政の要路には保守、改革の人数が約半々であったので、まだ、均衡はとれていなかった。が、封建社会の中で、保守派としては學者上がりの輕輩者が藩政の要路に立つこと自体が非常に腹立たしいことであったと考えられる。

「三雑穀切り返しの法の廃止」、「藩士の定府制の廃止」を骨格とし、進めてきた斉昭の改革だが、凶作などが影響して難航した。天保 5 年(1834 年) 8 月 7 日斉昭は藩士の改革に対する意欲の低下を恐れ「四大目標」を掲げた。

〔2〕 四大改革

①はじめに

この四大改革は水戸藩、ひいては幕府までをも揺るがす行動であることは当時予想するものはいなかった。(100)

それは

1. 藩士の江戸定府制廃止の実施（＝総交代之儀）
 2. 藩士の農村への土着（＝土着之儀）
 3. 藩校と郷校の実施（＝学校之儀）
 4. 領内総検地の実施（＝経界之儀）
- となっている。(101)

②定府制廃止

1、は江戸在住の藩士と水戸在住の藩士の間の溝を埋めるため天保 7 年(1836 年)3 月に行われた。また、これを通して「定府」という名は廃止され、「永詰」と改称された。

なぜ、江戸在住藩士と水戸在住藩士とで溝が出来たかという、元をたどれば藩政の不安定が原因である。

六代藩主・治保（文公）の治世までは江戸在住は一年交代であり、「常府」はなかった。が、何時ということもなく一年交代の形式は廃れて江戸詰め、水戸詰めと分かれてしまった。

実際にそれでいても問題がおきなければ特筆して改革をするまでもなかったのだが、精神面、人事面において両者に格差が生まれたことが藩政にも影響をきたした。

と、言うのも江戸詰めの方は十四、五歳で役付けとなるものも少なからずあるが、逆に水戸詰めの方は四、五十歳となっても部屋住みの者も多い。また、生活面を見れば、『鯛の串けずり水戸詰、鯛を食うは江戸詰』（102）という言葉もあり、かなりの格差が見られた。

それらが作用して江戸詰めは水戸詰めに田舎者と、水戸詰めは江戸詰めに軽輩者と罵りあうようになった。これでは、藩政、財政両面において多大な損害が出続けることになる。

この改革は水戸に移される江戸詰めの方にとっては改悪そのものであり、なにやかにやと理由をつけては移住を一日でも引き伸ばそうとするものがほとんどであったようだ。(103) この藩士交代を行う理由と、水戸に移される一家の嘆きを述べたものがある。

『・・・江戸と水戸の風俗は合い通じていた。しかしその後交代ということが行われなくなってからは、江戸の藩邸と水戸の藩邸はまるで他国のようになってしまい(中略)政務上の障害ともなった。(中略) 機会あるごとに一人二人と水戸へ移住させたが、その妻子の嘆き悲しむこと、まるで罪を受け配所に赴くかと思われるほどであった。・・・』
(104)

また、総交代之儀での一大変革は、付家老・中山氏を水戸へ移動させた事といえよう。中山氏は大名にも匹敵する名門であるため藩主にも優遇されていた。が、斉昭から見れば藩政改革の障害と成り得る脅威であったのだ。

この改革が終了したのは同年の秋であった。それでも、この改革は他の 3、4、と比べると結果として門閥派、反改革派の反対の影響も少なく順調に進んだほうと思われる。

③藩士の土着

2、土着之儀は、総交代之儀と同年5月に行われた。

外国の侵入に備えて、助川(茨城県日立市)へ砦(助川海防城)を築いた政策を指す。海防総裁を山野辺義観に任命し、そこに土着させた。このことより土着之儀という名称がつけられる。山野辺は、家禄一万石の重臣である。

しかし、この政策は一藩としての政治というよりは、幕府としての外敵に対する政策のように見受けられる。それなのに、これにかかった費用は水戸藩がもち、あくまで水戸藩としての行動に過ぎない。

ここで気にとめなければならないことがひとつある。江戸幕府は城の改修等、いわゆる「戦の際に使用される居住の建築、改修」を厳しく制限していた。対外敵という名目にしろ、「砦」とは幕府の法に抵触する畏れのあるものだ。実際この砦は後に斉昭が謹慎を申し付けられる罪状ともなる。

第1、第2の改革まではある程度順調に事が進み、第3の学校之儀に着手する。が、保守派の多大な反対にあい、計画は難航。その中、斉昭は天保10年(1839年)9月に「翌年春に帰国する」との旨を公表。第3、第4の改革と、偕楽園の設立を行うための帰国である。

続く凶作と家臣は家禄の半減の中での藩主の帰国は、保守派のみならず、庶民にも悪評であった。

〈助川海防城跡と養正館跡〉

日立市教育委員会の解説文

④郷校

3. 「1. (2) [2] ③弘道館と郷校」章でもふれたように斉昭は学校による啓蒙を重視した。郷校は斉昭が天保年間に相次いで建設する以前に二つ存在していた。一つは小川村の滑医館、もう一つは延方村の延方学校と言った。(105) これらは文化年間にすでに建設されていた。文化年間と言えば主に第7台藩主治紀の時代である。(106) 今回郷校儀により斉昭が開設したものは4校である。(うち一校、時擁館が開館したのは嘉永3年(1850年)) これらはすべて天保年間中に建設され藩内東西南北一校ずつ位置している。郷校の建設に際し、大きく貢献したのが地元の郷士、郷医、神官、村役人である。彼等は郷校設立後も権力を担った。

⑤藩内検地

4. は、「1. (2) [2] ④藩内検地」でも述べたが結果を詳しく記す。

検地は、保守派はもちろん富農等の反対が強く実施までは年月を要した。

しかし、ここでひとつの疑問が浮かぶ。

富農達の反対はわかる。陰田を発見されて税が上がるのが目に見えているからである。だが、保守派はなぜ反対をしたのであろうか。保守派は、ただ単に改革派政権に反抗して検地実施を拒否したわけではない。彼等もまがりなりに藩政のことを考える重臣たちである。

まず、保守派が反対した理由として次の2つが挙げられるだろう。

- a. 富農が隠匿した陰田が多くあるので、それを検地で発見し税を科すことによっ

て、
農達との関係悪化につながる。

b. 建前の幕府の石高が減少するため。

a. は、改革派の賛成理由と重なる。改革派は、陰田が発見されることにより藩の実際の収入が増幅することに重点を置いた。富農との関係悪化については、重要ではない——少なくとも収入増幅のほうが重要である——と考えた。まさに藤田東湖率いる改革派である。

この時代、富豪・富農にはひそかに藩に金を納めさせていた（＝賄賂）可能性も高い。関係が悪化するとその取引が行いにくくなるというよみもあったことと思われる。今となれば「賄賂」は——勸善懲惡的時代劇の影響もあり——一方的な悪として捉えられがちだ。だが、実際、財政不振の藩にとっては生死を分ける問題である。富豪から金を納めさせ、見返りとして適当なものを与える。これは今の売買契約と何が違うか。自らの地位を利用し私服を更に肥やすためだけに、富豪を利用することを良しとはしないが、多少の金子の行き来は好景気にもつながり藩政面にも反映される。（これは田沼意次時代に最も表れている。）一概に悪政と決め付けることには賛成できない。

実際に、水戸藩には献金郷士の制度もあり、中止されたり復活したりした。文政6年（1823年）には大久保今助が藩へ献金した功績により、郷士の格式へ昇格した。翌年、文政7年（1824年）には同理由で郷士となるものが増えた。これらも言い換えれば公的ではあるが上記の「賄賂」と同事である。

また、イ. が予想された理由は、今回の検地の際には一步（田畑の長さの単位）を六尺五寸と、寛永検地時（六尺四方）より長いものを使用したためである。（107）当然に、石高は減少する。また一章でも述べたが、藩の石高の減少は水戸藩という幕藩体制の中の一組織としての権威の減少にもつながりかねないのだ。

実際のところ、水戸藩の石高は四十一万八千三百余石より、十万千石の減収。おおよそ二十四%も少なく、三十一万七千余石と幕府に報告された。

この検地に対する斉昭の目的は収入の多少の増額もあるのだが、富農が田畑を貧農から買い上げることで、富農はますます富み、貧農はますます貧すという悪循環の輪を断ち切ることに重点を置いていた。その悪循環は田畑の荒廃に、ひいては農村の荒廃、藩の荒廃へと続いていくことを考えたうえでの改革である。

この改革の達成度は、収入についてはほどほどの増額はあった。また、富農の陰田を多数発見することが出来た。一方で富農との関係悪化などの問題点が引き起こされた。

また、喜ぶかと思われた貧農にも、目立った増収にはならなかった。富農が件数が少なく、貧農は多い。だから、一つの富農が収入を大きく失って嘆いても、その失った分が分配される貧農、一人一人の取り分はごく僅かなのだ。（108）結局、農民全体にそれほど歓迎されなかった。

藩政面に与える影響は長所短所が6：4程の改革であったのではないか。

（３）結城寅寿採用から政治党争へ

〔１〕 蜜月から亀裂まで

①寅寿登場

天保４年(1833年)３月１６日帰藩中の斉昭は、文武の聞こえを聞き結城寅寿を採用。１５歳で寅寿は小姓として召しだされる。(109) 同年東湖は彰孝館に在り、斉昭の「明訓管窺」に批判を添えて呈上、「送桑原毅卿之京師序」を執筆している時期のことだ。

翌年天保５年(1834年)４月２６日には斉昭は江戸に帰す。９月幕府へ神武天皇陵修造を願い出、１０月には蝦夷地開拓、１１月には１２万石相当の土地を幕府へ要請。(110)

天保６年(1835年)、東湖江戸勤務の御用調役を任ぜられる。(111)

天保７年(1836年)斉昭は土着之儀、総交代之儀、那珂湊の砲台建築を無事終わらせ、大砲の鑄造を命ずる。これらの変動を斉昭の傍らで寅寿は見ていったことになる。才氣あふれ、有能で優遇されたいことは、東湖の「結城寅寿行状録」に読み取れる。

冷夏により大飢饉が続き、東北地方では十万人にも死者が及んだ。有名な天保の大飢饉がおきた。(112) 水戸藩では備蓄米の利用や、少し前に行われた定府制廃止のおかげで、それほどの困難に直面せずに乗り切ることができた。

天保９年(1838年)、寅寿使番へ出世。(113)

天保１０年(1839年)１１月、一方東湖は先手物取列となり彰孝館編修に補せられ、同時に学校造営御用係に兼任せられる。よって、土地方改正係を辞職し足高を返上、史館勤めとなる。

天保１１年(1840年)、寅寿はわずか２２歳で１月には小姓頭となり(114)、９月には若年寄となる。小姓頭とは、小姓頭取と名称は似ているが、大いに段階が違っていた。小姓頭取は通事に過ぎないが、小姓頭となると『侍従長とか式部長とかいったような格で祭儀を司る職で禄位も高く將軍家にもまみえる格式』(115) また、弘道館の造営開始と共にその係りとなり、また郷村係鷹方馬地方支配を兼任する。(116)

正月に斉昭が下国の際に、翌年天保１２年(1841年)に寅寿を奉行に任命し校道館造りの監督を任せるとの意見がでた。

藩の財政の不足を助けるため、寅寿建議の後『上市、下市の町人へ金貳千両の上納金を申付け、猶ほ御用金上納のものへは士分の家格を興へ御目見以上の取り扱いになさるべしと町奉行をして内意を伝えさせ上納金を勧誘』(117) した。この上納金二千両を納めて士分の格を得たものは、上市の大高、小泉、小林、下市の左近司などの数家である。このことは斉昭が藩主の就任してから初めてのことであった。(118)

また、東湖においては１月１１日側用人永詰となる。同時に足高１００石、役料１００石、を加増され合計４００石となる。(119) さらに１月１５日には斉昭に伴い將軍家也と世子家祥に謁見。巻物を３本賜る。この年、斉昭は第二回目の就藩をしており、３月に鳥追い狩、５月には大砲の鑄造、７月２４日には藩内総検地、１１月には渦中諸士への貸付金の

棄却、私財の借金については無利息永年賦返却令を実行。(120) 実に精力的に活動している。

天保 10 年(1839 年)は「2. (7) [1] 結城一万丸」で後述するように、寅寿の嫡男一万丸が生まれたと推定できる年で、祝いのために斉昭はお七夜に来て一万丸の名を与えている。(121) 斉昭と寅寿の蜜月時代といえるだろう。

この頃より、寅寿、東湖の出世劇は一番の栄えに入り、また同時に二人の対立は避けられぬものとなっていった。

②寅寿用達へ

天保 12 年(1841 年)、寅寿は斉昭に付き従い北郷大能牧に在る旧跡視察に出発。3 月 3 日に帰城し、翌 4 月 25 日には御用勝手改正係を命じられる。(122)

東湖については、寅寿と同じく斉昭に従い視察に出発、4 月 25 日には寅寿と同じく御用勝手改正係に任じられる。12 月 9 日足高が 100 石加増と成り、合計 500 国取りとなる。

こうして勝手改正係の二人により 5 月には財政改革が行われている。

この年は 8 月 1 日に弘道館が仮開館した。

しかし、同年、斉昭に対し老中水野越前守忠邦忠邦より「水戸に留まって国政を行え」との内意がある。また、民衆の風聞で、老中の内意は斉昭を江戸から遠ざける為だと言う噂が表に出る。

『寅寿と交友結ぶ者多し』(123) との記述も在り、この前後が寅寿の権勢を示すと同時に、斉昭に訪れた不安の影と対比された。このことも「寅寿が斉昭を追い落した」と解釈される原因のひとつといえよう。

ここで、寅寿が反改革派に巻き込まれていく過程について述べておく。

結城寅寿の周りには門閥家たちが多くいた上に、寅寿自身も水戸藩内の御三家とか三枝などと呼ばれた小山・宇都宮・結城、いわゆる名門・門閥家の出である。当然にはじめから政治的に近くに存在したのは、当時反改革姿勢をとっていた階級的に近しい者達が主となる。「1. (3) [2] ①」でも述べたように寅寿自身は目下の者を好み交流はあった。しかしそれは政治的なものではなかった。

また、藤田東湖等、学派の者は封建的には身分は低いが、実際、彰考館内で多大な権力を持っていた上に、斉昭擁立時より郡奉行などとして政治的にも活躍していた。年齢の上のものが多い。寅寿から見て遠い位置にいた。その為、寅寿が藩の要職に就えらる以前には、彼らとの政治的交流は見られない。

上「同」前述のように、寅寿は人を指揮することを好んでいた。党争の渦中に自らが進んで入って言った印象を受ける。が、その点のみで寅寿の行動を判断するのはあまりに軽薄でいて危険だ。

まず、ひとつあげたいのが寅寿の年齢。当時、多少才気があるといっても 20 歳前半の者が進んで争いの中に入ったとする。若年がゆえにつぶされたものたちは歴史上多々存在する。そのことを考えると、自ら進んで渦中に入ったのならば、若年がゆえに認められず、早々に挫折する可能性も高い。

または、反改革派に操られる名目上の指揮官として、据え置かれることも大いに考えられる。さすがに、寅寿がそこまで愚かであったということにつながる文献・伝承はまったくといっていいほどない。

自ら進んで渦中に入ることは、東湖ほどでなくとも、頭の切れる寅寿の取った行動としては考えにくい。つまり結論として言えることは、寅寿は進んで党を結成しようと考え、その活動に参加したわけではないということだ。多少の派閥やグループへの干渉、事件への興味があっただろう事は否めないが、思うに寅寿はその「家柄」と「斉昭が目を留めた才知」を望んだ反改革派達に「気がついたらに首領の座にすえられていた」と考えられる。また、『大変な大人物でもないと思う。』（124）とあるように自ら望んでぐんぐん出世して行ったとは一概に考えられない。

天保 13 年(1842 年)3 月 14 日寅寿、執政となる。寅寿の権勢は頂点に達し、この後もなかなか衰えなかった。同時に腹心の吉野栄臣を用人に、横山忠兵衛、友部正介を小姓頭に任命する。(125)

同年、東湖は弘道館制度家懸となり、息子の大三郎、小四郎も誕生する。

7 月 1 日には、偕楽園が開かれ、11 月 24 日には藩内総検地終了する。また、12 月に種痘が開始、大砲鑄造のための領内梵鐘供出令が発せられる。(126)

次に結城寅寿と、藤田東湖の対立で重要となる寺社奉行をめぐる問題の種は、この時にすでにまかれていた。

③寺社奉行の入れ替え

翌年天保 14 年（1843 年）1 月 15 日東湖は格式馬廻頭上座に列せられる。(127) 5 月には江戸に上り、当分の在府を願う、また、弘道館係に任命される。(128)

この年夏頃、寺社奉行変更の騒動が起こる。

大砲鑄造のため、始められた廃仏毀釈。その悪役を負う者が寺社奉行である。

党派争いとしては自党の点数を稼ぐ絶好のチャンスであると共に、党敵の策略の一步前に行く必要も出てくる。

ここで、結城寅寿の権勢が増す原因の一つと言える出来事が起こった。結城寅寿は天保 13 年(1842 年)11 月 12 日の時点では寺社奉行であった萩庄左衛門(129)を寺社奉行よりはずした。天保 13 年(1842 年)といえ、寅寿は腹心を要職に取り立てている年である。この年の時点で領内寺院の破却の旨が達せられている。萩家は結城寅寿の姉の嫁ぎ先であり、大正年間にも連絡があったところを見ると近しい間柄で、結城派側であっ

たことは明白だ。

天保 14 年(1843 年)6 月頃より寺院に対する弾圧が始まった。この時にはすでに萩は寺社奉行よりはずされ、今井が寺社奉行にすえられている。(130)

今井はもともと結城派の要人であったが寅寿と意見が対立し藤田派に寝返ったと言う記述もある。(131)

若年寄であった今井を寺社奉行に下ろすよう寅寿が斉昭に要請し、それが通ったのである。これは明らかな降格だった。

ここでなぜ、わざわざ若年寄の今井を降格させたのか。二通りの理由が考えられる。

一つ目は、藤田派の打撃を大きくするため、つまり寺社奉行という憎まれ役を藤田派に押し付けると共に、参政であった藤田派要人が寺社奉行に降格されるという打撃も加えたわけである。

二つ目としては、もともとは結城派であった今井が、宿敵藤田派に寝返ったことに対する鬱憤が「わざわざ今井を」寺社奉行に降格した理由とも考えられる。ここでいう鬱憤は、結城寅寿個人の私怨ではなく、党派全体としての恨みであったと考えたほうが妥当であろう。

この今井金右衛門左遷は後の時代、寅寿への酷評の理由の一つとなる。特に、東湖が「結城寅寿行状録」に「一方的で勝手な左遷」(132)と批判的に記述しているので無理はない。しかし、今井の能力から考えて、寅寿としては左遷自体はもっともな措置であった。これは、「日光文書」「2. (4) [1] ③内容についての考察—金右衛門について—」で詳しく述べる。

④寺社奉行変更の余波

この時今井降格に対して東湖は斉昭に対して最も効果的と思われた「辞表提出」を試みた。が、そのときばかり斉昭は結城を選び、東湖は予想外の政治的ダメージも受けることになる。

東湖の地位はすなわち「斉昭の後ろ盾あつてのもの」から発展したに過ぎないと、改めて実感する事件である。当時、東湖は学者としても多大なる権威を持っていた。しかし、その権威のみでは政治に関与は許されていない。この場面で、斉昭への「強硬手段」が退けられることは、今井寺社奉行転職よりも大きな打撃とも考えられ得る。東湖の中で、寅寿に対する否定的な意識が、ここで固まったとも考えられる。

このときの斉昭の「名門の結城に任せれば何かあったときも先祖に申し訳が立つが、学者上がりの東湖では申し訳がたたない。」(133) という一見祖先に対する考え方により東湖を拒否した言葉（実際に祖先に対する考え方の面も含まれているが）からは、斉昭が「東湖の使用は在世中のみ、才に走りすぎて東湖に権力を振るわれることを好まない」(134)と考えていたことが読み取れる。

実際、廃仏毀釈は寅寿の予想通り僧や庶民からすさまじい反感を買った。

僧の一人が、つぶされてしまう仏像を自分の費用で買い取るから、つぶさないでくれと嘆願したこともあった。『庶民いずれも佛を信じている。だから佛像を鋳潰すようなことがあっては人々の信仰を傷つけることになり、人心はおさまらない』(135)と庶民から見た仏像の重要性を叫んだが、担当の武士たちは聞き入れずに取り壊してしまったという。

また、立原杏所の垂涎の的であった「睦新仲筆の十王絵十輔」など、寺社の宝物までことごとく奪っていったとの記載がある。(136)

当時の宝物であった仏像を『金銀の蓮の花、赤うるしの仏具、木仏、金仏、石仏をごちゃまぜにひっくくって積みあげ』て寺社奉行は処分していたのだ。その運搬を手伝わされた百姓は『ああ罰が当たる、もったいない、もったいない』(137)と嘆いていたという。

ところで、廃仏毀釈の中でも特に庶民に反感を買わせたとされる事に過去帳の処分がある。仏像を寺社奉行所へ移すと同時に、一応、位牌は檀家へ引き取らせた。しかし、経文と過去帳は奉行所が引き取り処分してしまった。(138) その為、『旧幕時代以前の過去帳のないのが極めて多く、昔のことは解らなくなっているのは、こうした理由によるのであつてまことに遺憾な次第である。みかたによれば佐竹当時の歴史を抹殺するという統治上の意図をも包蔵していたともいへよう。』(139) 過去帳は、その一族の先祖や祖先の没年、戒名の記された檀家としてはきわめて重要な文書である。その紛失は、当時としては自分の祖先の証明の紛失にも等しかった。血族を重視する封建社会で過去帳を失うことに対する庶民の憤慨は計り知れないものである。

その廃仏毀釈の遂行を聞いた斉昭は

『今よりは 心のどかに 花を見む

夕ぐれつぐる 鐘のなければ』(140)

と詠んだ。鷺子村の薄井家の菩提寺にあった美しい音色の鐘がつぶされて二度と戻らないことを嘆く民がいる一方で、斉昭は喜んでいたようだ。広い屋敷で家臣を従えてこのような歌を詠むとは、さすが庶民の心を知らない斉昭公さながらだ。あるいは、強がりかもしれない。

この廃仏毀釈は完全に寅寿が斉昭との意見の違いを感じ、斉昭から離れていく原因となった政策であつたろう。

廃仏毀釈前後、寅寿に対する形容詞として「権勢が盛んになること」と、「旧家家臣を招撫し勢力を拡大した」の二つがある。(141) しかし、寺社奉行騒動で寅寿が東湖の意見を退けたことにより、気に乗じて政治的实际地位（ここで政治的实际地位は名目上の地位が高く、加えて東湖のように多少藩主に対して無理が利く権力が付属した地位を呼ぶ。）を高めようと、寅寿に付随し旧家家臣が集まり、それに伴い勢力が増えたにす

ぎないと思われる。つまりは、勢力拡大は結果であり、はっきりと意図されたものではないだろう。

斉昭は天保 14 年(1843 年)6 月 8 月にかけて領内寺院の整理を行い、8 月には水戸東照宮を、12 月には廃仏毀釈と平行して領内全般の神仏分離令を発令。領内の神社を唯一神道に改めた。(142)

このとき、斉昭は武士には法名(戒名)も禁止した。廃仏毀釈の一貫である。また、同年には郷村でも法名を禁止し、碑面には俗名が刻まれるようになった。廃仏毀釈は寺院に対する「敵対行為」そのものである。寺院は藩主の権威に対して直接的対抗手段を持たなかった。

幕府が上知令を発令したのも同年である。これは、江戸と大阪のそばの知行地を幕府に返上させる政策で、領主や領民の大反対にあった。この年閏 9 月、水野忠邦失脚と同年中に撤回されており、ここで、幕府は天保改革に挫折した。

〔2〕 水戸学とは

① 初期水戸学と光圀の考え

ここで、寺院破却にもつながる天皇絶対精神つまりは、唯一神道に傾く危険性のあった「水戸学」について説明しよう。

もともと「水戸学」とは士民がつけた通称であり、実際は明暦 3 年頃から天保時代以前までの前期水戸学を「水戸史学」、天保年間以降の後期水戸学を「水戸政教学」と呼ぶ。もともとは、約 200 年間にわたる光圀の着手した「大日本史編纂」を通して、水戸に生まれた学風が俗に言う水戸学である。簡単に述べれば、「水戸史学」は尊王論、「水戸政教学」は尊王攘夷論であるが、なぜこの二つの思想が「大日本史編纂」を通して生まれたのであろうか。

水戸史学、つまり前期水戸学の尊王思想の発生について述べる前に、光圀の「大義名分好き」について説明を行いたい。この「大義名分」こそが、その意味を幕藩体制にあてはめるとき、尊王思想に行き着くわけである。

光圀は孔子の『春秋』に感化された。『春秋』は大義名分を高唱している。光圀は「大義名分こそ日本のあるべき姿」と考え、大日本史編纂に踏み切った。ここで言う「大義名分」は、言うまでもなく天皇絶対主義、つまり尊王論である。また、同時に光圀は儒教中心主義である幕府に反発し、国民が敬慕する者は皇室であるという考えをつくり出した。ここで光圀が尊王という大義名分を自ら提唱し自ら感銘を受けたのは主に下記の影響が強いと思われる。

1. 父・頼房の神道奨励
2. 夫人・泰姫との生活
3. 中国書物からの感化

1. は、日本で最初となる神道研究者であり、領内に神道を奨励したことは事実である。だが、ここで忘れてはならないことは、頼房が京都から儒学者・人見ト幽を招いて儒学の講演を依頼するなど、儒学に対して排除意識を持っていないということだ。また、光圀が大義名分に目覚めた中国春秋戦国時代に批判を下した孔子の經典『春秋』も、儒教のものである。ここに、光圀にとって、これらはきっかけでしかないことが明らかとなっている。

2. この夫人と過ごした4年の歳月が、光圀の神道精神を確固たるものに設立したと思える。夫人は後水尾天皇の弟に当たる近衛信尋公の娘である。後水尾天皇は徳川幕府の朝廷の扱いに対して大いなる不満を抱いていた。その姪に当たる夫人が皇室中心主義であり、かつ幕府の朝廷に対する思想を快く思わない人物であったことは疑いようがない。

3. 世の中の秩序や調停を保つために人の行う重要な、臣民として守るべきである「大義名分」思想を確固たる物にした。『大義とは尊王の大義であり、名分とは君臣の別である。』（143）と、ある。この思想はほぼ中国の書物から学んだものと考えられる。

また、水戸史学として主に重点を置いて主張したものが『神功皇后を皇后伝に収めた事』『大友皇子の即位を認め、弘文天皇とした事』『南朝正位説』（144）である。

前記2者『神功皇后・・・』『大友皇子・・・』は水戸学特有の思想であったが、『南朝正位説』は水戸のみが主張したことではなく、北畠親房の「神皇正統記」でも、南朝正位説が高唱されている。

光圀の「大義名分」からいけば、正統なる天皇は三種の神器をもつ南朝といえよう。だが、実際は当時の天皇は北朝系統であるため明確な解釈は避けられていた。が、そこで水戸学——というよりは光圀といったほうがよいであろう——は堂々と南朝正位説を唱えた。これもまた、中国の三国志時代の蜀と魏の正統争いが書かれている「通鑑綱目」の影響と思われる。またこの思想は、明治時代まで争論の的となり1944年に南朝正位が正式に認められた。

また、光圀の時代、水戸学者内においてもかなり意見が分かれていたようだ。だが、光圀は南朝正位説を推したのもあり、なんとか「水戸藩」という組織としては最後まで南朝正位を貫いた。（145）

そこからも江戸末期党争に関わる人物との接点が見えてくる。

結城寅寿の先祖は光圀に仕官し水戸藩に仕えることになった。つまり、土民になっていた結城を拾い上げたのは光圀である。理由として、価値ある古文書を多々持っており、後醍醐天皇より拝領の軍配等も保存していたためと言われる。

しかし、水戸学を通してみればそれ以外にも大きな理由があると思える。結城寅寿の先祖である結城宗広は南朝の忠臣として名高い。津に結城神社として祭られるほどであ

った。だからこそ、南朝重臣の子孫として後醍醐天皇の拝領品などを保存していたのである。光圀としてはその重要性を見逃すはずが無い。南朝正位一直線の立場から見れば白川結城は実に好ましい存在で、自家につなぎとめたかったのだろう。

②後期水戸学と尊皇攘夷

さて、次に後期水戸学として知られる水戸政教学について説明しよう。

水戸政教学の祖は藤田東湖と会沢正志斎である。後期水戸学を一口に言えば、もともとの水戸史学の尊王思想に、時代の流れによって強まった攘夷論を付け足したようなものだ。

これは、天保時代から始まる。

なぜ、この時期に水戸政教学が始まったのであろうか。

それは、天保8年(1837年)の大塩平八郎の乱から始まる国内の恐慌を収めるために、『非常時における国民の指導原理は尊皇攘夷にあるという事を政教学上から国民に示したのである。』(146)

水戸政教学の祖は藤田東湖等と書いたが、その基盤をつくった者は東湖の父・幽谷である。

幽谷は日本で中心教学となっていた儒教の日本におけるの停滞を感じ取り(147)、高山彦九郎等の尊王思想、熊沢蕃山の陽明学等を取り込み(148)、独特な政教学思想の基盤を作り上げた。

水戸政教学の天皇の行うべきであることは『敬神・愛民・尚武』(149)臣民の行うべきことは『敬神・崇国・尚武』(150)であると説いた。本質的な面は前期の水戸学と大きな違いは見られない。(151)

幽谷の思想は門人の会沢正志斎によって「新論」として尊皇攘夷者の聖典となっていた。(152)

多くの現代日本人から考えれば神道の姿は異質である。『死しては忠義の鬼となり極天皇基を護らん』(153)とあり、幕末・水戸藩の特殊な宗教色を色濃く映し出している。

だが、これに類似したものが江戸幕末以降にもあったのである。むしろ「過ぎたる愛国心(宗教心)」として思い浮かべるのはまずこちらだと思える。

時は明治、大正、昭和前期。「来たれや来たれ」「勇敢なる水兵」という二つの唱歌は当時の「愛国心」をよく表している。

『きたれや きたれ いざきたれ 皇国をまもれや もろともに よせくる敵は おおくと おそるるなかれ おさるるな 死すとも しりぞく事なかれ 皇国のためなり 君のため』(154) これは「来たれや来たれ」(外山正一作 1848-1900)の一番だ。言うまでも無く詩中の「君」は天皇を指す。この曲は4番まであり当初は「皇国の守」

と題され、明治 21 年に作られた。

また一方、「勇敢なる水兵」は佐佐木信綱（1872－1963）作の曲である。初めは明治 28 年（1895）に作られ、昭和 14 年に作詞者により訂正が加えられた。詩は『煙も見えず 雲もなく 風も起こらず 浪立たず 鏡のごとき 黄海は 曇りそめたり 時の間に』（155）という風景描写が美しい一番から入り二番、戦いの場面に移り三番、四番。五番、六番で撃たれてもなお『まだ沈まぬや定遠は』（156）と叫ぶ副長。この「定遠」は清の主力戦艦の名前だ。七番にはいり『聞き得し彼は 嬉しげに 最後の笑み 洩らしつつ 「いかでかたきを 打ちてよ」と 言うほども無く 息絶えぬ』（157）八番、『「まだ沈まぬや 定遠は」 この言の葉は 短きも み国を思う 国民の 胸にぞ長く しるされん』（158）で終わる。

「勇敢なる水兵」は年代的に見て 1914 年に始まった第一次世界大戦、明治 37 年（1904 年）日露戦争以前だ。また、曲中に「黄海」とあり遼東・山東両半島と朝鮮半島の間にある海の名称（広辞苑）が入っている。明治 27～28（1895 年）年にかけて行われた日清戦争での黄海の戦いの戦勝を歌っている。

「来たれや来たれ」は日清戦争以前の歌であるし、見方によっては幕末の尊王倒幕派の歌とも取ることが出来そうだが、本詩 3 番に『他国の奴隷となることを・・・』（159）とあり、考えるに明治政府の尊王思想に基づいた戦争シミュレーション唱歌であったと捉えられる。

このように、水戸学は明治期に確立した国家神道の基礎となっていたと考えられる。東湖達天狗党が主眼とし、行動原理としたのが、この水戸学であった。

〔3〕 斉昭処罰・結城派の躍進

① 斉昭謹慎とその理由

翌年、天保 15 年（1844 年）（12 月 2 日からは弘化元年）は大変動の年であった。

徳川斉昭致仕謹慎、藤田東湖蟄居に伴う結城寅寿の権力急上昇。また、南上の激化による、寅寿の辞職、斉昭の謹慎解除・・・それでもなお、保たれた門閥派権勢。

目くるめく、政情の変革期であり、斉昭、東湖、寅寿の三人にとっては未来の分かれ目の年でもあった。（主に活動したのはこの三人の中では寅寿であったが。）

もしこの時、寅寿が斉昭・東湖と共に謹慎を命じられていたら・・・。

もしこの時、寅寿の斉昭謹慎に対する態度が違っていたら・・・。

もしこの時、廃仏毀釈について寅寿が自分の考えを違う風に三連枝に語っていたら・・・。

歴史に、「もし（If）」は必要ない上に、意味もないが、その「もし・・・」が昨年に比べて格段に多く考えられる年だった。

だが、この「もし」はこれ以後また増えていくことになる。天保 15 年（1844 年）は大

動乱の幕開け、序章と言えるだろう。

さて、いったん斉昭謹慎の幕開けとなる天保14年(1843年)に話を戻す。

天保14年、5月18日。幕府は斉昭の4大改革を高く評価し、将軍から賞詞と黄金造りの太刀を、金梨地に群鳥を蒔絵にした鞍鐙及び黄金を下賜された。(160)

そして、天保15年に斉昭は反国の嫌疑をかけられての江戸召喚になる。実際、初めに江戸に呼ばれたのは水戸藩の付家老中山信守であり、その時に幕府より七か条の詰問書を受け取った。その詰問書こそ斉昭謹慎の理由である。

ではまず、その理由から説明をしよう。

まず、一つ目としては幕府の城改修禁止の法に抵触した弘道館の土手を高く工事した事。

二つ目は、幕府に対して謀反を行うと疑われた浪人の召し抱えの事。

三つ目は、不穏当である鉄砲連発のこと。

四つ目は、初代徳川幕府将軍・家康を祭っている東照宮の祭儀を唯一神道に改めたこと。

五つ目は、水戸に滞在しながら勝手不如意な行動に対する咎。

六つ目として、日本国に浸透していた仏教の本拠とも言える寺院を破却したこと。

七つ目は、蝦夷地を新たな領地として所望したこと。

の、以上七つである。(161)

まず幕府の対応に対して頭をひねるのは、前年褒め称えた「鉄砲連発」等が咎の対象に入っていることである。それは幕末幕府の権威の失墜と、全体の流れに流される体制を見れば、天保14年(1843年)に賞与の対象であったことが、次の年に処罰の対象とされたとしても仕方がないかもしれない。

だが、斉昭謹慎に対する主な理由は上記のうちでも「寺院破却」「東照宮の祭儀を改めたこと」と思える。これは、「寺院・・・」「東照宮・・・」が、天保14年5月に賞与を与えられた後に本格的に改革されたことである事や、幕府自身の宗教の根源である仏教に対する圧制は、仏教と密接なかかわりのある幕藩体制に危険と感じられる事から推測できる。

考えるに、寺院からの斉昭による押さえつけに対する苦情が——いや訴えといったほうがその切実さは伝わるだろう——幕府に持ち込まれ、幕府は斉昭を捨てて、幕府の根幹ともなる寺院を優先させたのだろう。

斉昭が寺社奉行騒動の際に東湖を退け、寅寿を優先させたことと同じである。今度は幕府により斉昭が退けられた。当たり前の世の中の原理といえば、それでお仕舞いなのだが。捨てるものは捨てられ、憎むものは憎まれ、選ぶものは選ばれる、不思議と歴史はこれを多く物語っている。

②東湖と寅寿の処分之差

斉昭は天保 15 年(1844 年) (12 月 2 日から弘化元年) 4 月 21 日に老中からの江戸召還を受け、5 月 2 日に水戸を出て 5 日には小石川藩邸に到着した。この翌日に駒込藩邸での謹慎の命を受ける。その罪状は前項の通りである。

斉昭以外、水戸藩家臣の処罰については、藤田派主要人物の藤田東湖、戸田忠敞、今井金右衛門(金衛門との記述もあり)は蟄居を命じられたのに対して、結城派主要人物、執政の座にありながら結城寅寿はなんの咎もなかった。(162)

東湖は、5 月 6 日に蟄居に処せられて以来、江戸の小石川藩邸内長屋の一室に幽閉されることになる。(163)

斉昭の謹慎は、幕府から見れば余りに革新的過ぎて危険思想に見えた改革が、御三家として行うべき暗黙の了解の範囲を超えてしまった結果であろう。

斉昭に告げられた罪状とは別に『急激な藩政改革を喜ばなかった結城寅寿を首領とする保守派が、幕閣の反斉昭派である幕府の勘定奉行、鳥威容耀蔵と交わり、絶えず斉昭の反対側に立って活動していた事』(164) が失脚の原因として捉えられている。

しかし、「2. (4) [1] ③④日光文書」についての章で述べるように、この頃の結城派は寅寿の指揮の元、完全に一丸となって一つの物事に対して行動していたとは到底思えない。前述のようにそれだけの明確な思想的根拠は寅寿にはありそうに無い。藩政の常識の範囲での情を中心として結合と思われる。急激な改革に眉をひそめていた点で一致していただろうが、それぞれがそれぞれの部署であれこれ個別問題の事案を押え、控えめにさせるように動いていた程度ではないだろうか。

一部の動きが斉昭をひそかに非難したか、あるいは、東湖等改革派——決して斉昭はその中に入っていない——の権威の急上昇を、抑えようとしただけであったのではないかと推察できる。

『其後ち東湖先生の心の跡を見ると「結城も老公を押込まへらす所存にてはあるまじ戸田と吾等を押込め候葉利過ぎ候事と存候」と言ふ事がある。』(165) との記述もその推察をより強力なものにする。

このとき、結城寅寿ら門閥派は斉昭の実子慶篤が藩主につくと同時に彼を擁しその権勢を高めていったと言われる。慶篤の後見としては十二万石高松藩主・松平頼胤と、二万石磐城守山藩主・松平頼誠、常陸府中藩主・松平頼縄がついた。斉昭は小石川本邸を追い出され、駒込藩邸へと移されるはめになった。

以上は、これは結果論であって経過論ではない。この記述通り読みとるとすると、結城寅寿がまるで「斉昭を追い落とす」など自らの権勢を高めるための画策を巡らしていた結果、一人権勢を得たということになる。これではこの論文の本旨にそぐわない。では、以下に寅寿にとってこの権勢が予想外、または望んだものではなかったと考えられる理由を述べる。

1. 庄司春村は『其後ち東湖先生の心の跡を見ると「結城も老公を押込まへらする所存にてはあるまじ戸田と吾等を押込め候薬利過ぎ候事と存候」と言ふ事がある。』(166)と述べている。これも寅寿が「斉昭を追い落とそうとした」とも言い切れない理由である。

2. 斉昭江戸召喚の時、寅寿が華美な行列を作り、赤熊の槍振りを江戸から雇い、周囲を驚かせたことは有名な話である。また、「結城寅寿行状録」で、「寅寿は斉昭を失脚させられることを見越して喜んでいる。」(167)との解釈が行われている。それは過言だとしても、たしかに『一同しほしほと御供仕候ところ、結城は御制禁の奴をふらせとうとうと発足仕候』『御道中も結城一人は至極の元気に御座候』(168)との記述はある。

今、通説として通っているものはこの「結城寅寿行状録」の記述部分を取り上げ、これこそが寅寿が斉昭追い落としたとするもっともな証拠として扱っているものだ。だが、ここで二つ見落としをしてはいないだろうか。

一つ目は、人の本意など他人には正確につかむことが出来ないのに、「行状録」の解釈を「確定」として捉えてしまっていること。二つ目は、同じ現象に対して他の解釈も可能だということである。いくら東湖と寅寿が憎みあっているわけではなく、酒を交わしたことがある仲といっても、少なくとも意見の食い違いはあった。(その面で言うならば)「敵」であったこと。『結城寅寿行状録』がいくら公平に書かれていると言われようと、あくまでもそれは後日の他人の解釈である。また、公平といったところで完全に「敵」「見方」分け隔てなく人そのものの本質を書くことは不可能だと思える。と、言うのも、東湖自身がどちらかに肩入れして書くことが無くとも「味方」は自分が正しいと思って味方しており、「敵」は自分の意見とはあわないと思ひ敵であるからだ。東湖自身、味方は理解しているだろうが、敵は理解できていないはずである。それは東湖に限らず、すべての「当事者」にいえることと思うが。この理論自体は当たり前すぎることであるが、それこそが「当事者」の書いた書物の欠点である。

それに、東湖自身1.の庄子春村の説をとれば文書には残していないものの、寅寿が斉昭を追い落とした形になってしまったのは、本人の心のなしたものではないとの解釈もしている。公平といわれても、「相手を理解しきっていない人」が書いた資料を「正しかろう」と捉え一方的な解釈を加え「派手な振る舞い→寅寿、斉昭失脚を予想し歓喜」、と結びつけるのは安易と思える。

さて、結城寅寿行状録では『一同しほしほと御供仕候ところ、結城は御制禁の奴をふらせとうとうと発足仕候』『御道中も結城一人は至極の元気に御座候』(169)とあるが、それが書かれたのは斉昭失脚の後である。その一文は「斉昭失脚」としての「不穏な空気」と、「一人だけ処罰を免れた結城寅寿の存在」が合わさったものだと考えられる。後に東湖が思い起こしてみると寅寿は重くらしい雰囲気の中、自分の権力増加を予想し

で喜んでいたように感じられ、後日論としては先記したように「一同がしょんぼりとしている中結城は妙に浮かれていた・・・」となったのではなかろうか。いや、少なくともそう解釈されている。

そう考えると、この一文には正確と言い切れない部分——少なくとも言葉通り受け止めるべきではない部分——が見受けられる。

それは「不穏な空気」。それを斉昭に付き添った当事者達が全員「ひしひしと感じていた」とは思いにくい。いくら、幕府からの水戸に留まってよいとの許可に「江戸から遠ざけているのかもしれない」との噂が立ったことは前述したが、前年は呼び出されて賞与を受けたのだ。詰問状がたとえきたとしても、それはそれ一般の大名などとは違う御三家水戸藩である。江戸にいる執政の戸田からも取り立てて何も言っていない。考えられ斉昭の人柄からして、ただの噂にいちいち心を乱され、前年の輝かしい功績を心に押込んで不安がる殊勝な人物ではない。

また、部下としても、噂よりは前年の功績を普通に見て取り、少なくとも全員が「不穏な空気」には転じなかったと考える。そうであった場合、寅寿も同じ気持ちと考えて不都合は無いので、根底では派手好きの斉昭のために相応の華美な行列をこしらえたのではないだろうか。

また、たとえあたりが不穏な空気であったとしよう。その場合は、寅寿もその空気を悟れないほど愚かではないと思える。その不安を一掃しようとわざと派手な衣装に身を包んだと考えられる。『不吉を感じるからこそ、かえって派手な供揃えを仕立てて、沈みがちな気分を高揚させているつもりなのかもしれない』（170）ともある。どちらの場合にせよ、仮にも幕府に出向くのにあまりにも簡易な行列ではそれこそ幕府を軽んじた「謀反の意」と幕府に勘違いされる危険性がある。

『だが、余人ならともかく結城朝道（寅寿のこと）が派手な装いをしているのは不安を掻き立てずにはおかない。』（171）この行列に華やかさが需要であると寅寿が考えた可能性については「2.（4）〔1〕④日光文書」で詳しく解説するが、やはり赤熊の槍振り程度を行列に加えるのは、いかなる場合にしても必要であると判断した根拠を、前年の日光社参に求めることができる。

東湖自身が寅寿を真っ向からすべて疑っていたわけではないことは「文献9 古老実歴 水戸史談」の口話でうかがえる。だが、少なからず疑いをかけていたからこそ「文献16 結城寅寿行状録」のような書物も残っていると考えられる。

これは、それぞれにかかれる話が「嘘」「真実」ではなく、政治に関しての——少なくとも行列に関しての——考え方の違いであったと捉えるほうがよい。東湖から見てそう疑われる点があったにせよ、それは行列に対する見解の違いから来ており、一概に寅寿が斉昭失脚を画策していた証拠とは言い切れないのだ。

また、もう一つだけ当時の寅寿の様子を引用すると、寅寿にとっても斉昭失脚が「実

際に意外なことであった」かもしれないと思わせる。『相分候節は結城もちとおどろき候様子に御座候』(172) やはり、寅寿として斉昭の失脚は予想したものではなかったようだ。

即ち私は、寅寿が斉昭を追い落そうとし成功した結果が執政としての権勢ではなく、寅寿自身は派閥に巻き込まれた形で、また時代が進むにつれて東湖と相対することになった結果がある権勢であり、寅寿の行動の結果が斉昭の隠居謹慎であった。そしてそれは、予想外の事象であったと考える。

他にも文献9の庄子春村の語る東湖、文献7の『名門派に利用され、親分にされて深入りしすぎたのだ。』(173)、文献54の市野沢寅雄氏の見解ものべられている。

確かに、俗説にあるとおり、寅寿に野望が在り、それに見合うだけの力を完全に持ち合わせていると考えれば、暗躍の説が有力になるだろう。だが、この論文を通して述べてきたように、「寅寿自身にそれほどの大それた思想も陰謀もなく、あるのは良識とそれを運用できる多少非凡な才覚で、東湖と比べると見劣りする程度の権力を、僅か20歳代の前半時に持っていたに過ぎない」と考えられる以上、自説が有力となる。

(4) 未研究新資料解釈

〔1〕「結城達也氏所蔵文書」解釈

① 寅寿の書簡について

今回の研究のため、所蔵文書を確認したところ、天保 14 年(1843 年)に行われた 67 年ぶりの日光社参に関する寅寿の書いた書状の下書きと思われる文書が見つかった。寅寿直筆の文書は処刑後徹底的に処分されほとんど現存していない。古老の逸話に漢詩などよくした人で、軸を書いてもらったものがあつたが、後難を恐れて焼いたという話がある。この卒業論文作成時にあたってに確認できた寅寿直筆書類は「県立歴史館所蔵」の 2 枚と、「茨城県図書館所蔵」1 枚と、「岡村氏所蔵」の文書一枚、また、「結城達也氏所蔵」の斉昭からの文書の筆写、及びこの「結城達也氏所蔵文書」の日光社参に関する書状の 6 点のみであつた。

② 結城達也氏所蔵 日光社参に関する書状

「結城達也氏所蔵文書 日光社参に関する書状」の大意はつぎの通りである。

「先日、日光社参の人数について御目付け方に 350 人程度と申し上げたら、110 人程度になるだろうとの答えでありました。金右衛門が高橋を通し幕府へ「日光社参の人数は 800 人」ということで手紙を差し上げました。(中略) これでは余りにも人数が違いすぎるので正確な人数を調べて(中略) 800 人というのは大御詰から倍率まですべての家来のだいたいの総人数です。(中略) 財制の窮状を考え略すれば 110 人程度にはなるかと思います。(中略) つまり、申し上げてしまった 800 人と言うのは全くの間違いというものです。なので、申し上げた人数はなかったことに、お忘れください。先ほど書きました 110 人には内士や御直参も加わると思えます。(中略) いづれにしても、今回申し立ててしまった人数は昔の人数で数えてしまったものなのです。どちらの人数になっても行き違いにより幕府に疑惑をもたれてしまうかとも考えられます。大変申し訳ありません。話がとても込み合つてしまい、文章では正確なことを申し上げることが出来ませんので、明日出仕して私自ら事のあらましをお話いたします。本当に話が込み合い難しいことです。今となつては、何を言ったところで言い訳にしか聞こえないかとも思いますので、幕府から疑惑をもたれるようなことになりましたら心よりお詫び申し上げます。では、宜しくお伝えください。 拝具 五月十四日 結城寅寿 御側衆」

③ 内容についての考察—金右衛門について—

これは、寅寿の下書きのようである。一箇所墨で重ねて書かれている部分があり、原田先生によると文法的に余り正しくない部分が一箇所あつたため、そう判断できる。また、差出人側の結城家文書として残っていることから推察できる。

本文は、2 行目と 11 行目の字間に空間が開いている。それは、将軍、天皇など、か

なり身分の高い相手について語るときにあけるものだ。「尊覧」という単語もあるのだが、これは極度の尊敬語である。よって、そこから考えられることは「尊覧」した相手が将軍であること、つまり公に将軍に 800 人という人数と知らせてしまったことを表わす。

「幕府に疑惑をもたれてしまうかもしれない」との記述や、「自ら出仕して」の記述から見られるようにこの手紙は水戸藩に向けて書かれているものである。

「御供衆」は今で言う側近のことだ。この側近は将軍の、というわけではなく斉昭の側近に向けた手紙——ひいては斉昭に向けた手紙——ということになる。

また、今から正確な人数を決定するとの文面のため、天保 14 年(1843 年)に行われた日光社参以前のものである。日光社参の月日は 4 月 13 日なので、その後かかれたのではないとすれば前年の 5 月 14 日である。つまりこの手紙は、天保 13 年(1842 年)5 月 14 日に書かれた。

この面をあわせ見ると、新たに見えてくる物事がある。書中の「金右衛門」今井金右衛門を指すと思える。今井金右衛門といえば、もと寅寿の同僚であったが、不仲になり東湖側に付いた人物である。寺社奉行騒動の天保 14 年に参政から寺社奉行に降格された。

そもそも、今まではなぜ寅寿と金右衛門の仲が決裂したのかははっきりとはしていなかった。思想あるいは性格のくい違いであろうとの推測がされていたのみであったが、この書状を見るに、ただの思想の違いに留まらない決定的な決裂の理由が伺える。

まず、年代を追っていくと、この日光人数関連書状が書かれたのはまだ、寅寿と金右衛門が決裂する以前の頃だ。実際に、かなり相手を理解していた友人のようだったともいう。

この文中からは、幕府へ間違った人数を伝えてしまったのは金右衛門と読み取れる。

こうへんへ

実際問題、彼一人の判断ではないだろうが『今日金右衛門より公邊江為御達書付奉入』『甚入込居恐入申候』とあるのだが、を見ると、金右衛門一派——少なくとも寅寿が大きくかかわってはいない——の軽率な動き、つまり失態と見受けられる。

この件に対しては、寅寿が責任者として責任を負ったと思われるが、寅寿としては金右衛門の軽率に対し怒り、または悪印象を持ち彼の能力を危惧したはずである。金右衛門の軽率さについては文献番号 16. 9. 等の文献にも載っている。これが、決裂の一番の要となった出来事と言えよう。

それならば、天保 13 年(1842 年)の夏から秋にかけて、寅寿としても金右衛門としても気まずい雰囲気はあったであろうし、もしかしたらはっきりとした衝突があったかもしれない。だんだんに仲は悪化し、天保 14 年(1843 年)となつては金右衛門は完全に東湖派に寝返るわけだ。と、いうと聞こえは悪いが、これは決して金右衛門を非難してい

るわけではない。自分の意思に基づき行動した当然の結果である。

そして、天保 14 年(1843 年)6 月以前には、今井は寅寿派の策略により寺社奉行に降格された。このような失態の後であったのならば、一個人としても、一党の統率者としての金右衛門降格は尤もであり、それに対する批判は的外れと言わざるを得ない。

また、東湖としては、寅寿が日光社参に関する人数の責任を負っていたとしたならば、それは寅寿の失敗として捉えていることだろう。よって、東湖著の「結城寅寿行状録」では結城と今井の決別には批判をむけていたと考えられる。

また、東湖の記録に、天保 13 年(1842 年)はそれほど特筆すべきことがあるように思えない。三男、四男の誕生や、斉昭に従って偕楽園や好文亭で諸士と詩を読んだり、執筆の記録ばかりである(1)。この小さな行政上のミスは、あるいは東湖の耳に入らなかったか、入ったとしても重要事とは認識されなかったのだろう。だから、東湖から見たとき、寅寿と今井の不仲や、今井左遷について「結城寅寿行状録」のような批判的な記述になった可能性が高い。

それから、この文書からは、結城派といっても、連絡体系が確立しているわけではなく、この程度のことで多々連絡が行き届かないうちに行動する者も居たことも読み取れる。つまり、この頃は党という確固たる統率がある訳ではなかった。

④内容についての考察—行列人数について—

日光社参は水野忠邦が考えた將軍の權威を復活させるための案であり、反対も多かった。(174)

天保 14 年(1843 年)の 4 月 13 日に 12 代將軍家慶が江戸を発して日光へ向かった。(175) 水野忠邦は財政圧迫の時勢ではあるが享保、安永年間に行われた 17 回、18 回日光社参を手本とし、手軽なものでありながらも、幕府權威失墜の無いよう各藩へ注意を払っていた。(176)

斉昭はこの日光社参に対し『その経費を持って当時最も緊急の問題である海防の充実を行うべきとて幕府へ建議したが、この考えはいれられず、予定どうり実施せらるることになった』(177)と、重要性をあまり見出していなかったが、天保 14 年 3 月 15 日には水戸から江戸へ上がり 18 日着。4 月 10 日江戸から日光へ向かい、將軍着予定日の 3 日前 14 日には、日光へ到着した。

水戸藩の行列の様子は一見質素であるが 35 万石として恥ずかしくない人数であり、実戦向きの服装をしていたという。(178) この服装の理由は、外的に対する防策の実戦訓練をするという斉昭の考えであった。当時、斉昭藩政改革は着々と功を奏したころであり他藩より尊敬の念を抱かれていたと記述がある。日光社参後、將軍より品を下賜されると同時に、藩政についての賞賛も得ている。(179)

実際に水戸藩行列に参加した人数は不明であるが、『日光山御宮御詣御供奉』(刊：横

本一卷一冊 見返：目録2丁、本文61丁、全63丁)に日光社参に関する各藩の細状が記されていると『武鑑出版と近世社会』(東洋書林 藤久美子 1999年)に書かれている。『日光山御宮御詣御供奉』の内容は御三家の供揃えに関しては家紋・氏名・馬印・石高・日光での宿坊・江戸屋敷地名・羽織が詳細に書かれている。『日光山御宮御詣御供奉』は中央大学に所蔵されており簡単に見る事ができないので今回は調べられなかったが、それに正確な水戸藩の行列人数が書かれている可能性が高いと考えられる。

また、日光社参での水戸藩の供ぞろえは元的人数800人から激減したはずである。これは、言ってみれば華やかであった行列が急に質素になったのだ。

質素を好むようであり、その実、格式を重んじ華やかなことも好きだった斉昭に歓迎された事態とは考えられない。

寅寿が、斉昭江戸召喚の時行列を華美で格式のあるものにしつらえたのは「質素にしってしまった」ことを悪く思い、今回だけでも少しばかり華やかにという心理が働いたからかもしれない。

結城寅寿自身、千石とはいえ、派手好きではなく、「敷地は広いが、屋敷は立派ではなかった。」(180)。自派の勝利を確信し、ただ威張り散らすためだけの為に、財政を案じてきた執政ともあろうものが行列を華美にしたとは考えられない。

それに対して、東湖はその後の斉昭・藤田派の権威失墜にともなう結城派の権威上昇に不信感を抱くのは必然だろう。また、今井の間違いではなく、寅寿が責任者としてわびていたとしたら、その人数騒動は一方的な寅寿の失態と東湖は考えるだろう。

つまり、寅寿(結城派)が日光関連人数で失敗をしたために、幕府から水戸藩は疑惑を持たれた。その為、斉昭が失脚したと考えることもできる。その上、思い返してみれば江戸召還時、一人明るく寅寿が振舞っていたということが、当時、焦りのあった東湖の中で、「斉昭失脚は寅寿の計略であった」という裏づけへと変形したとも思える。

〔2〕 稼堂の掛け軸に対する解釈

① わからない一本の軸

また、天保14年(1843年)の日光社参で「徳川実記」の編纂で高名な儒家・成島司直が斉昭に従って社参を共にし、その記録「晃山扈從私記」を書き残している。司直は大奥奥女中に和歌の指導をしている者でもあったようだ。(181)これは、幕末から明治期に「柳橋新誌」などを著した成島柳北の祖父であり、儒家・成島稼堂(筑山良護)の父である。この当時40歳前後と思われる稼堂は幕臣であるので、司直に従って日光社参に行った可能性も考えられる。

なぜここに成島稼堂が現れるかと言うと、今回の研究で調べて出てきた軸に「稼堂」の号があったからである。この軸の伝来は不明なのだが、徳川幕末に書かれたとされる五言絶句で、内容は次の通りだ。

『朝望霞浦水　　暮眺筑波山

山水長知友　　此心相對閑』

作者は『水面賞偶成 稼堂小史』、『松菊主人』と『稼堂』の落款がある。

意味としては、「朝に霞、浦の水を望み、夕暮れに筑波山を眺める。人の心と比べ（人事で忙しく過ごすより）風景を眺める方がのどかな気持ちにする。（はるかにこころよい）」となる。ここでは、「起」「承」で水と山を対比させ、「転」「結」友の心と、のどかな風景を対比させている。

対比ということは、その「友の心」が日々忙しく揺れることを表しているのではないだろうか。畢竟すれば「今日の友は明日の敵」という状態なのではないだろうか、という事である。

この筆者は確定できていない。京都に行った折に古軸専門の古物商2店の方が鑑定してくださった。しかし、幕末のものと思えるが、松菊の号から一人は木戸孝允、一人は書体から考えて木戸ではありえないといった。稼堂と松菊両方の落款を満たす文人はここでは確認できなかったが、お二人の確認の対象中に成島稼堂は入っていなかった。主要な著作はあるものの金銭的価値のつく文人ではないからと考えられる。

また、詩の内容から、あまり有名でない茨城の文人画人の可能性を考え、文人画人の本を確認した(182)が条件を満たす人物はいなかった。

ところで、今ある文献の中では、稼堂の号の一つに「松菊主人」というものは無い。しかし、諸生党の資料と同じく事実が紛失してしまった号もあるのであろうから、可能性はゼロとはいえない。しかし、これでは余りにも稼堂と推測するための証拠が足りない。

しかし、稼堂の息子・柳北の著した「？上隠士伝」という文献の中の自己紹介に「松菊荘」という名前が出てくる。仮に、その屋敷に稼堂が住み一時的に自らを「松菊主人」と呼んだかもしれない。自分の作品として世に出すわけではなく知人に個人的に渡すものであった場合その可能性はある。

というわけで、今のところこの書の著者として一番可能性のあるものは成島稼堂である。

②推定

さて、このような推測に推測を重ねる「作者推定」を行った理由を述べる。この書は幕末の心情的な一面を出しているからである。

推測の上の推測を3つ上げる

1. この書は寅寿が持っていたものと考えられる。
2. 成島稼堂は日光社参に行った可能性もある。
3. 日光社参の後に斉昭一行は江戸から水路をとり霞ヶ浦を通して水戸に戻って

いる。

1. と考えるのは後述する「3. (2) [1] 脱藩」のように子孫が命がけの逃亡の中、わざわざ手もとに残したか、あるいは他家に預けられていて手元に戻った数少ない所蔵文書の一つであるからだ。そんな中、持って逃げたということは、当時の結城家の者にとって大切な品であったはずだ。

2. 3. は寅寿と稼堂の唯一の接点の可能性である。もし、稼堂が日光社参に行っていたとすれば、斉昭に従っていた寅寿と会ったかもしれない。そしてもう少し創造を広げるとするならば、稼堂が一部帰路に同行したかもしれない。成島司直や稼堂親子は各地を訪ね、いくつもの紀行文を残しているからである。

もし、この書画が稼堂が寅寿へ渡した物であったとする。すると、その詩の内容は稼堂の心情であり、寅寿の心情である事になる。

寅寿は水戸藩に於いて自ら望んで派閥を形成し、権威を振るった訳ではないかもしれず、巻き込まれてゆく人の渦の中で揺れる一つの心情的面を映し出しているようだ。

天保 14 の日光社参の時期にこの様な心情を持っていたとするならば、元は結城派であった今井が藤田派に傾いている事に対しての、寅寿の心理も混じっていたかもしれない。食い違っていく斉昭との考え方に、不安を覚えていたかもしれない。

少し想像をたくましくしすぎたが、上記した物事の可能性を探る方法の一として軸の書の作者を推測した。

もしも本当に、「儒家」成島との関わりがあるとすると立原翠軒関連とも考えられる。結城派に結びついたとされる幕府内の人々の構造図が変わる可能性も捨てきれない。今後、更なる研究の余地があるようだ。

本床の軸ぐらいの大きさだ。

右上端に「思誠堂」

左下上に「松菊主人」

左下下に「稼堂」の落款がある。

(5) 結城寅寿謹慎・斉昭復権と政権の微動

〔1〕 斉昭謹慎解除

① 藤田派の挽回策

さて、天保 15 年(1844 年)からの保守派政権のなか、斉昭に弾圧された寺院の権威も復活し、東照宮の司祭権は僧侶のものとなっていた。厳格であった質素儉約も緩み、藤田派、天狗党の思想の元となる藩校・郷校も衰退した。(183) いくら政権を結城派に奪われたからといって、元々活動的な藤田派の面々がこの状況を黙って見ているわけがなかった。

藤田派は勢力の挽回を図り、斉昭を藩主の座にすえた時と同じ方法で、謹慎解除をさせようと試みた。すなわち、南上が行われたのだ。

実際、これはすさまじい効果があった。幕府としても、厄介ごとには避けたい。余り害にならないのならば水戸藩などと言う一藩の政権が、多少変わったところで、南上されるよりはましだ。そう考えるほか無い。

始めは、水戸城下のみの「義民——と自分達で言う——」運動が活発に行われていたが、そのうち水戸、太田、潮来、の藤田派郷士の中心的活動に変化した。

斉昭の跡継ぎ問題以降、行われていなかった南上の復活は弘化元年(1844 年)の 8 月。約五千人とも言われる藤田派が結集し江戸に上がる、第二回南上だ。同月 8 月には寅寿表勤を命じられ、権力は頂点に達する。(184)

一方東湖は、9 月 16 日には家禄、上梅香の自宅を没収される。同時に十五人扶持にて与えられた城下町横竹熊の塾居屋敷で塾居を続けることを余儀なくされた。

しかし、10 月には南上——雪冤運動とも言われる——の過激さが厳しくなり、それを鎮めるために寅寿は 11 月 10 日に執政を辞任し、大寄合頭列と降格、水戸へと下った。

また、幕府としても、寅寿辞任から半月余り後、11 月 26 日に斉昭の謹慎を解く。(185) だが、いまだ藩政関与は認めなかった。(186)

② 「天狗党が正党で諸生党は奸党」の呼称の起源

水戸藩内で「天狗党」が正党、「諸生党」が奸党という呼称が流れたのは、この雪冤運動の際からといわれる。「諸生党が奸党」と一言言うが、奸党が指すものは斉昭が謹慎を命じられた時に処分されることのなかった者達と、水戸内で運動を起こさず雪冤運動に参加しなかった者たちを指すようである。

これではまるで現代の中学生ではあるまいか。「みんな(彼等の言う「みんな」であり、組織全体の一部でしかない。)で決めた運動(ここで言う運動は元といえば参加するも否も本人の判断にかかっているもの)に出ないから悪い奴。」簡潔に言えばそういうことである。その面だけ見れば余りにも幼稚、軽薄である。

では、一応は水戸学者として学を納めた者の行動としてつじつまを合わせるためにはどうすればよいだろうか。即ち、天狗党側としては「同調しないものは奸党」と言わざるを得なかった状況であったと推測できる。さて、ここで天狗党が「そういわざるを得なかった」また、「その発言が、政情を天狗側に引き寄せるために必要であった」理由について考察する。

この当時、雪冤運動が成功し、斉昭の謹慎が解かれたからといって藤田派の立場は微妙なものであった。政権は未だ結城派が保持している上に、南上は法的には違法である。

違法を犯すにはかなりの覚悟が必要であろう。藤田派幹部はいいとして、問題は末端の郷士たちである。果たして、彼等がいくら思想的に改革によるところがあったとしても、自分の妻子を、家を、滅びの危機にさらすかもしれない。そんな中、簡単に南上を行うとは考えられない。これでは、五千人もの人数を雪冤運動に狩り出すことは不可能だ。

ここで、「天狗は正党、諸生は奸党」と呼称を流せば、——特に、雪冤運動に参加しなかったものは奸との見解——集団心理が働き（187）、「参加は本人の意思」から「行かねば」、に変化するわけだ。

そしてもう一つ、「天狗が正で諸生が奸」という呼び名が雪冤運動から定着した、といわれるが（188）、この時期は諸生派政権である。そして、現存する説は官軍・天狗党のものだ。それを忘れてはいけない。諸生党政権の時期に、勢力は衰え、改革賛成の斉昭も藩政関与を許されないとくる。こんな藤田派にとっては「折り悪い時」に「天狗が正で諸生が奸」ははびこるものであろうか。いや、それは不可能である。

この呼び方は当時は藤田派内でのみ呼称されていたはずだ。結城派はもちろん、柳派——中立派であり、後で諸生党と同一視されるのだが、本来は別派である——や、何にも属さない農村、町でまでの定着はなかったと思える。これが「定着」と言得るのは、革新派政権と、保守派政権がすぐさま交代する頃の話ではなく、明治期か早くとも最後の諸生党追討の頃であろう。

この時期には前述した通り結城派政権である。この政権中に藤田派としての士気を高めるため、多少強引であったとしてもこの呼称を唱えたのであろう。

〔2〕 斉昭藩政関与まで

①黒幕としての結城寅寿—長女美智誕生—

弘化2年(1845年)、寅寿は大寄合頭列に在りながらも影の黒幕として勢力は盛んであったといわれる。

寅寿はもう、派閥といううねりから抜け出せない、制御もできない。でもきっとそれは、東湖も同じであっただろう。誰の意思でもない、「党」が息を吹き入れられ、流れのままに、誰の意思でもない物事が着々と進められてしまったのではないだろうか。そ

してそれこそが、幕末水戸藩の悲劇の源であったのではなかろうか。

この年から弘化 4 年(1847 年)に謹慎を命じられるまでの間に、寅寿には長女・美智が生まれていると計算できる。美智は寅寿長男・一万丸の妹で、後に寅寿処刑で断絶した結城家を、大森家から婿を取って再興する。

また、弘化 5 年(1848 年)には寅寿妻・花が男児を死産し、本人も亡くなっている。一万丸年齢推定については「2. (7) [1] 結城一万丸」で後述するが天保 10 年(1839 年)の生まれと推測できるので、その後であることは間違いない。

花は水戸に留まったものとも考えられ、そうすると弘化元年(1844 年)終わりに大寄合頭列となって水戸に帰ってきた後に、美智が誕生したと考えられる。

ただし、弘化 3 年(1846 年)は丙午で女子の誕生はかなり強い迷信から好まれないこともあり、弘化 2 年(1845 年)末か、弘化 4 年の可能性が高い。丙午生まれは、気性の激しい女子が生まれるといわれており、結婚すると夫を抑えてしまうような女が生まれると信じられていた。この年に間引きされた女子も多いという。仮に弘化 4 年とすると、後に大森七之助を婿に家を再興する年に満 18 歳となる。推定 20 歳前後であった七之助とのつりあいも悪くない。

弘化 2 年(1845 年)は、結城派の興津蔵人が執政として権力を振るっていた。また、寅寿の片腕といわれた谷田部運八、尾羽平蔵も権力を振るうという風聞もたった。(189)

一方、藤田派、東湖、戸田は 2 月 21 日に本所小梅にある藩の下屋敷へ幽閉される。(190)

同月 2 月から 3 月にかけて、斉昭復権運動が盛んになった。(191) これには、東湖・戸田と、藤田派三田に数えられる有力者幽閉のための焦燥も付加されての行動と思える。

また、3 月に藤田派・会沢正志斎が致仕、豊田天功が禁固を命じられる。また、東湖の家族は水戸、横竹熊の蟄居屋敷へと移った。(192)

11 月 9 日には、郷村の自葬祭を禁じて、仏教祭を執り行うよう触れを出す。(193)

すぐにでもこの郷村に住む人々の感情を再現できそう。朝令暮改にも近いものごと、ただの政権の変動でころころと変わる法に、かなりの者が反感を覚えただろう。反感の対象が、「上の人」という漠然としてもものだったというよりは、結城派か藤田派のどちらかの名を冠した「上の人」に対してであったと思われる。この改革だけではなく、書物にすら残らない日常の小さなことに怒りを覚える対象は結城派か、藤田派。だからこそ、幕末末期、水戸藩は諸生・天狗の対立に加えて農村までも二分してしまった。それが更なる、悲劇を生んだ。その発端はすでにこの頃から始まっていた。

② 斉昭の反撃

12 月 斉昭は幕閣の老中阿部正弘へ密書を送り、寅寿を始めとする結城派要人・谷田部、尾羽、太田、鈴木、大嶺大八、藤田晴軒ら合わせて十六人を処罰するようお願い出る。

しかし、謹慎中の斉昭の戯言と取ったのか、水戸の政権を握る結城派を下手につつかない方が良くと判断したのか、水戸の問題として幕府が関与すべきではないと思ったのか、この意見は用いられなかった。(194)

東湖は、昨年・弘化元年(1844年)に謹慎を命じられて以来『東湖随筆』『常陸帯』『弘道館記述義』等を著している。

弘化3年(1846年)、寅寿は変わらず大寄合頭列として水戸に在り、腹心の者達是要職について政権をとっていた。(195) 結城派の権勢とは裏腹に、藤田派は多くが水戸中町に禁固される年であった。(196) 斉昭の藩政関与も認められず、藤田派松田申之助は斉昭の赦免を幕府へ願い出た。(197)

6月には水戸諸役所で大俵約令がふれ出される。理由は、奥向経費削減の為となっている。

ところで、弘化2年(1845年)、3年と海外からの通商を求める圧力が増してくる。外夷に対して無策に近かった幕府は、斉昭の主張に耳を傾けることになる。それは同時に結城派の翳りへとつながってゆく。

10月に、斉昭は、幕府へ大砲鑄造再開を願い出る。幕府はそれを許可する。

東湖については、12月28日(198)か29日(199)のいずれかに幕命により蟄居を免じられ、同時に遠慮を申し渡される。遠慮を命じられた後は小普請組に属して城下横竹熊の蟄居屋敷に移動させられた。(200) ここで、蟄居を免じられたにもかかわらず、遠慮を命じられたのかという点については、当時水戸藩が依然として結城派政権であり、東湖を江戸藩庁にとどめ権威を完全に復活させることはできなかったからであろう。(201)

この年は、変わらず財政難であり、藩への献金で郷士となる豪農や、町人で家格を上げる者が多かった。(202)

弘化4年(1847年)9月、第三回南上が行われる。また、頻繁に藤田派、高橋多一郎、芽根伊介、石河徳五郎、鮎沢伊太夫、萩庄左衛門、原田八兵衛、また士民等が江戸へ上がり斉昭の冤罪を訴えた。大奥にも手を回し、復権運動が盛んである。

9月20日(203)(22日との説も(204))には幕閣老中・阿部は付家老・中山へ結城処罰と、戸田・東湖等の赦免、義民・藤田派の釈放を命じる。(205)

ここに、幕府の藤田派の味方があらわれた。「義民」は通称となっただけであるとも捉えられるが、藤田派を「逆臣」と捕える限りこの呼称は出てこないはずである。つまるところ、「義民」の呼称は藤田派、ひいては斉昭の謹慎解除を行う、という明確な意思の現れである。

10月24日には戸田、藤田が隠居慎を命じられて藤田派勢力は後退の一途をたどっているかに見えた。しかし、同日結城派筆頭・結城寅寿は致仕謹慎を通達され、隠居となる。嫡男一万丸が推定8歳で家禄から500石削られた録500石を賜り寄合へはいった。

これが、結城派後退の重要な第一歩として藩を二分し、両極化させる予兆となった。

また、この年には天然痘が流行したので斉昭の良い改革、「種痘」が医師・木間玄調の協力により行われた。

さて、翌年の弘化5年(1848年)(2月28日から嘉永元年)は、いくら謹慎中とはいえ腹心のものがまだ権力を握る状態で、勢力面ではそれほどの衰えのない寅寿であった。しかし、心情面ではかなりの打撃があったのではないだろうか。

6月20日には寅寿母・洋蓮院殿章誉光岳貞家大姉、没。その後を追うように寅寿妻・憲貞院殿濯録浄體運大姉が死産により、男児・暁覚院真性如幻童子とともに没した。寅寿の謹慎というものに対する衝撃が大きかったのであろうか。原因は今となってはもう分らないが、精神的なものもあったと推察できる。寅寿にはこれ以後男児は生まれない。後に牢内で死す一万丸、一人が唯一の男児であった。

この年は比較的平和で、寅寿は水戸上町白銀町にありとの記述が残っている。(206) また、昔と変わらず人の心をつかむことに長け、藤田派、結城派問わずに人々と交際していたという。(207)

③地図上の結城の屋敷位置

この嘉永元年(1848年)、白銀町にありとの記述に関して、結城の屋敷が水戸市街のどこにあったかを地図上で確認した。ちょうど、御城と反対側で、弘道館に面している。現在は、地方裁判所になっている。これは伝承されてきた話でもあったが、現在弘道館で配られている地図には載っていない。

弘道館で配られている地図は、嘉永3年(1850年)11月の地図を昭和3年に義公300年祭のために写されたものが昭和38年に写され、昭和45年に武田泉が写したものである。

一方、結城家文書に残る地図は元禄3年、寶永3年、明和6年、安政5年(1858年)に微修正を加えたものを5人が写し5人目の人が寅寿姉の嫁ぎ先の家の者のようだ。それを大正期に結城四郎が筆写したものである。

寅寿は嘉永元年(1848年)には隠居の身で水戸の白銀町にいたわけだが、その後も、嘉永2年(1849年)、嘉永3年(1850年)と去年の有様と変わらないと言う記述がある。(208)

しかし、弘道館で配られている嘉永3年をもとにした地図には、白銀町に「結城」の名前がない。「結城」のところに「田島」となっている。また、他にも「長尾」「渡辺」は名前が書かれていない。

単なる移動や記載の省略も考えられるが疑問が残る。寅寿が本格的に失脚するのは嘉永6年(1853年)である。

弘道館は諸生党・天狗党どちらを言うわけではないが、斉昭に処断されている罪人である「結城派」は、水戸においてそれとはまた別のものと捉えられている。だとしたら、弘道館で配られている地図はいずれかの段階で故意に結城の名前が削除されたという可能性もある。

④ 斉昭復権

その翌年嘉永2年(1849年)には藩主の三連枝の後見が解かれ、3月13日には藩政関与を許される。同年、8月には東湖・戸田も謹慎解除を許された。(209)

この後、藤田派は徐々に勢力を回復し、結城派は逆に後退の一途をたどっていく。

しかし、この時にはすでに政権交代のめまぐるしい変化の起こる将来への不安材料があった。藤田派政権→結城派政権→藤田派政権と、政情が不安定な悪循環の輪が既に出来上がっていたのである。

だが、嘉永の初め頃と、安政以降では大いなる相違がある。

このころは「政治党争」に留まり「処刑」が行われていなかった。結城派と藤田派は意見の、思想の違いを抱えながらも憎みあっていたはいなかった。例えば、後の述べる筑波山挙兵後の天狗党処刑のように、武田金次郎の「諸生党狩り」のように、相手を殺したいなどと言う考えはもってはいなかった。

これが、唯一であり最大の違いである。

殺してまで排除しようとする「憎悪」さえ現出しなければ、あの悲劇にはなりえなかった。では、次の項で最大のポイントとなる「憎悪」がこの段階ではなかった理由、なかったと言える理由を推察・提示する。

〔3〕 嘉永年間前後の結城派・藤田派の交流

① 3つの資料について

まず、それに関する資料をあげる。

1. 『隠然人心の収攬をつとめ藤田派の人々にも好みて交際す』(210)
2. 東湖と結城が酒や鰻を持ち寄って意見の議論を行った
3. 内藤右膳筆の肖像画

1. は、寅寿謹慎中の様子である。当時、藤田派の人々と寅寿とかかわりがあった。藤田派を味方につけようとした策略と解釈されがちだ。が、多少その思惑はあったとしてもこれは語り合い、互いに絆を作ろうとする行為で排斥ではない。これは、当時の党争が単なる政治上のものにとどまり、生存にまで影響を及ぼす手前であったことを物語っている。

2. は、東湖の「文献6. 結城寅寿行状録」に書かれた事柄である。天保12年(1841年)

寅寿は鰻の蒲焼をたくさん持参し、東湖宅に尋ねた。東湖は酒を出して、語り合ったそう
うだ。藩政に関する長い議論の末、『是迄は結城も内外腹藏なく打ちとけ、此方よりも
日々存分を申し交り候へ共、相互ひ腹の中にてにらみ合い候は此夜より始り候様相覚
候』(211)と、両者の睨み合いがこの夜の議論より始まったと言う。しかし、これはお
互いを好敵手として捉え、これ以後、何度も議論を交わすことを予感させる。それで
あるから、相手を殺そうと言う「憎悪」に発展することは無い。また、事実、東湖は寅
寿を殺そうとはしなかった。

その時から『どっちも人並みの人物ではないから議論をする事が多い』(212)との記
述もあり意見を交わすことは多々あったようだ。

また、寺社奉行騒動の天保14年(1843年)の際、東湖は、城から降りた後結城宅へ押
しかけた。すると、寅寿は東湖の来宅を予想して酒を用意して待っていたと言う。そ
こでも、議論をしたそうだが、その内容についての詳しい試料は残っていない。ただ、寺
社奉行騒動の後と言うことで、今井左遷に関する事柄と推測できる。そこでも、刀を抜
くような事態にはなっていない。

3.「文献 7. 覚書幕末の水戸藩」巻の冒頭に内藤右膳筆の水戸藩士肖像画が載ってい
る。著者の山川氏が中立派の学者・青山延于の子孫であり、自家に所蔵していたものと
いう。これは、「武田耕雲」「青山延于」「結城寅寿」「藤田晴軒」「徳本和尚」「戸田銀次
郎」の6枚である。斉昭の命で内藤右膳が描いたこれらは、結城派・藤田派両者である。
このように、両者の絵を描けること自体が党争が激化していなかったことを示している。
寅寿が処刑された頃には、寅寿の書いた漢詩を貰った者が疑いを恐れてそれを焼いてし
まったという。つまり、寅寿に関わるものを持ってはいられなかったのだ。それに対し
て、内藤右膳が寅寿の肖像画を描けたという事実は党争のおだやかなことを示す。つま
りは1.2.と同じく、党争が単なる政治上のものにとどまり、生存にまで影響を及ぼす
手前であったのだ。

②東湖と寅寿のつきあい

東湖は生粋の水戸学者であり、天皇絶対主義であった。神話で描かれる、神道を絶対
とし、天皇は「神」であるという思想のもとで政治を行っていた。一方寅寿は、天皇を
権威者として認めながらも、神道とは宗教という想像のもの、一言一句全てがそのまま
ではないと考えていたようだ。まず、領民の生活を支えるのが藩であり、その指導者と
しての藩主、その統括者としての天皇に過ぎない。幕府政治のままの保守、安定を目的
としていた。

その思想の違いだけであったのならば、何も問題なく酒を酌み交わして議論を広げて
い続けられただろう。だがそこに、政治が絡み、海外事情が切迫し、彼等の取り巻きが
大きくなり派閥を形成した。取り巻き同士は対立し、憎みあいを始めた。彼等自身とし

ての憎悪は最後までなかったのであろう。東湖は、藤田派内では結城寅寿処刑が求められていたにも関わらず、結城寅寿を強行に処刑しなかった。結城派の一斉の怒りを買うよりも・・・との政治的打算も確かにあったのだろう。だが、それ以上に東湖自身、寅寿を「憎んで」いなかった。自分とは考え方が違うが「悪」として考えていなかったからこそその行動であろう。

また、これは推測の域を出ないものだが、9. 故実歴水戸史談を読み進めていくにつれ、『東湖先生も結城が能く人を使うのをほめて居られた、常に先生が言ふに向こふには人才が澤山ある此方の者はどうも思慮分別が足りない、何事も精神一点でやり通さうとするから向こうの者(結城派)に甘く謀られる、知恵をくらべては逆も叶ふまいと言われた事がある』(213)『平尾の話に結城は一藩中に恐るゝ者は一人もない唯藤虎は骨のある男でなか〜喰えないと言つたさうだ』(214) と、お互いを認め合っていることを見つげられた。

自分とは目指すものが違うとは知りながらも、相手を否定していない点は同じだ。他人よりは頭一つ分才気に富んでしまった二人が、議論をしあい、認め合っていたというのなら、友人であったといつて何の不足があるだろうか。

元々「友人」とはかなり広義の意味を持つ。政治では敵対しながらも、東湖が、殺せる寅寿を殺さなかった理由、自分とは考え方が違いすぎると言いつつも、認め合っている理由。友人、または好敵手とも言い換えられる。好敵手は友人や親友と紙一重だ。そう考えると、一層に幕末の悲劇が思いやられる。それと共に、敵を非難する際に「なにやかにやと無理に理由づけ」をする東湖や、寅寿の「政治上での敵に対する甘さ」がしっくりと納得できるのだ。

③肖像画の画家

「資料4 ページ資料η」として8枚、7人の肖像画をのせた。今回の研究中に見つかったもので、半紙に書かれており当時のものか、後年の模写かはっきりしない。が、これとは別に明らかに江戸末期の絹本彩色の結城寅寿像の軸が一本現存していた。これも幕末の逃亡の際に守りきったものらしい。ここに写真を載せた。さて、これらの肖像画は、山川氏所蔵の内藤右膳筆の肖像画と類似している。

まず、内藤右膳とは水戸藩小姓で、立原杏所に絵を学んだ。斉昭は内藤に命じて藩重臣の絵を描かせたという。(215) 平安な時代を象徴する出来事だ。

その内藤とよく似た画風のものが坂場奇一である。県立歴史館に坂場画の肖像画「資料ページ15 資料ρ」が所蔵されているが「資料η」の絵とそっくりである。坂場奇一とは松平雪山の門下生である。松平雪山は立原杏所に絵を学んだ。つまりは、内藤右膳と松平雪山は同門であったのだ。(216)

坂場奇一と同じく松平雪山の弟子には、息子である松平雪江がいる。彼は、天保3年

(1832 年)生まれであり、立原杏所の絵をよく模写した。

内藤右膳、坂場奇一、松平雪山、雪江の画質が師である立原杏所に似ていることも大いにありえる。立原杏所は、彰孝館総裁であった立原翠軒の息子である。藩主武公・哀公・烈公の三代に仕えた画家である。

話は戻って、軸の肖像画の作者であるが、落款を読むと「雪江」と読める。しかし、松平雪江は先にも述べたとおり天保 3 年(1832 年)の生まれであるから、彼がまともに絵が描けるようになったのはかなり後の事だろう。彼がオリジナルに絵を描いたとすると、その可能性がわずかにあるのは寅寿が謹慎にされた頃になる。それでは、内藤右膳筆の年代と顔つきが変わるであろうし、そもそもそこまで絵が類似することはないだろう。

また、県立歴史館のお話では、軸の画風と似た画風の作品を他にも所蔵しており、作者は内藤藤一郎というが、それが内藤右膳と同一人物かどうかは定かではない。

推定するならば、立晴翠軒の流れを汲む結城派である。その関係で家族に求められたとすると、軸はこの慶応年間の作の可能性が高い。

そこで、この資料 b は松平雪江が後年「内藤右膳」の絵を元に作成した物ではないかと推測する。

寅寿が水戸で隠居していた最後の年が嘉永 4 年(1851 年)である。この年、雪江は 18 歳、その後結城家再興後の僅かな平安の慶応元年(1865 年)から慶応 3 年が雪江は 32 歳から 35 歳。寅寿の物はほとんど廃却され、残っていなかったはずだ。なので、再興と共に作成を依頼したことは十分考えられる。

幕末の終焉たる慶応年間も水戸の士民生活は一時的に平穏だったと考えられる。

21 行 13 文字

〈寅寿肖像画〉

左下の落款に「雪江画印」とある

〔4〕 寅寿終身禁固まで

① 平安の終わり

斉昭藩政関与が為された翌年の嘉永 3 年(1850 年)は比較的穏やかな年であった。結城派の多くのものが要職につき、寅寿の権威も保たれていたが、斉昭の藩政関与により勢力にも陰がさし始めていた。

一方藤田派の高橋、安島、石河、金子等は勢力回復の計略をめぐらせていた。(217) 言ってみれば、嵐の前の静けさである。

嘉永 4 年(1851 年)、結城派と中立派である柳派の勢力が後退する一方、斉昭、東湖等改革派は権勢を復活させていった。(218) 昨年、策を弄していた高橋等の計画が成功したとの記述もあるが(219)、計画の具体的な内容は不明であり、推測では藩の要職に就く、幕府へ取り入る、士民の味方を得る、などと考えられる。それに対して、結城派は焦慮したのか、寅寿宅に密会が開かれたとされる。

しかし、それは結城派に限らず、藤田派にも同じく言える噂であった。高橋等藤田派は豪農の資金的協力を求めその功を奏したとも言われる。(220) 津波が襲う前の引き潮も最高潮に達した。一見平穏な年も、ここで終わりとなる。

② 結城派一斉罷免

嘉永 5 年(1852 年)2 月、結城派一斉罷免される。(221) 結城派執政・鈴木重矩、太田資春、興津、若年寄・内藤、祐筆頭取・尾羽、谷田等の罷免と、藤田派、山野辺義観、白井織部、岡田徳至等が執政という要職への昇進が行われた。(222) この処罰、昇進についての記述は藤田派、岡田、大場、白井が執政へ、近藤、側用人に、倉澤、青山、小姓頭へ、高橋、原田、矢野等祐筆頭取へ昇進という記述もある。(223)

斉昭は、結城寅寿、八田部運八の二名を逆臣と考え老中阿部正弘へ処罰を願ったがこれは拒否された。一方斉昭は、6 月に朝廷へ地球儀献上、11 月 22 日に将軍から招待を受け城中での宴に出席するなど勢力挽回していった。この頃から斉昭は専ら藩政ではなく幕政に力を入れるようになっていく。

翌嘉永 6 年(1853 年)、6 月に斉昭は老中阿部正弘から国防に付いての意見を問われ、また 7 月 3 日には幕府海防参与となり、7 月 10 日に『海防愚存』を提出(224) と、幕

政へのかかわりを深めていった。海外事情が斉昭にも追い風となった。7月20に東湖を海岸防禦御用係に任じて江戸勤め、15人扶持返納の上300石を給した。(225)

6月に61歳で将軍家慶薨去。ペリーが6月3日に浦賀へ来航して開国を要求、大統領書簡を渡す。

それに対して寅寿は谷田、尾羽等とたくらみ、藤田派を悪逆非道として、慶篤へ小石川の侍女萩野を通して藩主に言上した。その罪を問われ10月16日に松平松之允・長倉へお預けとなり終身禁固を命じられる。

この一件も確固たる証拠が残っているわけでもなく、いくらでも後付できる罪状である。斉昭の「逆臣としての結城寅寿」というものも、自らが目をかけて出世をさせた若い人物が自分が咎を受けた時、ひとりだけ勢力を維持していたということに対する、怒り、憎悪にゆがめられた姿であったのだろう。

斉昭としてみての寅寿の罪状は「藩主斉昭を幕府に讒言した事」である。またこれも、確証の無い罪状であった。(226)

10月16日に発表された処分とその理由に拠れば

『嘉永六年丑十六日評定所御用

一

結城寅寿

其の方儀は若干より、前中納言様(斉昭)の側近として厚恩を蒙り、改革にも力を尽くした。ところが去る弘化元年(1844年)五月俄かに中納言様退隠、その他罰せられたのに其の方だけはのがれ、実権を握って改革も取り壊し、不忠不義の行いが多く、不束至極、其身一代松平松之允へお預けにする。』(227)

となっている。

この時本来ならば藤田派、いや結城派以外の藩全体の風潮として結城寅寿の処刑を要求していたが、東湖はこれを止めた。東湖は、反省を促すにも、他の結城派への憎しみを引き起こさない程度の圧力として終身禁固が良いと判断したという。この東湖の考えの正しさは、東湖死去後に結城寅寿処刑が行われ、その後の動乱を見れば一目瞭然である。

このときの処罰により結城派参謀として名高い平尾、友部、谷田部も勢力を失う。が、この時から既に谷田部は江戸へ向かい高松藩の君臣に頼り勢力回復の策を巡らし始めた。(228)

11月23日家定13代将軍として将軍宣下を受ける。(229)

12月、プチャーチンが長崎に再来。(230)

一国としての混乱ももう始まっていた。それに乗じて斉昭は幕政にも参加権を得るが、それは水戸藩にとって、幕府にとって、日本にとって幸となったのか、禍となったのか。この問いの答えはないが、私としては幸であり禍であると考え。水戸藩として、日本

の動向に発言権をもてたのは幸、水戸藩政がおざなりになったことは禍。その結果が水戸藩の崩壊であることも禍。幕府にとって、御三家の力を借りなくてはやっていけなくなったほど弱体化した事が禍、当時として新たな意見が取り入れられた点は幸。

日本にとっては、ここで斉昭が幕政関与をしようと、しないでいたとしても、大きな違いはないだろう。どちらにせよ、あの海外諸国の圧力の下では「軍事的に発展をしていなかった、つまり、平穩に暮らしていた日本」を生き残らせる為には開国をせざるを得なかっただろう。

ただし、海外事情を抜きにして「開国」という一事だけ見れば、一概によいとばかりはいえない。あのままでも日本は日本として良く生きていけたことだろう。その視点は、今でもアフリカなどの奥地で暮らす、民族習慣をそのままに残す人々の生活について考える時も、忘れてはならないと思う。幸福ととるか、不幸ととるかの価値観の違いが、援助や政治的介入のうで常に問題になっている。

開国に関しても、その視点の違いで「開国は一概によいとはいえない」との説の理解に、違いが生じるであろうが。

(6) 東湖圧死と、寅寿処刑

〔1〕 東湖の死

①攘夷論主張

嘉永7年(1854年)(11月27日から安政元年)1月24日に東湖は側用人兼務の任に付き、計450石給となる。この頃は東湖全盛期と言われ、(231)藤田派三田(藤田、戸田、武田で三田)の一人、戸田も用達を命じられ藤田派の権勢は斉昭と共に盛んになる。

昨年幕府に提出した『海防愚存』は要約すれば外国との公益、開国は日本国にとって益を為さないことであり、高圧的な外国の態度に屈するわけには行かないとのことを主張し、攘夷強硬を断固高唱したものである。

その意見に反し、3月3日に日米和親条約締結が為され、斉昭は海防参与辞任し条約反対の意をあらわした。

老中阿部正弘としても斉昭の余りの頑なさに、いったん老中辞任を申し出るが、将軍の意により老中職に留まる。

この老中阿部正弘に対して斉昭は『内憂外患の折、政局を担当する者は貴殿の外は無い』(232)と賞賛している。(233)ここから見るに、斉昭としても強硬な攘夷は無理とわかっていて、老中阿部正弘の判断を良しと考えてはいる。が、水戸藩という存在に重みをつけるため、また、改革派との関係、持論を曲げることに対する躊躇、などと、まわりの要素もあり最後まで攘夷を論し続けたという見方も出来る。

さて、海防参与を辞任した斉昭だが、7月5日には軍政参与となる。(234)自らの地位に満足してか、もっと幕政への参加を深めようとしてか、登城の頻度が上がったよう

で、それに対して毎日の登城を窘める言葉を斉昭は賜っている。

斉昭の幕政の中心という勢力、藤田派の勢力に対抗し、謹慎中の寅寿と結城派動く。文通をして政権回復の手段をめぐらせているとされるが、(235) これは、政権回復という一言よりも、このままではいずれは処刑される危険性が高い寅寿の身を救おうと考えていたようにも思える。

小石川邸にいる横山、大森、谷田部等は策を講じて再び寅寿を藩政の下へ出そうとの試みが行われていたという記述もある。政権回復のため寅寿長男・一万丸が下総結城へ密行などかなりの活動をしたとされる。(236)

②安政の大地震

翌年安政 2 年(1855 年)、意見の違いの多々ある藤田派を一手に纏めていた留め金・藤田東湖が 10 月 2 日、夜 10 時頃震災により小石川藩邸で圧死した。

母を庇っての死といわれる。同日、戸田銀次郎忠徹も小石川藩邸にて圧死。藤田派の要が続々とこの世から去った。(237)

強暴でいて、力もある強大な龍のような藤田派・天狗党を抑える者が一斉に居なくなった。

この頃、谷田部は寅寿の赦免を公儀や、大奥に内訴していたという。もともと、寅寿の罪状の一つとなった「斉昭に協力する風を装い、幕府の斉昭をよく思わない老中と結託し、水戸の情報を流した」(大意)事の真偽は先述したように明らかではない。寅寿と交流のあった僧・日華——斉昭に言わせると奸僧の筆頭(238)——は当時久昌寺の住職であった。しかし、元々駒込の大乗寺の僧であった。其頃は、江戸町奉行・鳥居耀造とつながりがあったと言う。(239) だから、寅寿が幕府への確実なつてを持っていたことは確かである。また、彼らを通して幕府に——斉昭失脚とは関わりなく——何かしらコンタクトと取っていたこともあっただろう。

東湖圧死の知らせを聞き、結城派一同は「天狗派の首領がいなくなり巻き返しの機会だ」と喜んだ。

この知らせを、寅寿へ伝えようと谷田部が長倉松平家へ喜び勇んで知らせに行った。しかし、寅寿は一人『愕然として色を失ひ我等死期も迫りきぬと覚えたり天与是非に及び難しと嘆息したる』(240) と死を覚悟した言葉を残した。これに対し、谷田部はいぶかしんで『藩公の御慎みもも畢竟両田の所為にて両田死去の上はせいぜいお預け？免？再勤にも相成るべくと我等御喜び申し上げ申上る処に却って憂いに沈まるるハ如何の次第にてあるや』(241) と寅寿に尋ねたところ、寅寿はまたもや溜息をつき『両田は流石に人物なり我等を憎めハとて是非にも？へす外聞にも関わらずして濫りに殺すものにあらず左れハ両田無事にてあらんに何時までも我等を禁錮し置く事にて頭に刀を当てていることハヨモあるまじきなれと両田死したる後ハ自分と敵対する程の人物一個もなければ自分を活かして置くことを危険と思ひ急に殺害せんと企つるならむ嗚呼是

我等か死すへきの時なり』(242) と言ったという。

この後、実際に処刑の命が下り谷田部は『流石に結城なりとて皆其先見をし称せしと云ふ』(243)

ここに、寅寿の冷静な状況判断能力は現れたが、この後処刑までのわずかの間に結城派が巻き返せる余裕は無かった。

さて、遡るが同年の4月に斉昭も改革派も順調で斉昭は古くからの水戸藩の行事「追鳥狩」を復活させ改革を進めていた。8月に斉昭は、幕政参与となり幕政への介入が進行していた。9月には東湖は学校奉行兼務となり、役料物成100石を加増され計600石持ちとなった。権勢の最盛期が訪れていた。

その権力の絶頂の最中での突然死である。

10月9日には水戸城下常盤共有墓地の藤田家の墓所に埋葬される。満49歳であった。(244)

東湖の死前後、寅寿は一層の政権回復の手段をめぐらしたとされる。自らの生命の危機を感じ取った者の、正常な行動だとおもえる。

東湖の死を自分の死期と重ねた寅寿とは違い、谷田部はこれを機会とした。

慶篤に横山、大森等と共に取り入り、藩主もそれに多少は傾き、寅寿の再登用を一度は承服した。しかし、実際の政権は斉昭が握っていた為、結果として事は成せなかった。谷田部は高松藩へ協力を求める。これは藩主の内意であるとも言われる。(245)

③藩主慶篤の弱腰

しかし、慶篤は斉昭に押し切られる形で天狗派に傾いた。

慶篤は藩主となった13歳から青少年時代を、寅寿等結城派の中で育った。情情的に結城派に傾く傾向にあったようだ。

以下は、闇に葬られた事実ではあるが、高松藩に向かった谷田部は藩主・慶篤の寅寿採用について賛意を示した書状をもっていたといわれる。推測する上では、結城再登用に傾いた慶篤だが、斉昭が居る以上自分にはどうしようもないので、(246) 谷田部を高松へ向かわせたのだろう。しかし、事が成される前に慶篤は斉昭に押し切れ、天狗派に傾いてしまう。これもまた、捉えられた谷田部にとってはやりきれない悲劇であったろう。

安政3年(1856年)3月2日、藩主は斉昭謹慎解除のために身を傾けた天狗党を正とし、奥向きに取り入った結城派を奸とみなすよう奥向きへ説いた。天狗側ひいては斉昭と協力する慶篤の意思が、内外に明白となった。

ここで、「奸物」の定義として、奥向きに上手く取り入って、女性を見方につけ悪巧みをするもの、となっている。しかし、斉昭復権の際に、天狗党(藤田派)も坂、元康、伊東の三医師の助言により大奥に繋ぎをつけて御守殿に頼み、そこからまた將軍に内願

してもらふ、という方法を使った。金銭による幕府の買収もあり、この時の計画は今一步のところまで進むが、露見して大奥女中等の処罰に繋がった。(247)

この方法を使った高橋等はもともと、南上のような強攻策に同調しかねていた者達で、事件後も南上派の様に罰される事は無かったようだ。

そのように天狗党も奸物——あくまで藩主親子の言う、天狗党の言う「奸物」だが——の事を言えないのであるのだが、その事は勝者としてはもみ消したのだろう。それとも、無かったことに・・・だったのかもしれないが、その辺はどうでもいい。

つまりは、天狗も諸生も同じような方法で、各々の考えを貫いた。その政策の進め方は似たようなもので、要するに双方ともに相手の出方を非難する権利はなかったわけだ。

〔2〕 処刑へ

① 斉昭の杞憂

3月11日、斉昭は慶篤に向けて書状を出した。この書状の中に斉昭、天狗等が寅寿処刑へと踏み切った理由の一つになる斉昭の杞憂が書かれていた。

「杞憂」と言いきるのは「寅寿が斉昭毒殺を図っていない」という私見だ。だが、実際に寅寿は処刑され、斉昭の心配が実現しなかった。だから結果として「斉昭毒殺」は、「杞憂」といえると考える。

内容の大意は次の三点である。

1. 慶篤が斉昭の時代に高松藩などの後見の元に結城派に協力する形で成長したため、結城派の空気に毒されているのではないかという不安。
2. 結城は——斉昭曰く「奸党」——の金銭による幕閣の買収に対する懸念。
3. 賄賂で事が足りない場合、医師の十河祐元の協力の下に、斉昭・慶篤を毒殺するのではないかという杞憂。

寅寿処刑の罪状として挙げられる「斉昭・慶篤の毒殺を企む」はこの斉昭の書状の3.に大きく影響されていると考えられる。(248)

4月15日の松平に対する斉昭の書状に「今日、明日中に寅寿が処刑される」との事が書かれていた。これにより、この時点ではすでに寅寿処刑の命令は斉昭・慶篤より発せられたことを物語っている。寅寿の刑は3月中に天狗党が斉昭・慶篤の意向を取り入れていた。つまりは、天狗重役、斉昭、慶篤の間では結城は処罰の内容はすでに3月中に決定していたことが明らかになっている。

寅寿の予想は当たり、暴走した東湖亡き斉昭と天狗党により、真偽のはっきりとした罪状の元、4月25日寅寿、横山、大森蟄居。医師である十河祐元斬罪。彼の罪状は寅寿に加担して藩主毒殺の毒薬を調合したこと。もちろん、証拠などどこにもない。

他結城派16人が処罰される。

②寅寿罪状と処刑

寅寿の罪状ははっきりとせず、証拠のあるものではなかった。

一応、斉昭、慶篤等を排斥し三連枝の高松藩主を水戸藩主として迎えようと画策し、幽閉中の身でありながら仲間と文をかわして計略を進めた、というものである。

しかし、繰り返すが確固たる証拠はなく、天狗党が寅寿を殺さなければ危険をみなし処刑を決めたときに後付けた罪状であると考えられる。罪状を読み渡したときも証拠を挙げるわけではなく、「身に覚えがあろう」と詰め寄っただけという記述もある。(249)

その罪状は安政4年(1857年)4月25日に評定所で申し付けられた。

内容は、『悖逆不道の心底今以不相改、候段、重重不屈至極に付、御捨置難相成、死罪を申付もの也』(250)

それに対して、寅寿は『唯今仰渡される罪状、寅寿に於て毛頭覚え之なし、此儀御疑も御座候わば、その罪過の有無、篤と御調下さるべく一々御申開き仕えるべし、抑々寅寿御咎を蒙りし以来、今日迄一回の御糾明も之なく、然るに根もなき浮説流言に拠りて冤罪をうけ突然死罪申付るとあつては決して御請け申上げ難きにより此旨其筋へ申立てられ下さるべし』(251)と絶対に承服しなかったという記述もある。

寅寿の死に際に関しては以下の3説がある。

1. 目付・久木が罪状を読み上げている途中に自刀した
2. 自刀を進めるが拒否し、首を切った
3. 室内で乱闘があり寅寿は殺された

1. この結城派に対する処罰の報告が4月26日付けで水戸在勤執政・山野辺、大場、白井の連名で斉昭に届けられた。これは、秘密裏に交わされた書状である。

『松平の方では準備もあり、前もって結城へ申し含める必要があるというので、一日早

く処刑の件を伝えて置いた。松平家の役人が結城に短刀を出して自決をすすめたが、申し渡しを受けた上でと言い張って聞かない。やむなく到着した目付らを結城のいる囲いの中へ入れた。目付が罪状を読み上げている間に先非を悔いたのか、すでに自殺していた。』(252) また、4月29日付けでこれに対して岡田と武田の返答が水戸執政等が届いた。その内容は斉昭、慶篤が結城処刑に安堵した、などの報告とともに、寅寿処刑のことについての風聞が出るとおもえるので、その取締り方が大切であると書かれている。これが、正式な藩主等に対する報告である。

実際に、久木の話によるものであっても、翁の話によるものであっても、正式に藩に報

告された事実は変わらないのである。それが真実でなかったとしても。

2. は9. 古老実歴水戸史談による寅寿処刑を執行した久木の話である。

久木が、処刑のため寅寿の幽閉されていたところに行った。そのときには、寅寿は格子に手をかけて外を凝視していたという。『其眼は血走つて顔色は青く、殆ど発狂人で両手を柱にかけ肩を上げたり下げたり息遣ひいかにも忙しく』(253)と切羽詰った様子であったという。また、罪を申し渡すとき、咎人は普通手を床について頭を下げるのだが、寅寿はひざに両手を付頭をまっすぐしたいたらしい。そこで、久木が『ソレでハ相なるまい手を突て頭を下ろせ』(254)と初めて、床に手をついた。しかし、頭は僅かに下げただけであった。久木が罪を読み上げていると、どんどん部屋の奥へ下がっていく。介錯人は座敷の奥から入って後ろから首を討つ。『モウよかろうふと思つてソレト相図をとるト太田がバタリと切った、処が首を縮めて居るから肩へかけて少し切れたばかり二の太刀もよく切れない、手元を下ろと声をかけたので三太刀目で七分通り落ちて前へのめったが、疾うに死んでいた容子』(255)と、最後まで抵抗をしたと久木は語ったそうだ。

1. は、その場に居た翁の聞いた物事である。

寅寿が殺された日は天気もよく穏やかな日であったという。寅寿を切ったのは東湖の門人である久木であった。まず彼らはその場にいた昔の翁と、もう一人に『今日ここで見たこと聞いたことをいっさい人に話してはならぬぞ』(256)と口止めをした上で寅寿が幽閉されていた部屋に入ってしまった。その後、少しの間は静かであったという。この時に久木が寅寿に対して罪状を読み渡していたと推測できる。その後、ごちゃごちゃと話し声が続いたが、突如寅寿の叫びが聞こえたという。『『ただ一度のご糺明もなく』『執政まで仰せつかった拙者をただ一度のご糺明もなく』とハッキリと繰り返して叫んだかと思うと、ドタバタ、ドタバタ人のかけまわるような音がしてあとは急にひっそりした。やがて久木さんはじめサムライたちが出てきて、私たちに一人五両ずつ渡され、『いいか、今日のことを人に話したら命はないぞ』とまたきびしくいわれました。』(257)これは明らかに外部に真実が知れ渡ってはいけなかったために行った口止め、事実の隠蔽である。

それだけに、寅寿の処刑の真実は斉昭に対しても、天狗党内に対しても、ましてや、世間に対してはどうしても隠し通さねばならないことであったようだ。

寅寿の死については何説もあり混乱が生じている。

しかし、藤田派の処刑の強引さや、寅寿がこの処刑に対して僅かでも正当性を見出していなかった心情を考察に入れ、また一番客観的に物事をありのままに語っている第三者から見た説となれば、3. と考えられる。微妙に正確性を欠く「当事者の発言」という部分を第三者は持っていないからである。また、三通りの死に方の主に 2. と 3. を見れば、大体の寅寿処刑の様子が想像できる。寅寿はばたばたと走り回って抵抗をしたであろうし、それならば切られたとき首を縮めて中々切り落とすことはできなかつただろう。

久木は他人に寅寿処刑の様子を話すとき、多少は自分に都合のいいように歪曲させたり、正式な文書の報告は形式上のものと捉えられる。

権力を持ちすぎた者の結末。冤罪といっても過言ではない罪状による処刑に不満を抱かぬものなど居ないだろう。久木は『その最後はいかにも武士からず、見苦しかった』（258）と語るが、納得のいかない罪状でおとなしく死ぬような人物では、ここまで危険視もされなかったであろう。久木の話すのを真実とすれば、1. のような武士としてのすがすがしさは残りようもないが、代わりに捏造であった罪状に反抗した哀れさが表れてくる。

維新後、同じ久木が「1. (5) [2] ②」のように寅寿を藩の三指に入る傑物とみられている。さらに、久木の言葉に『結城はどうしても生かしておいてはいけぬと言う根元が己に定まりて罪案を作りしようなり』（259）というものがある。つまり、処刑に値する罪状があつてのものではなく、天狗党、ひいて言えば諸生党と反するものから見れば彼は危険すぎたのだ。

『ただ一度のご糺明もなく』『執政まで仰せつかった拙者をただ一度のご糺明もなく』（260）の言葉は九分九厘、真実であろう。同時期に『結城寅寿の斉昭毒殺事件に同意して毒薬調合したとの罪』（261）で処刑された十河も、糾明を願う言葉を残して果てている。

『この時祐元は憤り承服せず「御糾明、御糾明」と叫んだが、これを押さえ付けて斬首したと言われている』（262）自らの身の潔白を信じるものが、息絶えるまで自分の潔白を叫び続け、罪人としての処刑を拒むことは正しいことだと思える。

だがそれと同時に、寅寿を処刑した藤田派の心情も理解できる。東湖と肩を並べていた敵派の首領を、東湖亡き後生かしておくのは危険すぎる。その命を握っているうちに処分をしなければ、何時また派閥として息を吹き返すとも限らない、今の内に殺してしまわなければという切迫さも伝わってくる。ただ、この糾明なしの処刑は結城派の衰退を一気に加速させるものであったと同時に、後の天狗派の悲劇の遠因となった。

寅寿が謹慎を申し付けられたときと、死罪を申し付けられたときとの違いといえるものは、『謹慎中先非を悔いる心得もなく、警固の者を欺いて金銭を与え、ひそかに同意のものと手紙で連絡しあったという点だけである。これが捨て置けない不屈至極の行為で、死罪にあたるというものであった。』（263）皮肉なものである。

此の結城の処罰に対して、寅寿の姻戚である近藤次郎左衛門は『派閥が水戸藩を亡ぼす日は遠くない、それを防げぬ自分には生きる意味がない、と絶望のあまりヤケ酒をおおって自殺同様に死んでしまった。』（264）近藤は天狗優位のなか、参政の要職についている人物だった。彼の言う「絶望」はただの寅寿の死と、結城派後退などという一つの出来事ではなく、寅寿を殺すことが水戸藩の壊滅につながることを理解している者の絶望だった。頭のないままに危険になるまでに育ってしまった「派閥」、または、寅寿

処刑で作られた「崩壊への悪循環」に対する「絶望」であるだろう。そして、実際、派閥は水戸藩を亡ぼした。

処刑後、寅寿は武士を入れる棺桶などではない粗末な寝棺に入れられて葬られた。近所の者も祟りがあると言って近寄らず、血縁の者も誰一人おまいりに来なかったという。

(265) 姉がひそかに訪れて、蒼泉寺 35 代・米庵天光住職が首を葬ったとも伝えられる。(蒼泉寺住職談)

戒名「覚了院智叙道雄居士」として、今は蒼泉寺に住職の私費で立派な墓ができている。

この結城処刑に対して、松平慶永は斉昭宛の書状に結城の処刑に対するさまざまな風聞に心を痛めていることと、今正論を騒ぎ立てることは、かえって風聞を巻き起こすと沈黙の必要性を論し、『相当に厳しく勝者の立場にある斉昭に自重を求めている。』(266) 斉昭の激しい性格の副作用を心配した尤もな論である。

東湖が死に、そのせいで改革派を抑える者が居なくなった。政敵であった寅寿も一度の糾明も無くうやむやの中で殺された。

はじめは学派争い、そして政治党争にすぎなかった水戸藩の騒乱が、血で血を洗う惨状に激変したのはこの二人の死が原因だ。

『安政年間に於ける結城等の処分は所謂、狼莠の苗は建ちて葉を枯し、怨敵の裔は腹を切って胎児を求むるの主義にして、残酷も亦これに至りて極まれりと謂うべく、その親たる、兄たる者如く処置さられて、誰が憤りを含まざるべや・・・中略・・・即ち元治、甲子の騒乱は安政の結城寅寿断罪が原因を成したる也』(267)

『内藤久木の諸老人の語る処によれば水戸にて豪傑を以て見るべきは結城寅寿、藤田虎之助、矢田部運八の三人なり、これは真の豪傑の資なり、この三人に比すべき者三十五万石中にはある可からず高橋多一郎、金子孫次郎は三等も四等も下る、武田はそれよりも下なりと云えり』(268)

糾明も無く処刑された寅寿に支持した結城派の者達は、改革派を憎み、また改革派は保守派を憎む。終りの無い殺戮の連鎖の始まりは安政 2 年(1855 年)の東湖の圧死、そして安政 3 年(1856 年)の寅寿の処刑であった。

『「この人を殺したので水戸は大変なことになって。天狗さんと諸生さんとどっちが天下をとっても血まみれさわぎ、ひどいことでしたよ」』(269)

寅寿の死に関して青山延寿の娘千世の言葉である。

長男一万丸も寅寿処刑と同時に揚屋入りとなる。寅寿政権回復に関与したとしての処

罰だが、今のところ一万丸の生年は不明の為、どの程度実際に政党に關与していたかはっきりしていない。よって、一万丸の罪状が事実か無実かは別としても、一万丸が実際に寅寿救出に動き回ったための罪状なのか、寅寿長男としての名目上の罪状なのかを明確に定めなければいけない。そもそも、これは一万丸が家督を継いだときに成人していたのならば疑問にはならなかった。だが、本名・結城一万丸種徳という成人後の「種徳」の記述よりも幼名「一万丸」としての記述が主であるため実際に政党に關与できる年齢ではなかったのかもしれないとの見解も生じる。蟄居を命じられたときに 12、3 との記述もある。(270) つまりは、微妙な年齢であった可能性も高いのだ。次章では、一万丸の年齢を推定する。

〈寅寿の墓〉

寅寿の首が葬られている。

蒼泉寺にある。

(6) 嫡男結城一万丸の年令推定

〔1〕 結城一万丸

①推定する目的

結城寅寿の子供は正室「花(吉村直三郎隆政妹)」(271)に1男1女、妾「なみ(浪あるいは浪子の記述あり)」に1女(結城家所蔵文書)がある。

嫡男は結城一万丸種徳(たねのり)、一万丸は斉昭からの拝領名(272)で、結城家側でつけた幼名は亥之助(伊之助あるいは伊之介の記述あり)という。

「一万丸」の命名者は烈公と思われ(273)、次のような伝聞記事がある。

『・・若様が生まれた時烈公様が七夜の日にお成りになりましてお子さまをお膝の上へお抱き上げになり名を一万丸と賜りました、この頃の結城さんの勢ひは飛鳥も落るようで、羨まぬものはありません・・』(274)

現在、資料に現れている限りでは一万丸の生年は不明である。

また、没年はいくつかの資料により確定されている。

一万丸の生年を推定することにより、寅寿幽閉中の一万丸の年令を想定でき、救出活動等に関する関与の程度を想像することができる。また、年令から仮定できる一万丸の関与の程度と、一万丸に実際に下された御沙汰の罪状を比較することにより、改革側や烈公の事件処理に対する姿勢、事件の意味の一面を伺い知ることができると考えた。

②関係ある記録とその解釈

まず、一万丸の没年については1858年(安政5年)となっている。

これは、「両三日以前之事結城伊之介儀於牢屋敷病死候由」(275)をはじめ、文献(276)、結城家過去帳などにも記されており、間違いはない。

本により1857年死亡にあたる「万丸は父の処刑と共に永牢となり、翌年獄死」(177)の記述があるが、これについては寅寿処刑時には揚屋入り、それから永牢処分までに一年を要し(278)、入牢の翌年に他界していることの、三点の混乱と思われる。

また、当時の風習で永牢者には食物に毒を盛り約三年で殺すという『当時の永牢者は三年を待たずして獄死』(279)習慣があった。これは「文献15. 水戸藩党争始末」にも書かれていて、「文献5. 水戸藩の崩壊」も出展はここと思われる。

『一萬丸のみならず永牢になりし者ハ??皆牢死し三年と活きたるのものハなかりし』『永牢者へハ三年のうちに毒素を??て生を縮めしものなるよし』(280) 一万丸は『飲食を断ち憤死せしものなりし』(281)。これは、処罰に対する、一万丸にできる限りの実力的な訴えであった。

この時の年令については「年わずか17、8歳であったという。」(282)だが、この情報は15と結城家伝承に基づいている)が唯一の記録であり、いずれにせよ若年であったことが伺える。

他に生年を推定する材料として以下の a～g があげられる。

a. 1833 年 3 月就藩の烈公に召し出され寅寿 15 歳で小姓となる。(283)

b. 『奥さまは吉村道三郎と云小身の方より参られて名はお花さん名高い美人で結城さんよりは三ツ位お若く』(284)

c. 1835 年 3 月 4 日寅寿 17 歳の時に長女夭逝(285)。双方の年令より結婚後すぐの子供で、生まれてすぐに他界したと思える。

d. 1838 年 3 月 28 日二女夭逝(286)。梅薫院芳顔玉抱童女の戒名からほぼ乳幼児期での他界と考えられる。

a ～d より長女と次女の間一万丸が誕生したとすると生年は 1836 年～1837 年、そうでなければ次女誕生より一年程後からとなる。一万丸の誕生は幅広く可能性を広げても 1836 年以降と考えられる。

e. お七夜に烈公が来訪した(287)。

烈公は 1833～34 年にかけて水戸に就藩し(288)、また、1840 年正月から 1843 年まで 1842 年の数カ月を除いて水戸に滞在している(289)。1836 年(天保 7 年)水戸藩は家臣の江戸在住「定府制」を廃止し、秋までに定府の家臣と家族が水戸に移って、以後交代制となる(290)。寅寿がどの時点で江戸に上がったか、帰藩したか、家族はどうか等を知るのは、結城寅寿に関する資料が殆ど抹殺されている現在となつては、困難である。藤田東湖の「文献 16. 結城寅寿行状録」にごく一部記述がありこれは、一番信憑性が高い。が、他の資料「文献 9. 古老実歴水戸史談」にも少し記述があり、それらの間でもすでに矛盾があるので、現在の時点では正確に確定できない。ただ、烈公と寅寿が仲のよい時代であるはずなので、烈公謹慎の 1844 年 5 月以前の事なのは間違いない。

f. 1847 年寅寿 29 歳で謹慎を命じられ隠居となり、同時に一万丸が五百石を賜り、中の寄合に入る(291)。特に後見等の記述はないことから、この時点で幼年であるかもしれないが、少なくとも 5 歳程度にはなっていたと考えられる。ちなみに寅寿は父の死亡に伴い 6 歳で千石を賜り寄合組となって家督を継いでいる。

f. より 1842 年寅寿 24 歳以前の誕生と考えられる。

g. 幼名が亥之助である。

拝領名は罪をとわれた時から使えなくなり、その後の記述には亥之助あるいは伊之助、伊之介が見受けられる。当時、助と介は併用した(292)というから、問題は「亥」か「伊」である。文献番号(19)では前半は「亥」を使い後半「伊」となっている。また、文献番号(12)(13)では各所に「伊」を、文献番号(17)では「亥」を使用している。しかし、前述の「文献番号 9.」を信ずるならばお七夜に一万丸を拝領して後、ずっと一万丸で亥之助の使用はごく短い。それも罪科を受けた時期となれば、記述の混乱は十分に考えられる。字が本来は「亥」と考える理由は後年、一万丸の妹みち(美智あるいは道、美智子、道子の記述あり)が大森七之助を婿とし結城家再興を申し出る書状に使われてい

る字が「亥」であるからである。そうであれば亥年の生れの可能性が高くなる。ちなみに寅寿は1818年の戊寅年の生れである。

a. ～f. により推定した範囲の年代の中には1839年の己亥年が含まれる。

1839年は寅寿が21歳の時で、この前年6月使番になっている(293)。この翌年正月に小姓頭(侍従長や式部長格で將軍家にまみえる格式(294))、9月に若年寄と拔擢され昇進を重ねていくことを考えると、前述の引用『この頃の結城さんの勢ひは飛鳥も落るようで、羨まぬものではありません』(295)の回顧の記述にも無理がないと思われる。

以上の事項から結城一万丸種徳の誕生は1839年と考える。

1839年誕生をもとに考えると、水府系纂に書かれている、結城一万丸は小山小四郎秀發の娘を娶ることになっていたが、婚礼をあげることなく離別した(296)との記述も成立する。

結城派の一斉罷免が1852年(297)で、1839年生れとすれば当時一万丸は13歳となる。それまでは寅寿もある程度の力を保持しており、あくまで隠居で表向き処罰対象ではなかった。父寅寿の幽閉が14歳の時であれば、その頃までに当主たる一万丸に縁組みの話があり、婚礼は挙げていないままに、15、16歳と父の失地回復に奔走、17歳で揚屋入り、18歳で永牢となり、そのまま離縁なのも尤もと考えられる。

1858年3月の死亡時は19歳を目の前にしていた頃と思われ、死亡時の年令17、8歳程度の記録や伝承とも符合する。

水戸藩党争始末記に、『父の罪に座したの如く申し渡さる此時一萬丸は年僅かに十三なりしと云う』『年僅かに十七八なるへし』(298)とあり、死亡時の年齢が17、8という説はここから出でている。また、水戸藩党争始末気書かれた時代は満年齢、数え、が混乱し1,2歳の年齢の間違いはよくあり、また自説とも大差はないので問題ないとした。

③一万丸の関与の程度

ここから考えられる結城一万丸の事件への関与の程度とはどれほどであったろうか。

一万丸の生年を1839年と推定すると、寅寿の隠居により家督をついで中の寄合に入ったのが8歳、寅寿の幽閉時が14歳、寅寿の処刑時が17歳となる。

罪状に問われた「幽閉中の父に協力し、その悪巧みを助けたこと。」(299)の活動は、主として満14歳から満17歳の間である。寅寿の書状を届け、縁のある下総結城に助力を請う事は可能であったと考えられる。特に、結城派が各所に助力を求める際に名目として旗頭とするには「寅寿嫡男」あるいは「結城家当主」は適当であったと思える。もっとも、自分が先頭に立って「画策」や「暗躍」といわれるほどの活動をするには一万丸は若すぎた。実質的な活動や計画の立案は結城派の中核たちが行っていたことだろう。

つまり、罪状としてあげるには十分な動きをしていた可能性は大なり小なりある。一

方で、このまま旗頭としての一万丸の存在があれば本当に人々を吸引する力を持つ「第二の寅寿」に育ちかねない。天狗派に危機感を与えるには十分なものであっただろう。まだ一万丸が、実質的な力を伴っていないこの時期だからこそ、僅かな行動をつかんで、なんとしてでも罪状として上げ連ねたとも考えられる。

「寅寿の嫡男」として、「結城家当主・一万丸」として、天狗派としては他の結城派要人と共に、なんとしてでも抹殺したい人物であったろう。

〈結城寅寿、一万丸、七之助の墓〉

結城寅寿の子孫、結城四郎氏が描いた、三人の墓の設計図。

しかし、この下にお骨は無い。

清厳寺にある。

(7) 寅寿処刑後

〔1〕 天狗騒動

①水戸藩激派活動

寅寿処刑の安政 3 年(1856 年)以後、斉昭と慶篤は一体となって結城派を側近に用いないなどの、反結城派の体制を確立してゆく。これは、天狗党にとっては喜ばしい理想の形であった。(300)

また、將軍跡継ぎ問題が表面化し斉昭としては息子の慶喜を將軍の座につけようとする。安政 4 年(1857 年)に永牢とされた寅寿長男・結城一万丸が安政 5 年(1858 年)3 月 20 日牢死。

一万丸戒名「真了院殿性誉大実法大居士」。ここに、結城家は断絶する。(301)

今は清厳寺に葬られるが、実際はそこに遺体は無い。遺体の行方は不明である。(302) 推測するに、他の囚人とともに共同墓地にでも葬られたのではないだろうか。

同年 6 月 24 日、逆臣の死などは眼中になく、むしろ安堵の呈で、斉昭は一橋慶喜と共に大老・井伊直弼の違勅調印である日米条約調印の非正当性を不時登城にて訴える。

(303) その咎で、尾張藩主、福井藩主は隠居慎み、慶篤、慶喜は登城禁止を命じられ、7 月には斉昭等謹慎。

8 月 8 日、天狗党分裂の原因となる「戊午の密勅」降下。

「戊午の密勅」とは、日米修好通商条約を朝廷の許可なくして調印したのは軽率であり、徳川家中の混乱を収め徳川宗家を助け外夷に対せよ、といった内容である。しかし、これは正式な手段である関白の署名なくして水戸藩へ発せられた為、密勅とされる。

8 月中に激派による藩政の極論化を防ぐ策として諸生派政権が樹立される。

翌安政 6 年(1859 年)8 月幕府は慶喜を隠居慎みに、斉昭を永蟄居に処した。(304)

12 月に戊午の密勅を幕府へ返納するか否かの意見の対立で天狗党、鎮派激派に分裂。

安政 7 年(1860 年)(3 月 18 日から万延元年)、天狗党激派は勅状返納を拒否し長岡に 1 月より駐屯。(305) これは、2 月 20 日に一度は自ら解散した。(306) 一方で 1 月 17 日には水戸藩、薩摩、長州藩との大老井伊直弼に対しての不信感により結託した。水長成破条約がなる。(307)

水戸藩における激派が実力行使に出始めた。同年 1 月にはイギリス公使館付き通訳の暗殺、2 月にオランダ人暗殺、3 月に桜田門外の変で井伊直弼暗殺。

その主格となった天狗党員・高橋等は評定所に召還される。評定所召還といっても夜中に出頭するのが慣例となっていたので、役人が来て引っ張っていくわけではない。高橋等は 2 月 17 日に身の危険を察し江戸へ逃げる。

主格であった高橋・金子を無くした長岡勢は、高橋等が江戸に遁走した事実を知らないまま、2 月 18 日高橋、金子等救出の為長岡勢森五六郎、林忠左衛門等十余名は評定所に向かうが、整然としており高橋等の姿は無い。そこで、仕方なく長岡に帰ろうと試

みる。しかし、それを予想していた鳥居の隊と消魂橋でぶつかり戦闘。藩庁側である鳥居の隊の国友忠之助に鯉淵が備前掘りに投げ込まれるが、這い上がりそれを突破。江戸へ向かった。吉成常太郎は国友に切られ傷を負ったため、それに参加はかなわなかった。世に言う消魂橋事件である。(308)

9月にフランス公使館要人暗殺。これは12月に米国使館通訳暗殺、(309)と天狗激派等の活動は激しいものとなっていた。

その動きを抑えるため、11月天狗激派政権となる。(310)

② 斉昭の薨去

同じ安政7年(1860年)の8月15日に斉昭薨去。死因は心不全と思われる。(311)

斉昭は晩年、派閥争いによる藩の分裂に対して、自分にも止められない「危機」であると意識したのか、小姓として斉昭に仕えていた青山忠衛門に言葉を残している。

『「忠衛門、そちは決して党に加担するでないぞ、今のままではとんでもないことになりかねない」といっていたという。』(312)

また、大森家の口伝に「大森七之助は斉昭の命令で結城家に婿養子に入った」という内容のものがある。その真偽は明らかではないし、実際に七之助が結城家に入るのは斉昭の死後、5年たっているときである。しかし、もしかしたら斉昭は自分の取り立てた寅寿のうやむやの処刑に対して、何かしらの感情を抱き大森氏か、あるいは側近の誰かに「結城の家を継がせてやりたい」とこぼした可能性もある。寅寿の死に関して処刑を実行した者たちは、斉昭に向けて言い訳の手紙とともとれる手紙を長々と送っている。

万延2年(1861年)(2月19日より文久元年)2月、天狗派が集り玉造騒動が起こる。5月には東禅寺事件勃発。(313)

この東禅寺の英国公使襲撃は桜田事件・消魂橋事件に参加を渴望しつつも、激派といき違いになり参加が叶わなかった有賀半矢が、同志14名と共に正門より夜襲した。英国人2名を負傷させたが、公使に傷一つつけないうちに討たれた。その遺骸の懐中には外夷を許せず、国の為の下賤な身分なれど尽くしたく、それで国の威信が海外に輝かすことができるならばこの上ない幸せであると書かれた趣意書が入っていた。(314)

東禅寺事件で武田耕雲斎が幕府より睨まれ、事件の扇動者として重職を免じられた。(315) 同年6月には東禅寺英国公使館襲撃の責任を取り激派退陣、天狗党鎮派政権が確立する。

文久2年(1862年)1月、坂下門外の変起こる。井伊直弼の後の老中・安藤信正が激派浪士に襲撃された。

7月には一橋慶喜を将軍家茂の後見として文久の改革始まる。

11月、藩政改革により党派に対する見方が変わり、激派政権とする内勅が下る。(316)

ここに、安政大獄、桜田事件、東禅寺事件、坂下事件関係者である激派の面々が赦免

される。安政大獄に関しては処罰された安島等の碑を建てることを許可した。

③天狗党騒動

文久 3 年(1863 年)、東湖の子息・藤田小四郎等天狗党激派は筑波山挙兵の準備として同志、資金の収集を目的に活動を開始する。

文久 4 年(1864 年)(2 月 20 日より元治元年)3 月 27 日藤田、田丸稻之衛門等、筑波山で挙兵。鎮派、諸生派共に筑波勢打倒を陳情に 5 月第 6 回南上。

藩主慶篤は陳情を採用。諸政派筆頭・市川三左衛門は 6 月 1 日付けで執政となり、ついに再び諸生派生権となる。幕府は同月 9 日筑波勢追討を命ずる。

同 6 月、諸生派政権打倒を図り、こんどは鎮派第 7 回南上。慶篤は今度も陳情を採用し、江戸藩庁を鎮派政権とした。筑波討伐から戻るときにそれを知った諸生派は、水戸に入り一部の天狗派の家族を投獄、水戸藩庁は諸生派政権となる。

ここに、水戸藩の特徴「水戸と江戸、それぞれに存在する別の藩庁」という問題が大きな混乱を呼び起こす。慶篤の無策が重なり、水戸藩派閥抗争の無政府状態となる。

同年 8 月諸生派は、水戸城奪回を図った小四郎を藤柄戦争で破り、激派政権打倒。共に江戸藩庁の鎮派政権をも消し去り水戸藩諸生派政権一色となる。

その権勢を持って天狗党の家族を次々投獄する。安政年間の結城派弾圧に対する復讐のようなものであった。

この 8 月、藩主名代として領内の鎮撫に江戸から水戸へ向かった松平頼徳と、武田耕雲斎等や鎮派が同調し合流。この当時鎮派は水戸の安定を望み混乱を収めることを望んでいた。松平もまた、その役目を負って水戸へ向かったのである。しかし、水戸城につくと水戸城兵は天狗派の存在を知り入城を拒否。にらみ合いが続くうち水戸城兵は松平軍を攻撃。天狗党による侵略との誤解と思われる。其れに対して、天狗激派が松平軍・鎮派に加勢。松平頼徳はなし崩し的に幕府と対立するような構図の中心点におかれた。10 月に弁明の為に江戸に戻ろうとするも、引き止められ、かなわず藩主名代ながら、松平頼徳は幕府に命じられて切腹。望まないうちに周りの物事が進んでしまった例は、どこか寅寿と共通している。

10 月 16 日、鎮派の鳥居等 30 余名処刑される。

藩内安定を目指した武田の鎮派も、合流した激派と行動を共にせざるを得ず、武田を総大将として「天狗党」が結成される。11 月、天狗党は一斉に一橋慶喜を頼って西上する。

11 月 16 日下仁戦争で高崎藩兵を破り、和田峠をも突破する。しかし、11 月 29 日に慶喜が朝廷に天狗党討伐を願い出る。やむなく、天狗党 12 月 12 日に慶喜に向けて嘆願書・始末書提出するが 13 日慶喜はそれを却下。(317) 天狗党激派失意のうちに 12 月 16 日全面降伏。

激派の降伏は受理され 12 月 21 日加賀お預けとなる。12 月 23 日武田魁介等 346 人本

妙寺に、12月24日に武田耕雲斎等387人本勝寺に、12月25日山形半六等90人長遠寺に収容される。壊滅状態となる天狗派だが、加賀での激派に対する扱いは正月には餅を配るなど、良心的なものであった。

元治2年(4月7日から慶応元年)1月29日天狗派は越前・彦根・小浜藩のお預けと変わる。(318)ここでの待遇は悲惨きわまったという。

2月1日天狗党の尋問が始まり、2月4日には武田耕雲斎等24人幕命によって敦賀において処刑される。(319)

この時、武田耕雲斎が残した歌が、本論文冒頭でも紹介した

討つもはた 討るるもはた 哀れなり

同じ日本の みだれと思えば

である。

凄惨きわまる憎しみの渦の中の一人でありながら「哀れ」と達観できる優れた人物が、また一人動乱の中で流れによって殺されていった。

それ以後2月15日に102人、16日に76人、19日に76人、23日に16人と5日で合計352人もの人が処刑された。彼等には皆一人一人信条が会っただろうし、目指す目的もあれば、少なからず世に対する執着もあっただろう、それが「数」として葬られていった5日間であった。

〈天狗党追悼碑〉

福井県敦賀にある天狗等の追悼碑と

武田耕雲斎が葬られた神社と墓

〔2〕 寅寿処刑が兵を挙げての党争につながった理由

① 党争激化の要因

糾問がなく寅寿が処刑されたことに対する諸生党の怒りはもっともであり、天狗党との対立が激化したこともうなずける。

だがなぜ、徐々にといえども「出兵」にまで物事が進んでしまったのであろうか。

その理由としては、

A. 天狗党激派が消魂橋事件など実力行使に出たこと

B. 寅寿処刑に始まる、各々の党の重臣たちが、反対派に殺されたこと

などが挙げられると考える。

またここで、「出兵」という、実戦を交える党争に発展したことに対し、なぜ多大な疑問を持つかについても一言述べておく。

江戸末期、政治政党（南上などの多少の実力行使も含む）の際に、よく「血判状」が用いられたことは前述したが、この血判状は、指腹を小刀で切りそれを紙に押し付けて作成する。しかし、江戸末期は血判状で指の腹を切ることでさえ「痛くて嫌だ」という感覚が主であった。これでは、大きな理由なしに血判状より数百倍痛い「戦」を始めることはほとんどありえない。（320）

時代に流されたのだとしても、大多数の者がこの感覚を持つ限り簡単には「実戦」の方向には流れていかない。また、一人二人、戦い嗜好の思想者がいたとしても簡単にそちらに傾くとも思えない。

たとえ藩主が家臣にいきなり「死ね」と命令しても、殿ご乱心等、適当な理由をつけてあっさり死ぬものは居ない（皆無とはいき切れないが、その事でこの説の信憑性が揺らぐわけではない。ここではあくまでも「大多数」が問題となっている）事と同じものだろう。これは、長い専制君主制の歴史を通し見れば、いかに専制君主といえども意味のない無茶な命令には、その家来達は従わないという事実である。

言い方をかえれば、この「戦」「出兵」の命令——全体の流れともいえる——には必要十分の理由があったのである。

出兵へ及び、それがさらに激化したことについては、後期天狗激派の資金徴収が大きく影響していると考ええる。

激派が筑波山挙兵に際し、軍資金を必要として各地の農村などから強奪した。これらの強奪した総金額（敦賀、後期の天狗党、筑波尊皇攘夷激派の集めた資金の総金額である。）は約 10 万両にものぼるとの報告が県史、水戸史等の学者たちから出されている。10 万両といえは 1998 年の時点で現代の金に直すと 1000 億円を超える。（321）

これに対して、強奪された農村はこれ以上の被害の拡大防止及び、上手くいけば強奪された資金の回収の為激派等と戦闘を繰り返す。と、いっても農村は激派のみと戦ったわけではなく、幕府、市川勢等と戦うもの、武田・山国尊攘鎮派等と戦うものに数分した。この為、村の中でも敵対派に属する家の打ちこわし等混乱が生じた。

この「強奪」「村の分裂」というまでもなくどちらも戦であり、各地に飛び火するこ

とは必然だ。これにより、悪要因が折り重なって党争激化に繋がったのではないだろうか。

〔3〕 諸生党狩り

① 諸生党後権と崩壊

元治2年(1865年)3月、(あと1ヶ月ほどで慶応元年となるが)水戸学は異説であるので、学問を朱子学へと転向するようにとの布令が藩庁から下る。

この頃より日本全体も本格的に分裂しつつある。

諸生党政権の中、3月27日に結城派であり、家名断絶となっていた友部徳之助、谷田部獅子之介、大嶺雲八郎の跡取り等が家名再興し小普請組に入る。

また、5月には結城家も再興を許され、大森弥左衛門信任の実弟・七之助が結城寅寿長女・美智の婿として入る。慶応2年(1866年)、結城七之助長女・千代誕生。

7月20日、将軍家茂、21歳の若さで薨去。12月5日に慶喜将軍となり、慶応の藩政改革を始める。12月25日孝明天皇、35歳で崩御。(322)

慶応4年(1868年)(9月8日より明治元年)1月、鳥羽、伏見の戦いで旧幕府軍敗れる。また、戊辰戦争始まり、新政府は徳川慶喜追討令発令。天皇睦仁元服し、新政府は王政復古と開国和親の旨を外国諸国に通達した。

1月19日天狗党本圀寺派、藩政改革のための東帰の勅許を得て2月10日江戸小石川邸到着。諸生党政権は中心たる市川、朝比奈、佐藤等の水戸への脱出により消滅する。かわりに、3月10日には天狗党政権を樹立させる。江戸を脱した市川、朝比奈、佐藤等約600人16日には水戸城へ入る。20日、諸生党討伐隊を編成し水戸を出発、それから逃れるように24日諸生党相津城下へ入る事ができず越後入りとなる。一方、本圀寺派は和書を奉じ、藩主慶篤とともに水戸城へ入る。

3月17日には水戸城に入った慶篤は4月6日に37歳にして薨去。(323)

② 武田金次郎の諸生党狩り

5月、天狗党・武田金次郎が水戸内で諸生党虐殺の復讐劇を始める。(324)

彼は人格者・武田耕雲斎の孫であり、諸生党に対してただならぬ憎しみを持っていたと推測できるが、それにしてもその惨状は理屈や正当性は消え去り、情動的な怒りと、事の流れであったと思える。金次郎は諸生党と一線違う考えを持った中立派の者までも、見境なく殺していった。それはまるで、水戸藩の末路を象徴していた。

金次郎等は、狐色をしたサイミ(織目のあらい麻布)の羽織を羽織って、両刀を持ち水戸城下の諸生党に縁のある者を切り殺し、銃殺した。(325)

その金次郎が中立派の青山延光の家を襲ったエピソードは、彼の行いの虚しさや哀れさをよくあらわしている。延光は隠居し静かな余生を送っていた。彼は武田耕雲斎の親

友であり金次郎の幼いころもよく知っていた。しかし、立場としては金次郎にとって天狗党に味方をしなかった＝諸生側に分類されるものであった。いつものごとく、惨殺をしようと家へ乗り込んで来た鬼気迫る金次郎に対して、延光はやわらかく温かい笑顔で『「ヤア金坊か、大きくなったなア」』(326)と言ったという。何の打算も悪意もなく、亡き親友の孫の顔を見て、ただ口をついて出た言葉に、金次郎は刀を落としかけ、延光に危害を加えないまま、その場を仲間とともにすぐさま去ったという。その後、金次郎は『「おれの一生にあんなマの悪い思いをしたことはなかった」』(327)と語ったそうだ。

5月晦日に行われた市川勢と天狗党の与板の戦闘で、寅寿の跡を婿養子として継いだ結城七之助は水戸を脱藩して北越に向かった。その前に「3. (2) [1] ③巻物返却」で述べるように、同行の飯村又之助に、一部持参していた家伝文書を預けた。今や官軍となった天狗党。諸生党は脱藩扱いで討伐軍に追われる。

北越にいたった諸生党は再起の方策を練るが、結局追討の天狗党と官軍に衝突する。その戦いで七之助が深手を負った。当時小姓頭取の位置に在り、6月5日深手が原因となり没する。(328) 戒名「賢光院忠戦 孝居士」。新潟県越後の天神塚村東洋寺にまつられ、今日あわせて清厳寺に葬られる。

7月28日、天狗党は諸生党討伐隊を再度編成し越後へ行軍する。8月1日、北越から会津に向けて撤退、道中で若松城に入り新政府軍と戦闘。(329) 10月1日に諸生党は水戸城襲撃を決意し、2日にかけて弘道館戦争が繰り広げられる。(330) この戦いで弘道館は正庁を残して焼失。

11月2日、諸生党戦いに敗れ水戸を脱出、4日に松岸村に上陸し、船で北海道に渡ろうと計画するが断られ失敗。とうとう、同年10月6日、松山村八日市場にて諸生党、水戸藩追討軍との戦いの後、完全壊滅。

この時、市川三左衛門は逃れる。翌年明治2年(1869年)2月15日水戸藩兵約220人函館へ出兵。市川は2月26日江戸で捕縛、3月21日に逆磔を申し付けられる。4月3日他の諸生党員と共に処刑された。長岡原で4人が磔になり、仙台で降伏し水戸藩お預けとなっていた吉野、本郷等4人も斬罪晒首とされた。(331)

③諸生党の戦いのもう一面

『君ゆへに　　すつる命は　　おしまねど

忠が不忠に　　成るそかなしき』(332)

本論文冒頭でも紹介した、市川三左衛門の時世の句。

市川は幕末の動乱についての全ての情緒を凝縮し、今の日本ができる為に払った「内外両面での犠牲」をこの一首にこめたのであろう。渡仏しようと計画していたが、未遂に終わったという。(333)

これらの市川勢の戦いと平行して、郷士達も天狗勢と戦っていた。これは、今となれば狂暴で、残虐な諸生派郷士として一方的にかかれるが、諸生派郷士から言えば天狗派郷士が狂暴で残虐なのだろう。

「戦争」の歴史において、一方（勝者）のみの相手の非難が残るとするのは全人類に共通して言える悪い風潮である。この、「狂暴残虐」な諸生派郷士も、彼等なりに命がかかった戦であれば必死に戦場を駆け回ったこともうなずける。この、諸生派郷士に対する「狂暴残虐」との判断に対し、とても的確な注意を促し、またその戦の位置づけを記した論文があった。

『益子たち「結城派」の郷士にとって、天狗との対決は再びめぐってきた政争の決着をつける機会であった。その手段が武闘であった。負ければ又冷飯を食い、死につながる恐れもあった。必死で彼等が戦場を駆け廻ったのにはそれなりの理由があった。その過激とも見える行為のために、天狗達は恐れ、やがて旧結城派郷士達が狂暴であったとの伝えを残していった。だが、生きる為、国の為、全力を尽くした人々について、今我々はその詳しい事情を知ることもなく、無節操な批判を下してよいものであろうか。』

(334) これは、窮状に立たされた諸生派郷士の当時の心情と、目的としては最もと領ける文献であった。

市川等の処刑とともに水戸藩の幕末大動乱は幕を下ろしたのである。

しかしそのときには時すでに遅く、水戸藩の内情は新政府で活躍する人材をすべて失い、荒廃しきっていた。

これは、まさに水戸藩としての壊滅であったろう。

〈弘道館正門〉

水戸城に面している位置にある。

〈弘道館正庁の建物〉

唯一焼失を免れた建物。

〈弘道館正庁玄関〉

〈玄関正面の軸〉

(9) 郷土と支配層・上級藩士の繋がり

〔1〕政治的関わり

①結城派、藤田派郷土の地位と関係

水戸藩の那珂湊に次ぐ重要な土地である太田市には豪農や豪商が多く、その中の大部分の者たちが結城派に組していたと思われる。(335)

寅寿の弘化元年(1844 年)時の知行地で治めていた郷土たちも居り、彼の知行地は下玉里、小生瀬、須和間、その他であった。(336)

「2. (3)〔2〕④郷校」や、「2. (3)〔1〕①寅寿登場」でもふれたように、郷土制とは一定以上の献金と引き換えに、農民を郷土の身分に引き上げるものだった。寅寿が、権力の座にある間に多くの郷土が誕生している。これは当然、多額の献金と表裏一体で、もともと、財力のある農民が郷土になってきた。また、郷土格の豪農は財政援助を通して藩の派閥と関わりを強めた。

特に、結城派と郷土のつながりは強く、多かった。この人達は寅寿の娘等が落ち延びていく際にも重要な役割を果たしたようである。また、その当主や跡継ぎの多くは、諸生党と共に慶応から明治の戦いで没した。

もともと、結城派と関わりがあった郷土の多くは斉昭藩主就任以前から村役人、村長などと村の政治に関与するものが多かった。逆に、後に藤田派と関わりのできる農村の者は、村政に関与するものは少なかった。つまりは、結城派、藤田派・・・ひいては門閥派、改革派の風潮は村にも及んでいたのである。

また、この封建社会における村内での身分は、農村中を結城派、藤田派の両極端に分けることを促進している。

もともと、村の中で一定以上の地位を持っていた一族——結城派郷土とする——にとって、それ以下であった一族の躍進は「成り上がり」と捉えられ、喜ばしいことではない。言い換えるならば、門閥派にとって政治に参加するものではなかった学者たち——つまり改革派——が、政治上の地位を上昇させることを「成り上がり」と敵視したことと同じ理論である。これが、両派郷土の対立を深めた。(337)

②結城派郷土、藤田派郷土の盛衰

もちろん、結城派郷土、藤田派郷土は結城派、藤田派と盛衰を共にした。

まず、藤田派郷土は斉昭擁立以後、格段に村内での地位を増した。また、斉昭謹慎解除を訴える「雪冤運動」に参加した数千人の軍団は、郷校を中心に結束した藤田派郷土の集まりである。

逆に、結城派郷土は結城派政権時はその村長だとか、村役人だとかの村政に関与する地位を抛り強固にしたが、逆に藤田政権となったときその処罰は徹底していた。たとえば、結城派の処分時は、農村の郷土・薄井宗休、薄井友衛門、薄井忞菴、薄井七左衛門、

薄井宗七、馬頭村の星小野衛門、北条斧四郎、大子村の益子民兵左衛門、額田北郷村の百姓であった登一郎、小中村の庄屋であった佐川民三郎等 15 人が同役預けまたは、揚屋入り、手縄村預けの処分を各自受けた。(338)

また、寅寿処刑後は結城に与したとされ、有力郷士であった益子、薄井、北条等は郷士の地位を奪われ一般農民へと下げられた。今までにも、郷士個人としての処罰は前例があったが、集団で政治犯として処罰されたのは水戸藩において初めてのことであった。結城派郷士は武田金次郎の復讐劇の被害者ともなった。(339)

〔2〕血縁関係

①結城派郷士の関与

大子村の益子民部左衛門は寅寿の妾の娘・雪を嫁にとり親戚関係となっていた。(340) また、益子家と星家、薄井家と藤咲家は親戚関係にあり、郷士たち、また、郷士たちと結城派重役は血縁関係でも結ばれていた。(341)

結城寅寿の妾であった浪は、寅寿が松平家で幽閉されていたとき、鷲子村の豪農・薄井友右衛門方にいた。(342) 寅寿が同志と密書をやりとりしたとされる時の記述がある。

『結城寅中は或年極月の事なりしか警固の同志二人にて此冬越え難き事を話し居るをフトー？月それハ如何なる仔細ぞと尋ねしに同志等金子之なきなり此瀬節季を越え難きに候と云いしかば寅寿それは易き事なり我等越えさしとやるべしとて密かに筆墨を取り寄せ一寸？方計りの紙に何か能書し之を鷲ノ子村の友右衛門方(此友右衛門ハ水戸領にて屈指の豪農なり或書にハ元寅寿の妾なりし女を妻となしたるよし見ゆ)へ持ち行かば必ず百両渡すべしとの事に此同志密かに鷲ノ子村に至る彼の書付を友右衛門に渡しけるに果して百金渡しけるなり持ち帰りかくかくと寅寿に告げしに其金に其方を兩人にてわけこれにて節季を越ゆべしと云はれけれハ兩人大に悦服しぬ其れよりして

此の同志寅寿か為に使けれしばしば 屢 同志者間の文通を取次ぎけるか此年(安政三年)四日に至り兩人の同志気味悪しくなりもしこの事露見せは一命にも関わるべし早く改心して自訴するに如かずと相談なし？？此事を訴え出でしにて寅寿より処処へ文通せしを一時に露見せり』(343)

これは、警固の者が冬を越す金子がないところを助け——利用しともいえるが——同志と寅寿が密書を交わしたため、警固の者も少しの間は従っていたが、自らの身に処罰が降りかかるのを恐れ、訴え出た、という文である。

ここで着目したいのは鷲ノ子村の豪農・友右衛門と寅寿の妾・浪のかかわりである。この文を読むに、浪は友右衛門方に居たとも推測できる。友右衛門は鷲ノ子村の薄井一族の当主であろう。この文によると、寅寿は幽閉される際にでも、妾をこの豪農に渡しにいったという解釈になるが、浪は明治期に美智等をつれて逃げ、結城の戸籍に入っ

いる。もし、薄井家の後妻となっていたとしたら、結城の戸籍に入れ、また結城家の墓に葬ることはありえない。なので、これは水戸党争始末記の著者が「寅寿の後妻になり」との意味をこのように書いたか、もしくはその情報を聞き間違えたものと推測できる。

どちらにせよ浪が薄井家に預けられていたとすれば、妻を預けるのであるから、強い関係を持っていたということになる。また、先述したが、浪の娘、寅寿の庶子・雪が郷士・益子に嫁いでいる。このように、結城派は血縁関係、血縁者を任せる事等を以て、有力郷士との関係を強化していた。

また、寅寿死後も、『郷士としての格式を持った家には藩士で諸生派の重鎮、市川家を始めとする家々から養子が入ったり、娘が嫁いできたりした。現在では、虚実不明の伝説のように伝わっているが、一部のそれは真実なのである。』（344）これは、その通りである。また、郷士ではないが、この寅寿の密通書事件について書かれているあとに、水戸藩党争始末では次のような注意が成されている。

『以上ハ??藤田党の手に生れる文書による結城党の手に出でたる文書見当たらずにより真偽を調べるに由無し読者之を了せん』（345）と、両党の資料に各々の言い分が偏っている面を指摘している。

結城寅寿の末、美智（寅寿の娘）・千代（孫）・浪（妾→後妻）・雪（庶子）の脱藩時、彼女等は寅寿と関わりのあった郷士の勢力圏を転々と辿り、最終的には那須塩原まで落ち延びていった。

この時、結城家文書に拠れば田野→大子→矢板→山田→関谷→塩原を通り逃げ落ちていった。また、結城派郷士は、河和田、鯉淵、額田、大宮、天下野、上絵沢、美和、高部、鷲子、馬頭、大山田、里美、大子に散らばって在った。これから推察するに、美智たちは結城派郷士の多く居る北の方角に逃げて行ったようだ。

これは、落ちていった者たちの多くに言えることでもある。よって、彼等・彼女等、結城派の者は郷士たちを頼りにして、結城派と郷士とは実に深い関わりがあった。

3. その後の水戸藩と水戸藩士

(1) 明治期

〔1〕本当に開国は是であり、江戸の日本は非であったのか

①日本という国

今日では、薩長が「明治政府」を作らねば日本はだめになってしまったと考えられている。

私はこの研究を通してそれに疑問を覚えた。

幕末、外国からの圧力に対して幕府は決して無策だったわけではない。また、様々な有識者が各々の形で海外に対しての日本の在り方を決めようとしていた。それは、この論文中で述べてきた東湖、斉昭はもちろん、慶喜、小楠、直弼、春嶽等も……。

薩長が「明治政府」を創らなかったら創らなかったなりの日本の良い未来もあっただろう。

「明治政府」の存在は、今言う良い現代を作るのには必要であった。だが、それがなくとも平和な公武合体、緩やかな開国、少なくともあれほどの犠牲を払って急激に西洋色——決して進んだ文化と言い切ることの出来ないもの——に染める必要はなかった。

多少の争いは起きただろう。

だが、これほど急激に「江戸の日本」を捨て「明治の日本」をとる必要もなかった。

党争中でも繰り返したが、歴史に「もし」は無い、それはわかっている。

だが、もし江戸期の成熟した文化を壊すことなく西洋文化との融合を果たせたならば、これほどの惨事——明治、昭和前期の各国との戦争も含めた——悲劇は起きなかったかもしれない。

だからこそ、頑なに幕府を護ろうとした人々は古い考えであった訳ではないと言いたい。

確かに幕末、日本という国家は行き詰まりに直面しつつあった。だが、それは「革命」でなく「改革」で変えていき得るものだ。その考えを持った人々が、幕府を護ろうとしていた。それは彼等なりの進んだ考えである。

あの混乱が、あれほどの混乱にならずにすんでいたら、と思うと残念でならない。水戸藩が引き金を引いてしまったようなものである。過激な活動の応酬が改革を革命に変えてしまった。

幕府を護り、「改革」で日本を変えていこうと考えたものたちが少なくなかったというのは、江戸期の文化が地獄絵に描かれるものではなく、変えなくてもいいと思えるこのまま守り通したいものである安心できる側面をも持っていたからなのだろう。

石川英輔著の「大江戸仙境期」という小説がある。これは、ただの SF 小説というものではなく、綿密に時代考証のなされた忠実な歴史書、江戸風物の紹介書といえる評価を持っている。ここに描かれるような、趣のある美しい「日本」が、この頃にはあ

ったのだろう。

江戸日本は江戸日本なりの西洋には無い「進んだ文化」を持っていた。西洋は西洋なりの機械技術、軍事技術を持っていた。どちらの文化が「良い」、「悪い」、「進んでいる」、「遅れている」は存在しない。

また、封建制度においても為政者と人民が共生していたことを否定し、それに続いて開国だけが是であるように論ずる人もいるが、封建制度のまま為政者と人民は本当に共存できないのであろうか。そんなことは決してありえない。商人であり、江戸の科学者でもあった儒教の忠実な信者・山片蟠桃は、現代的な感覚に近い合理主義者で政治や経済などの面に於いては為政者に対し批判しているのだが、それでも次のような言葉を遺した。

『ア、封建ノ外ニハアルベカラズ』(346)

これは、江戸期の封建体制を賛美している言葉でもある。少なからぬ価値ある体制だったのだ。

開国は一つの是であっただろう、だが江戸の日本は非ではない。これも一つの是であっただのと考える。

〔2〕 諸生党のその後

① 諸生党残党の活動

水戸藩主・徳川昭武を水戸藩知事とし、明治政府は武田金次郎等、天狗派官軍を役職につけた。もっとも、県政が整うにつれ中央政府の者にとって代われ、元水戸藩士の影は瞬く間に消えていった。新政府に有用な人材が、一人も残っていなかった水戸藩の影響は、国家神道の源泉となった水戸学という思想以外には一切、明治政府には無い。

追討兵の手を逃れ、落ち延びた諸生党の一族や、ごく僅かに生き残った残党は新政府下で「序族収録」（戸籍を剥奪され、財産も没収）され追訴を恐れて隠れ住んでいた。明治 22 年憲法発布の大赦令が出るまで、彼らの戸籍は無かった。この時初めて家名再興が叶い、その後、諸生派関係者は中央政府の安定に伴い復権の活動を始めた。その際の願書や服録請願書が残っている。

この家名再興を具体的に明確に表しているのは、伊藤四郎を婿に取った結城千代の家族の一人の修業証書（毎年渡されていたようだ）である。

証書には「華族・士族・平民」の身分が書かれている。大赦令以前の証書には「平民・・・」と書かれていたのが、大赦令以降は「士族・・・」となっていた。明らかに、大赦令を境に家名再興がなったことを表している。

資料κ、λのような「意見書」「陳情書」を見ても様々な復権活動がなされたことがわかる。上記のはその一部でしかないだろう。だが、その活動の資料はあまり残っていない。

どの程度、明治政府下でその努力が実を結んだのかは私の知る限りではない。が、これ等の活動の後に現在の安定をкаろうじて勝ち得たようである。

明治期から、諸生派の人々は就職・婚姻の差別対象となっていた。いや、一方的な被差別とばかりは言えず、諸生は諸生で天狗を差別し、天狗は天狗で諸生を差別するという形式のものであったのだが。きちんとした理解の方々もいらっしゃったので、一括りにしてはいけない。しかし、全体としての風潮を見たときは根強くはびこっていたといってもよいだろう。

しかし、就職の面など国家が絡んだ地方の部署などからは、諸生党が一方的に差別の対象となっていたようだ。そのため、地域社会での復帰は難しかった。(347) このような諸生派排斥について、一つだけ例を挙げる。文献番号 64.「水戸国難事件殉難者慰霊祭」の冊子によると今日、毎年水戸市で行われる黄門祭りには追い鳥狩りの行列がある。本文でも、斉昭が天保年間等に行ったことは紹介した華やかな軍ぞろえである。祭りでは、行列の従者の旗指物はすべて天狗派の物で、諸生派の指物は全く見られないという。実際に行われていた時代に派閥は無かったのであるから、史実に忠実に再現してもいいだろうにという意見がある。碑を建設し、歴史を掘り起こし、慰霊を行うなど、控えめながら諸生党の活動の記録を残そうという活動もある。

現在の実情の詳細は知らないが、しこりがあることは確かで、目に見えない心情的な差別が一部には残っていると十分に考えられる。

当時公に出された書類の中で「陳情書」「意見書」の二種類を読むことが出来た。「陳情書」は、諸禄を没収された者達はその諸禄の授与を願い出た内容である。

また、「意見書」は、国事犯として諸禄を没収された者が、それに対する法律案の改正を願う内容である。

両者の出された事情についての詳細は明らかではない。しかし、資料中にある通り、残党等は財政面で困窮する者が多かった。その財政の救済を願っての嘆願であることは確かである。

この、財政面での困窮は結城四郎の残した文書中の一文に『一 結城家財政ノ絶望ヲ復活スル事』(348) とある事からも読み取れる。殆どの諸生関連の家はこのような窮状にあったことだろう。

〈意見書と陳情書〉

明治期に県や国に提出
された。

本文は資料 κ、λ

②今なお残る確執

故・市野沢寅雄氏は寅寿の孫・千代の三男として生まれ市野沢家に養子に入り大正・昭和期を生きた哲学者であった。さて、寅雄氏が茨城大学へ入学した際、皆が「結城」という苗字を知っていた。担任の教師にも『あ、あの「結城」か。』（長男・晴孝氏談）と言われたそうである。

また、昭和後期では、千代のひ孫に当たる結城敏也氏が茨城県で小学校時代、社会科教師に『お前、あの結城か？』（敏也氏談）と聞かれたと話す。

このように、大正・昭和期になれば表立って騒がれることはないが、どこか異質な存在として「結城派」は捉えられていたことがわかる。

『水戸は大変なところなのです。』と、諸生党幹部を先祖に持つ大森信英氏は語る。大森信英氏は「水戸藩国難事件殉難者慰霊祭実行委員会」会長として、埋もれた資料の調査を行っておられる。この実行委員には諸生関係者の子孫が名を連ねる。

平成の時代になった今も、地域は「天狗」一色。

お祭りなどの地域行事も何かしら「天狗党」に関わるものが多い。諸生党のお祭りなどは一切ないという。「我が先祖は下級武士ながら正当な水戸藩士なのに祖先の歴史と、経緯がなぜ解明できないか。それは我が家が諸生派だからだ」(349)と慰霊祭実行委員長野沢汎氏も書かれた。

また党争で亡くなった方の慰霊祭も「天狗党」の人々のものは数年に一度行われてきた。それに反し、「諸生党」の人々の慰霊祭は去年(2004年)9月に行われたのが70年ぶり2度目のことであった。

今後、諸生党の慰霊祭を行う碑へ、碑作成後70年間にわかった戦没者名数10人と、もっとも初期の犠牲者といえる結城寅寿の名前を新たに刻むという動きが起こり始めている。これは、天狗・諸生の党争の根本的な始まりが(諸生側から見て)結城寅寿の死から始まったという考えが表に出てきたことを表す。

大森宗家の御当主は幕末水戸のことには興味を持たれていないと聞く。

また、結城寅寿の子孫である水戸結城の当主、また故・先代当主も幕末水戸藩の事柄から一切離れて暮らしていた。

一概には言えないが、明治政府により賊軍、逆賊とされた周りの環境が、彼等を「幕

末水戸藩」より遠ざけさせた理由とも考えられるのではないだろうか。

③慰霊祭にて

諸生党の慰霊祭の際、出席者の中の歴史研究会の方がポツリと漏らした。

「この一ヵ月後に天狗党の慰霊祭が行われるんですよ。本当ならば天狗党の慰霊祭と一緒にやれる方がいいのだが、それはやっぱり無理がある・・・」

また、20代の出席者に70代に見える御老人が幕末水戸藩について語っているのを小耳に挟んだのだが、どうも、その話し方は鬼気迫るものがあつた。たしか、内容は最後の諸生派と天狗派の戦いの事だったと記憶しているのだが、まるで昨日のことのようによく熱心にお話している姿が印象的だった。

また、これほどまでに昔のことがリアルに語り継がれてきている反面、関係者でありながら、私や、私たちの両親の世代で詳しい事実関係を知っている人が少ない事実にも驚いた。

この「知らない」は、しこりの減少・・・ということもできるが、本当の歴史の姿を知らずに世間に浸っているとはいえなくもない。

「知らない」ことが悪いのではなく、歴史を第三者として冷静に判断できないがために「知らない」「知ろうとしない」ことは問題なのではないだろうか。序文にも述べたように、あくまで「歴史研究とは現代の社会に役立たせることが出来るもの」であるべきなのだ。

歴史とは過去の過ぎ去った日を振り返ること。それに自らが陶醉して客観視できなくなる事は避けたい。

慰霊祭は、祇園寺御住職の読経の後、祭文朗読、焼香と続いた。その後、会食を交えながら配られた諸生党名簿の説明、今回開催による主催者一同の挨拶、また、出席できなかった水戸徳川現当主から預かったお言葉、等が披露された。

懇談会の折に、結城に近かった臣で幕末に逃げる頃身を呈して助けてくださった方の御子孫などからご挨拶をいただいた。当時の詳しい事情を勉強していなかった頃なので、ただ驚くばかりだった。その方がおられなければ今、自分がいなかったのかと思うとなんともいえない。また、結城寅寿以下十数名の名前を新たに碑に刻むことについて多少お話があつた。

慰霊祭は無事終わったが、この慰霊祭を通して私の「歴史」というものに対する見方が確実に変わった。その「歴史」が「現代」であること——現代まで引きずられている・・・というよりは、現代にそのまま投影されている事——を実感した。

④天狗・諸生犠牲者の碑

今回慰霊祭が行われた祇園寺には、昭和9年に建立された皇恩無辺の碑があり、この

前で読経が行われた。数少ない諸生党関連の碑には建立の際の逸話にも、水戸の確執がうかがえる。

室田義文が諸生党の殉難者のために碑を作ろうと考えた。そこで、水戸徳川本家公爵に許可を願った。しかし、そのことを聞きつけた天狗党子孫がそれに猛反対を示した。公爵家に抗議した者たちまで居た。そこで、室田氏は仕方なく篆額なしで碑を建てることを決意した。

天狗党子孫の反対感情も強く、室田氏は決闘を申し込まれたり、様々な罵詈雑言があったようだ。そして、極秘裏に行われた除幕式の際、室田氏は決意をしていた。何の決意かというと、命を捨てる決意である。反対した天狗党子孫により襲われないとも限らない。その危険性は十分すぎるほどあった。懷中には護身用の拳銃まで潜ませて除幕式に望んだという。だが、除幕式は事なきを得たという。

また、天狗等側で勤王碑を立てた後、諸生党が同様のものを立て戦死者を弔おうとした。すると、天狗党の内の数人がそれを依頼された石屋に「天狗側が立てたものより大きなものを立ててはいけない」（大意）とつめよったそうだ。

その後に、碑の大きさを口論が起きた。—— 一応、口論にとどまっていたようだ。——それは、先に問題になった諸生党の碑の大きさが天狗等が建てた物より大きいと天狗側が文句を言ったのだ。そこで、大の大人が集まって碑の大きさを一寸も違えないようにしようと測った。すると、どちらもまったくの同じ大きさであったという。それを製作した石屋に聞くと、厚い仙台石を二枚に割って諸生・天狗の碑を作ったそうだ。
(350)

その石屋の判断は、自分の身を守るのに一番よい方法だったかもしれない。

また、水戸市渡里町長者山荘の諸生党の碑は、以前道路拡張のための土地の買収でトラブルがあった。交渉の結果、土地は無償で寄付するが、市が碑をこの現状のまま移設するということで決着したようだ。ここにも、碑に対する執着が見て取れる。(351)

⑤中山家と結城家の関わり

これは余談ではあるが、結城寅寿処刑の命令を下したのは中山氏である。言ってみれば、幕府からの命令であり、否があったとしても逆らうことは出来なかったのだが、形式的には中山氏が直接命令を下している。中山氏は付家老であり松岡城を拝領した程の大石であった。

維新後、中山氏は華族に叙せられている。

その中山氏の子孫は、明治初期に結城家から市野沢家に養子入りした寅寿のひ孫に当たる市野沢寅雄氏へ嫁入りしている。

元といえば、市野沢家も家老職の家柄、同じ門閥家同士。異色の組み合わせではないのだが、今となって考えれば、寅寿処刑を命じた中山氏の子孫が寅寿の子孫と結ばれる

とは、維新の影が色濃く残る明治としては奇妙な縁、明るい話題だったようにも思われる。

これは負の確執とは違う、新しい時代を生きる者が、古い時代を振り返り、客観的に物を言うことの出来るようになった一つの例だ。

(2) 今に至るまで——エピソードとこぼれ話——

『敗れた結城には記録が残らず、勝者の天狗派に記録がある。そしていずれが真実か、判然としないとなれば、それはまさに避けられない党争史の宿命であるともいえる』
(352)

〔1〕 脱藩

①逃亡

諸生党が崩壊し、脱藩するものは多数いた。当然、逃げ延びた者もいれば、追討兵に殺された者もいた。

だが、ひとついえることは、思想が集まって形成された「党」の形が消失、ただの復讐劇と化した争いに、誰もが疑問を感じ、誰もが血の党争を胸奥では批判していたことだ。これらは、市川、武田の辞世の句に伺える。

また、次に記すエピソードは深くそのことを語っている。

美智は寅寿正妻・花の長女である。また、一万丸の実妹でもある。千代は、美智とその婿七之助の長女である。慶応 4 年(1868 年)武田金次郎率いる天狗党が水戸に押し寄せた際、七之助は諸生党の一として脱藩し、北越へ戦いに行った。そのとき、水戸にいた美智は 3 歳の千代を連れて脱藩する。奸族の象徴「結城」の一族にかかる追っ手は厳しかった。

美智、千代の二人を連れて逃げたなみは、寅寿の妾であり、花の死後に後妻として入ったという。逃亡当時 44 歳 (353) また、この三人と共に美智の姉に当たる寅寿の庶子・雪が逃げた。この脱藩は正確には慶応 4 年(1868 年) (明治元年 9 月 8 日から) 以前であったと考えられる。浪は人柄のいい人で、美智親子を一生懸命庇って、かわいがっていた。「だから、生きていられた」と後年千代は語っていたそう。逃げるとき火をたくと煙がのぼるので、食べ物を調理できなくて大変だったとも言っていたという。

美智達が逃げる途中の下野国矢板村・泉龍寺が彼女らを匿った。そのとき、もって逃げていた次のものを寺の中に隠したという。

1. 後醍醐天皇から賜った軍配扇
2. 頼朝将軍感伏
3. 南朝論旨教通
4. 北畠親房書簡其他親房関係者書状(此れハ中二十九通系図ニツイテヲリマス)
5. 其他結城氏所伝文書
6. 位記口宣案
7. 系図

しかし、そこに天狗党追討兵達が攻めてきたため、美智たちは以上のものを住職に預け

たままかろうじて逃げた。しかし、天狗等により住職が拷問され殺されてしまった。その為、上記7つの物は天狗等によって奪われた。

明治期に、結城千代の婿・結城四郎がこれらの探索を太田定次郎氏に依頼した書面が残っている。四郎と、定次郎のかかわりは不明である。しかし、天狗等により上記のものは燃やされたようで発見されることはなかった。これにより、明治初期にあった党争末期の凄惨さや混乱が伺える。住職等が殺された泉龍寺は明治期の廃仏毀釈もあり現存していない。

三人は田野、大子、矢板、山田、関谷を通してゆく。難を恐れて匿ってくれる家が無いままに、最終的に那須塩原の伊藤家に匿われることになる。

美智たちは、湯治に行くと言って水戸藩を脱出した。しかし、途中で官軍——諸生党追討兵——に発見される。危うく殺されるところであったが、その一団の指揮官と思われる人物が、昔、美智に求婚した男性であった為、逃がしてもらえ事なきを得たと伝わる。

この時、追討兵の青年がみちを逃した理由としてはいくつか考えられる。

1. この青年はみちに昔、求婚していた (354)
2. 家が近かった (355)
3. 追討という女子供問わずに殺戮を繰り返す世の中に疑問を感じていた。
4. みちが女性であったから。

1. 2. については、そのままの意味である。『求婚した』という一文は、歴史家でもあ

った市野沢寅雄氏が本人か、共に逃げた家族から聞いている言葉で、新聞という公式文書に載せた文であるので信憑性はきわめて高い。家が近かったということは家族間の付き合いがあっただろうことを予想させ、また求婚（政略結婚の時代とはいえ）をするくらいなのである程度美智に好意的感情を持っていたと考えられる。また、大森家伝承には『七之助は斉昭の命令で結城家に婿入りした』(356) という言葉がある。これは後世に何らかの事情で創作された伝承という可能性もあるが、無視できない言葉である。

家名断絶後、逼塞していた結城の家の者であっただろう。しかし、斉昭の死が、寅寿の死後4年後、一万丸の死後わずか2年である。その間にそれらしい発言があたつとすると、比較的早い時期から美智達に対して迫害的な風潮は消え、一部には同情もあったと考えられる。おそらくこの求婚は、美智を「嫁」にとの求婚であった事と思われる。結城の家名再興を願う面から、実現しなかったのではないか。

もし、この伝承が本当であったとしたら七之助とみちの婚礼は家名再興を前提とした政略的な結婚であったといえる。

当時、求婚したという事実が公（少なくとも家族外に知る者がいる）である状態は今とは違い、家が断絶していた後の不遇の状態では、かなりのところまで具体化していたかもしれない。そうであると考えれば、それが青年の情緒的同情を起こさせ、殺せなかったと考えられる。

3. は上述した通りである。

4. は、人間の心理は、文化的規範によって「女性」「子供」を傷つけ、または殺すことをいっそう強く禁じている傾向があり、人間心理はそれに影響される。(357)

そのため、自分自身がはっきりと正当性を感じられない行動であるのも付加されて、美智を殺せなかったと考えられる。

②隠遁

また、塩原村・村長であった、伊藤家次男・伊藤四郎を千代は婿養子に取り結城の名を継いだ。その後、美智は明治 31 年に亡くなり、次男は光雄、三男は寅雄。四郎は昭和 6 年、千代は昭和 14 年に亡くなった。寅雄は市野沢家に養子に入った。

光雄は聖公会司祭になり、二つの幼稚園の園長を勤めた。結城学園多賀双葉幼稚園を妻・姫路と共に造り幼子とその一生を暮らした。多賀双葉幼稚園は神と共にあるという両者の思想に基づき、子供一人一人を大切に、個性を伸ばせるよう子供との対話を今でも続けている。

結城光雄は昭和 48 年に亡くなり、姫路はその後幼稚園の理事長として子供と神と共に暮らす一方、短歌を作り続け、短歌結社・潮音の最高顧問職に死ぬまで座していた。その姫路は私が小学校 4 年の 2000 年に時 101 歳で亡くなった。

もうそれは、現代のことである。2005 年の現在、寅寿が処刑されてちょうど 150 年になる。

この時代の流れの速さはその大変動、大混乱を如実に物語っている。

③巻物返却

結城七之助氏は、脱藩の際飯村又之助氏に以下のものを預けていた。

1. 晴久叙爵位記
2. 晴久叙爵位宣案
3. 晴久美濃守任官宣案
4. 晴久叙任付帯書類
5. 源烈公ヨリ結城家旧臣ニ関スル新書の写
6. 大森七之助ヲ以テ結城家継承再興ノ伝達書
7. 下総結城家系図写
8. 晴久略系幅物

9. 結城合戦関係書物

それ等は大正期になって当時の飯村家当主、又之助氏の弟・飯村助太郎氏から結城四郎氏に返却された。結城の所在が不明だったために、この時期まで所蔵、保管しておいてくれたとの事で、朝比奈知泉氏、小田部藤一郎氏の仲介で、結城の家に戻ったようである。この飯村、朝比奈、小田部三氏は、共に諸生派系の御子孫であると思われる。これは、明治、大正期になっても、江戸期のつながりが絶えていない事を如実に物語っている。

〔2〕しこりをとく人々

今日に至るまで、水戸藩残党の活動は続いている。

先祖を重んじ、歴史を振り返る姿勢は良いと思う。

しかし、彼等の碑を作るということだけをとっても争いになった事を考えると、そこからも異質なほどの「先祖の記憶」が現代の人々にも植え付けられていることが伺える。これは良い影響とは言えない。祖先の「恨」の部分のみ考えて相手を憎むのはいかなるものか。その恨は国を二分し、藩を二分し、村を二分し、家までも二分させた。

一つに固執することの危険性と、広い視野の必要性。

わたしが、今回の論文を通して一番述べたかったことだ。

遠い昔のことだと笑い飛ばしていい問題でないことは、若輩の私にすらわかる。

だが、それは相手との対立を残したまま生きろということではない。だが、簡単に言ってもそれは理想論でしかない。第三者では分りえない当事者として分ったことがある。そのしこりを完全に消すことは「無理」であること。理屈でなんといおうが、これは当事者達にしか理解できない。

だが、それは言い換えれば「完全に」「皆が」ではなくとも「今」の妨げにならない程度には解消できる可能性を持っているということになる。

ここで、蒼泉寺の御住職の先祖の話のひとつ書こう。

ご住職は天狗党であったにも関わらず敵方であった結城寅寿の墓を作った。それは、寅寿のお預かり先の松平家の方のご要望でもあったという。

老年になられる松平家の奥様は「寅寿さんが弔ってくれという夢を見た。」（大意 蒼泉寺御住職のお話）と仰り、今でも毎年お参りにいらしているそうだ。

たしかに、今、徐々に対立の記憶は解けようとする兆しを見せ始めている。

私たちの世代は、この「幕末水戸藩」の一事に留まらず、明治以前より現代まで、そして、きっと未来まで続いてゆくであろう「家」——または「血縁」と言い換えてもいい——により引き起こされる長きに渡る解消しがたい「しこり」を消すことが役目の

ひとつとなっていくだろう。

「時間」は大いなる希釈液である。過去を学ぶことは「現代に学ぶため」という姿勢を忘れなければきわめて有用だ。

私が今このときに、幕末水戸藩の騒乱とその確執について述べてきた理由は、グローバル化が論じられる現代、国境すら意味をなくしつつあるというのに、日本の一つの「家」や「血脈」、あるいは先祖の封建社会で定められていた身分や思想の元にまとまる学派という様々な枠にとらわれ、自由を失う事ほど愚かしく、虚しいことはないと考えたからだ。

せめて、私はこの方たちのように、これからの時代は、遠い昔の先祖たちの確執に固執せず、むしろその記憶を活用し「今」を生きている自分たち自身の人間関係を築いていきたいと考える。

《結論》

水戸藩の党争史を通してアラブ諸国及び東欧、文明の結節点であるアフガニスタン近辺の民族および宗教が原因となる闘争について歴史から見た解決策を模索することは可能だろうか。

天狗党や、諸生党が各々の価値観からしか闘争を考えなかった事や、一点の物事についてのみ着眼し論議した結果が「水戸藩の壊滅」である。

紛争とは、第三者の視点から光を当てれば新たな歴史の流れが見えるものである。現代においても、これは定法だ。

さまざまな立場からの視点を持つこと、色々な人の心理の理解に努めること、近視眼的な対応をなくすことが問題解決の課題だ。

幕末水戸藩であっても、この三点が何とか保たれていたころは残虐な殺し合いには発展しなかった。藤田東湖と結城寅寿の死に引き続く、会沢正志斎等最後の細い柱の消滅・・・これこそがあの悲劇を引き起こしたことは今まで何度も述べてきた。

イスラム過激原理主義等、紛争の因子となる組織で共通してみられる思想は「自らの意見が通らないときの相手に対する過激な排斥」というものである。これは天狗激派、市川勢の天狗に対する圧制の時と姿が重なる。

だからこそ、幕末水戸藩に対する考察が、現代のものへと結び付けられると考えたのである。

武田金次郎が諸生党を惨殺して回ったように、イスラム過激原理主義はルクソール事件を起こし、諸生党が結城寅寿を処刑した天狗党に対して報復行動をとったように、パレスチナ、中東の紛争は繰り返され、アメリカをも巻き込んだ混沌となる。

私達は、一点のみからそれを批評するのではいけないだろう。本来ならば紛争解決は、実際に紛争に関係している人々を鎮めるのが最良策ではあろう。だが、それは言葉にするよりはるかに、話にならないほどに、難解なことである。

一度高まった感情は行動に走りやすく、そして抑えにくい——たとえば南上のように——。自らの意見が通るまで静まることがない事は歴史が語っている。また、鎮めるといってもいったいどうやるというのだ。私達は彼らの感情を実感することは決してできない——紛争の渦中に入らない限り——。

なので、ここにシミュレーション能力が不可欠となる。ここで言うシミュレーションとは自分が人の身になって考えるということである。つまりは、昔から言われ続けてきている人情に基づく知恵にすぎないのだが、今は失われつつある能力ではないだろうか。また、それは、一方からのシミュレーションではなく多方面に及ばなければ意味がない。

シミュレーションとは動物から人類になった「人間」の原初的な部分の一つでもである。現在は組織、宗教の教義・経典、また学問、法律と「理屈」に頼る部分が多い。

「思想体系」はすばらしい。しかし、そればかりに拠るのは、「マルクス主義」に偏ったソ連が崩壊したように、「社会主義」である中国が次第に資本主義へと転換しているように、無理になってくる部分がある。「資本主義」も問題を露呈し、「民主主義」は一国一国の中で成立しても、国々を一つの人と見立てれば地球規模では成立しているとはいえない。

私たちは、理屈としての思想体系理論が必要となる現代文明社会に生きながらも、「人間」である。一人一人が原初的に求める「精神面での安定・幸福」を重視している。原初的欲望は底辺に存在している。生物とその上に成り立つ思想との掛け渡し、「生物としての人間」と「組織、法などの理屈・思想」とをつなぐリングが必要だ。その方法のひとつがシミュレーションであるということだ。それに対して私たちはもう少し意識を傾けてもいいのではないだろうか。

水戸藩に当てはめて考えると、東湖は学問に優れ、確固とした思想体系を持っていた。寅寿は取り立てて強い学問体系に立脚していたわけではなく、ただ経験と本能的に動いていたのかもしれない。

だからといって近代的に確固とした思想体系を立脚している東湖が立派で、原初的な感覚が劣っているという歴史観はもう終わりにしなければいけない。原初的とは経験や過去の知識に裏打ちされている面もありまた、本当に感覚的な本能もある。これは体系化された形の中に取り込まれにくいものである。であるからして、歴史としては「東湖」と「寅寿」の対立を促すのではなく互いの間に橋をかけ融合させていくべきであったのだろう。初期の斉昭はそれを試みていた。壮年期は繊細で、ロマンチストな面が、良い方に現れて架け橋になっていた。しかし、それは最終的には崩れることになってしまった。世相と年齢、責任に押しつぶされ、繊細は疑心に、ロマンチストは思い込みに変化していった。それもまた、水戸藩の壊滅という結果を呼び起こす一因子であったのだろう。

このように時がたてば、キーポイントが浮かび上がり「もしあのとき・・・」と考える岐路がどこか見えてくる。

現代の紛争においてはルクソール事件ひとつあげるとしても、被害者や過激原理主義者のみからの視点ではなく、そのニュースを聞いた一般市民、その鎮圧をした警官、命は助かったガイド、国として責任を負うことになる政府・・・過激原理主義の元となった思想、また、それと現代の思想との変化から見たシミュレーションが必要だ。どこかにいくつかのキーポイントや、リングを必要とする要項があるはずで、それを見つければ解決に結びつくかもしれない。類似の状況を歴史に見出して、方法を模索できるかもしれない。

このような解決方法は、最もあいまいで回り道にも思えるが、もともと紛争問題は何百年、何千年と続いてきた。一朝一夕に解決できるものではない。試みしてみる価値はあ

るだろう。

また、今の私たち中学生はすべてを理解し第三者と実際の紛争に対してシミュレーションすることも難しい。だからこそ、私達は日常の中で一步一步、前述した三点を実践できるように学ぶべきなのだ。

たいしたことではない。たとえばクラスとして行う行事について言い争いになったとき。いこじになって自分の考えにしがみつくのではなく、相手の感情や考えを理解した上で意見することがこれから先、必要である。今までの中学生、子供としての「自分と相手は同じ様なものだ」「何で私は〇〇しているのに、あいつはなぜしないのか」という幼稚さから抜け出さねばならない。人にはそれぞれに事情もあれば立場の違いもある。その状態から抜け出さないまま高校生になり、大人になり、大きく行動ができる年齢になることほど「戦争」につながりやすい状態はないだろう。

まず、これを自覚することが第一歩だ。そして第二歩としては、実践。言葉を発する前に相手をシミュレーションすること。しかしそこで決して相手と自分は同じと考えてしまってはいけない。それこそ「シミュレーション」の障害となる考えだからだ。「シミュレーション」はもともと違う考えを持つ相手のことを理解すること。

難しいがしかし、それを繰り返して成長していけば、それからでも問題解決は遅くはない。混乱のキーポイントがどこにあるのか、「行事の重要性の認識の違い?」「自分の行動に同調しない相手の行動の動機が理解できない?」と言った具体的な点を見出し、そこでシミュレーションをして互いの歩みを試みる。

このような姿勢が、今回の研究を通して見出せた解決策でもある。「互いに」という以上、紛争問題では、一概に相互にこれを求めるのは大変難しいが、少なくとも、こちらからの歩みが的確なキーポイントでなされるならば、解決の糸口になる可能性は大きい。

その柔軟な思想を生かして紛争問題に一石を投げられる人間へとなれるのではないだろうか。

以上、幕末水戸藩の抗争史を通して、一つの抗争のパターンを見出すとともに、解決の糸口をどのように探るかの考察を行った。

《反省と今後の課題》

今回の論文は話を広げすぎてしまった。しかし、大学の論文のように厳格な審査があるわけではないので、自分の解ったことをこれを期にすべて論文として纏めておきたかった。また、複雑な歴史事情の雰囲気但至少でも伝えたくて余分なエピソードまで書いてしまった。そのように自由に書いた為、話がわき道にそれることが多くなってしまったことは反省点だ。

今回の研究テーマは、各節の中に一つの論文がかけるほどのネタが入っている。一つの文章をとっても違う解釈の仕方もあり、可能性もある。まだまだ、研究を深める必要がある。

私の今後の課題としては、今回完全に解読できなかった「水戸藩党争始末史」のより詳細な解読と、結城七之助の残した明治期の諸生党の活動に関する文書の解読、仙台藩民生局に宛てた当時の古文書の解読と解釈。そして、「稼堂」の書の出所解明も課題の一つになる。他にも、今回は軽く流してしまった諸生党、天狗党の末期を調べたい。

そして、最大の課題として、人生の目標として、もっと色々な思想体系、感情問題を勉強し、歴史、民族紛争のみならず環境問題解決に結び付けられる、全体を俯瞰できる視点を持ちたい。

今の「科学」と言われるものは、とにかく専門化された科学であるから、世界を考えるとき社会科学、自然科学、人文科学、個々でなく、システムとして全体を見なければならぬからである。

私は、今回の論文を書いて、知の宝庫という宝の「地図」を手に入れた。これからは、その宝の地図を活用して、一個一個「知」の宝を探り当てていきたい。

《感想》

私はある日、学校で、先生のとった生徒に対する処置に不満を覚えた。不満といっても、私の考える教育のあるべき姿ではないと思ったからであり、処置に対して正当性が見られないという自身の考えに基づいた不満だ。

授業後、その先生に対して、私は私の考え方を述べ処置が納得いかないと訴えた。先生もその時は警告だけのおつもりであつたらしく、処置自体は実現しなかった。だが、私としては生徒全体に対する処置方法に対して不満を覚えたのであって、今回処置がなされる、なされないは重要な問題ではない。その先生の教育に対する考え方、方法に対して、私が納得しうる説明がほしかった。もしも私自身が先生の説明する理由では納得できない場合には、話し合いを望んでいたのだ。まあ、その時は時間もなく、私も食い下がる気はそれほどなかったので、私の考えを述べたところで引き下がった。その時に、友人が私の考えに共感してくれて、またこのような問題がおきた時は一緒に文句を言いにいこうと話した。

それから数日がたった日の朝に、なんと言うこともなく、その事件を両親に話した。私は、その時、母の言った一言が何時までも心に残った。

「明姫が自分の価値観に照らし合わせて納得がいかなかったから、先生に対して不満を言ったところや、その行動に友達が共感してくれたところが印象が重なる。」

確かそんな言葉であった。

何とかさなるのか、そう思って尋ねた私に、母は当たり前のように「結城寅寿」と。

私の行ったことは、彼の仕出かした事ほど大きなことでもない、日常の一こまでしかない。

が、寅寿は斉昭という、私にとっての先生に物を申し立てた。そこに共感した旧家家臣達、それは私にとっての友達だ。寅寿がその後、旧家家臣に担ぎ上げられたのだとしたら・・・。

寅寿に取ってあの政治党争は・・・自らの派閥を作ることとはなんだったのだろう。私にとってあの後、勝手に話が進み、皆が私に味方すると声高に叫び、結局、私の文句が大きな主張のうねりとなって「学校の先生の退職を願い出る」などということは考えもできない。私にとってありえないと思える出来事。それが、寅寿にとってのあの党争であり、斉昭失脚であつたのではないだろうか。

今、私は寅寿が小姓として斉昭の元に出仕した年齢になろうとしている。私は、気がつけば造られた派閥の中で身動きがとれず、愕然とする寅寿の姿を思い浮かべた。

これは、何の根拠もない想像の域を出ないものである。

しかし、そんな日常の他愛ない一こまに、真実の歴史は隠されているのかもしれない。

時代が違ったとしても、所詮人は人。大きく変われるわけでもなく、まったく違う行動をするわけでもない。ならば、今に置き換え考えて何の不都合があるのだろうか。

序章でも述べたが、歴史は歴史を知ることによって新たな未来を作り出すために必要なものである。確固たる証拠のない仮説は、今の時代力を持つことは出来ない。新たな未来を作り出すために使われることがないのだ。

私は、現代で行われている様々な物事——歴史の研究、教育制度、紛争、民主制という政治、勉強そのもの——が本来の目的から外れてしまっている思いがしてならない。一介の手段であったものが目的へと変わる現代。

「新きを知るための歴史」になぜすべての年号が必要であろうか、何故確固たる揺ぎ無い証拠が必要であろうか、何故論文を書き学会で権威を持つことを重要視する人が増えてしまったのだろうか。未来を自分たちで編み出すために必要な仮説では何故いけないのか。

勉強とはもともと知識の探求、自らが望むから行うことであったはずだ。何故、嫌がりながら塾に行く子、勉強のためにいじめで苦しむ子、勉強のために死ぬ子がこの世に現れてしまったのか。

答えは簡単だ。世の中自身が、そう生きなければ生きていけないように設置されてしまったからである。

では、何時からそうなってきてしまったのか。元をたどり・・・たどっていく先に着くのは、人が文明を持った時だ。文明無しに今はない。文明を否定するつもりはない、そこが現代人の始まりであるからだ。

では、今のこの世の中は・・・？

疑問は尽きることがない。それが学問というもので、それが歴史というものだろう。私たちはいつでも考えながら生き、生きながら何かしらを考えている。

その考えを生かして、今、問題提起のなされる物事のあり方について一考することこそが、すべての本質であるのではないだろうか。

ところで、唐突だが今回の研究中に困ったことが一つあった。重要文書のある図書館のいくつかは 16 歳以下は使用できない困難だ。知人や親のつてを辿って資料にたどり着いたが、今後中学で論文をこなそうと、思うとこの制約はとても困る。研究の目的など使用目的がはっきりしている場合、特別許可を出す等の可能性を求めたい。

《謝辞》

参考書物に関して

日光文書に関する古文書を解説してくださった徳川林政史研究所の太田尚宏様、原田佳伸先生にはお手数おかけいたしました。心より感謝申し上げます。

また、書の字を教えてくださった書道の松永茂子様、吉原映子先生、稼堂の書の解釈に協力してくださった鈴木一光先生のご助力も感謝いたしております。

結城寅寿の絵に関して助言を下された水戸県立歴史館の学芸部の石川武治様、武弓倫子様にはご丁寧なお手紙と長い時間のお話をありがたく思っております。

寅寿の墓に関して、かつてお話を聞かせてくださった曹洞宗南獄山蒼泉寺・先代御住職様、今年お話を聞かせてくださった当代御住職様、またその奥様に御礼申し上げます。

また、日蓮宗一派としての廃仏毀釈に対する評価をお話くださった日蓮教団叡昌山宗源寺御住職様に感謝いたします。

貴重な資料を下さり、諸生党に関するお話にお時間を割いてくださった大森信英様、市野沢晴孝様、本当にありがとうございました。

結城一門のことについて説明してくださり、幕末党争に関する口伝がないか親戚に聞いてくださった小山文子様ご丁寧なお手紙ありがとうございました。

幕末から大正に渡って古文書を保存し、後日当家に返却してくださった故・飯村助太郎様、結城家に所蔵されていた古文書を調査、整理し散逸したものを収集して利用できる形に残してくださった故・結城四郎氏、故・市野沢寅雄氏。

特に、現存本のほとんどない水戸藩党争始末期を明治期に筆写して所蔵していただいたことに感謝します。

書籍に関しては調布図書館、水戸県立図書館、等の一般図書館で手に入らないものも多く、慶応義塾大学図書館より借りてくださった田中幸様、茨城キリスト教大学図書館から借りてくださった結城敏也氏、16歳未満の入れない三康図書館で調べて複写してくださった結城千代子氏に感謝いたします。

口伝を伝えて下さった結城静子氏、好きではない話題にもかかわらず協力してくださった結城達也氏にも感謝いたします。

注

1. 文献番号 40 pp.28 より引用
2. 文献番号 5 pp.4 より引用
3. 文献番号 5 pp.40 より引用
4. 文献番号 1.40
5. 文献番号 1.9.11
6. 文献番号 5 pp.5 より引用
7. 文献番号 1.5.10
8. 文献番号 15
9. 文献番号 15
10. 文献番号 9
11. 文献番号 5
12. 文献番号 7.11
13. 文献番号 1.5
14. 文献番号 5.11
15. 文献番号 1.11
16. 文献番号 5
17. 文献番号 9
18. 文献番号 1.5.15
19. 文献番号 11
20. 文献番号 10.11
21. 文献番号 9.11.15
22. 文献番号 1.3.5.9.11.15
23. 文献番号 9
24. 文献番号 5.11
25. 文献番号 5 pp.72 より引用
26. 文献番号 3.5.11
27. 文献番号 21 pp.115 より引用
28. 文献番号 20
29. 文献番号 20 pp.79 より引用
30. 文献番号 20
31. 文献番号 11
32. 文献番号 26
33. 文献番号 20 pp.87 より引用

34. 文献番号 6
35. 文献番号 6 pp.177 より引用
36. 文献番号 26
37. 文献番号 5
38. 文献番号 41 pp.168 より引用
39. 文献番号 41
40. 文献番号 5.6.26.47
41. 文献番号 9 大意
42. 文献番号 7.40
43. 文献番号 9.48
44. 文献番号 40
45. 文献番号 21 pp.18 より引用
46. 文献番号 5
47. 文献番号 40
48. 文献番号 52
49. 文献番号 30 pp.162 より引用
50. 文献番号 5
51. 結城達也氏所蔵文書 参照
52. 文献番号 54
53. 文献番号 9
54. 文献番号 9 大意
55. 結城達也氏所蔵文書 結城家過去帳 参照
56. 文献番号 9 pp.94 近藤夫人口話 より引用
57. 文献番号 9
58. 文献番号 9
59. 文献番号 9 pp.82 より引用
60. 文献番号 9 pp.94 より引用
61. 文献番号 7
62. 文献番号 9
63. 文献番号 9
64. 文献番号 9 pp.87 より引用 傍点は筆者
65. 文献番号 9 pp.89 久木翁口話 より引用
66. 文献番号 9 pp.91 遠山靈舟翁口話 より引用
67. 文献番号 9 pp.93 久木翁口話 より引用
68. 文献番号 9 pp.94 近藤夫人口話 より引用

69. 文献番号 9 pp.28 より引用
70. 文献番号 9 pp.30-31 より引用
71. 文献番号 9 pp.31 より引用
72. 文献番号 9 pp.34 より引用
73. 文献番号 9 pp.34 より引用
74. 文献番号 9 pp.35 より引用
75. 文献番号 9 pp.44 より引用
76. 文献番号 9 pp.45 より引用
77. 文献番号 9 pp.45 より引用
78. 文献番号 9 pp.33 より引用
79. 文献番号 9 pp.33 より引用
80. 文献番号 55 pp.17 より引用
81. 文献番号 56 pp.38 より引用
82. 文献番号 53
83. 文献番号 7 pp.158 より引用
84. 文献番号 9 pp.90 より引用
85. 文献番号 9 pp.17 より引用
86. 文献番号 9 pp.91-92 より引用
87. 文献番号 42 pp.82 より引用
88. 文献番号 42 pp.82 より引用
89. 文献番号 9 きのふのゆめ pp.43 より引用
90. 文献番号 52 pp.46 () 内筆者注
91. 文献番号 52
92. 文献番号 11 大意
93. 文献番号 40
94. 文献番号 11
95. 文献番号 9
96. 文献番号 1.5.11
97. 文献番号 5 pp.8 より引用
98. 文献番号 21 pp.28 より引用
99. 文献番号 11 pp.2 より引用
100. 文献番号 5
101. 0内 文献番号 15 pp.10 より引用 正式名称と思われる
102. 文献番号 5 pp.15 より引用
103. 文献番号 21

- 104. 文献番号 21 pp.21
- 105. 文献番号 21
- 106. 文献番号 5
- 107. 文献番号 27
- 108. 文献番号 1
- 109. 文献番号 5.9
- 110. 文献番号 5.11
- 111. 文献番号 1.9
- 112. 文献番号 1.3.11
- 113. 文献番号 9
- 114. 文献番号 9
- 115. 文献番号 20 pp.118 より引用 、文献番号 1 参考
- 116. 文献番号 9
- 117. 文献番号 9 続きのふのゆめ pp.82 より引用
- 118. 文献番号 9
- 119. 文献番号 1.9
- 120. 文献番号 1.5.9.11
- 121. 文献番号 9
- 122. 文献番号 1.9
- 123. 文献番号 9 pp.78 より引用
- 124. 文献番号 53
- 125. 文献番号 1.5.9.11
- 126. 文献番号 9.5.7.8
- 127. 文献番号 1
- 128. 文献番号 9
- 129. 文献番号 20
- 130. 文献番号 7.9
- 131. 文献番号 9
- 132. 文献番号 16 大意
- 133. 文献番号 9 大意
- 134. 文献番号 9 大意
- 135. 文献番号 22 pp.71 より引用
- 136. 文献番号 22
- 137. 文献番号 7 pp.82 より引用
- 138. 文献番号 22

- 139. 文献番号 22 pp.73 より引用
- 140. 文献番号 7 pp.82 より引用
- 141. 文献番号 9
- 142. 文献番号 11
- 143. 文献番号 5 pp.33 より引用
- 144. 文献番号 5 pp.34 より引用
- 145. 文献番号 5.41
- 146. 文献番号 5 pp.37 より引用
- 147. 文献番号 41
- 148. 文献番号 5
- 149. 文献番号 5 pp.38 より引用
- 150. 文献番号 5 pp.38 より引用
- 151. 文献番号 5.57
- 152. 文献番号 21.57
- 153. 文献番号 5 pp.43 より引用
- 154. 文献番号 58 より引用
- 155. 文献番号 58 より引用
- 156. 文献番号 58 より引用
- 157. 文献番号 58 より引用
- 158. 文献番号 58 より引用
- 159. 文献番号 58
- 160. 文献番号 21
- 161. 文献番号 5
- 162. 文献番号 5.11
- 163. 文献番号 1.5
- 164. 文献番号 5 pp.51 より引用
- 165. 文献番号 9 pp.92 より引用
- 166. 文献番号 9 pp.92 より引用
- 167. 文献番号 16 大意
- 168. 文献番号 16 pp.223 より引用
- 169. 文献番号 16 pp.223 より引用
- 170. 文献番号 40 pp.130 より引用
- 171. 文献番号 40 pp.130 より引用 () 内筆者
- 172. 文献番号 16 pp.223 より引用
- 173. 文献番号 7 pp.142 より引用

- 174. 文献番号 20
- 175. 文献番号 23
- 176. 文献番号 20
- 177. 文献番号 24 pp.142 より引用
- 178. 文献番号 24
- 179. 文献番号 24
- 180. 文献番号 9 大意
- 181. 文献番号 65
- 182. 文献番号 59.60.61
- 183. 文献番号 5.11
- 184. 文献番号 11
- 185. 文献番号 1.5.15
- 186. 文献番号 11
- 187. 文献番号 63
- 188. 文献番号 5
- 189. 文献番号 9
- 190. 文献番号 1.5.9
- 191. 文献番号 11
- 192. 文献番号 1
- 193. 文献番号 11
- 194. 文献番号 9.15
- 195. 文献番号 9
- 196. 文献番号 1.9.11
- 197. 文献番号 9
- 198. 文献番号 11
- 199. 文献番号 1
- 200. 文献番号 1.11
- 201. 文献番号 10
- 202. 文献番号 11
- 203. 文献番号 11
- 204. 文献番号 10
- 205. 文献番号 11
- 206. 文献番号 9
- 207. 文献番号 9
- 208. 文献番号 9

- 209. 文献番号 11
- 210. 文献番号 9 pp.82 より引用
- 211. 文献番号 16 pp.217 より引用
- 212. 文献番号 9 pp.7 より引用
- 213. 文献番号 9 pp.90 より引用
- 214. 文献番号 9 pp.92 より引用 () 内筆者注
- 215. 文献番号 9
- 216. 文献番号 60.62
- 217. 文献番号 9
- 218. 文献番号 10
- 219. 文献番号 9
- 220. 文献番号 9
- 221. 文献番号 5
- 222. 文献番号 11
- 223. 文献番号 9
- 224. 文献番号 1.5
- 225. 文献番号 1.3.5
- 226. 文献番号 10
- 227. 文献番号 10
- 228. 文献番号 9
- 229. 文献番号 1.5
- 230. 文献番号 3.5
- 231. 文献番号 9
- 232. 文献番号 5 pp.59 より引用
- 233. 文献番号 5
- 234. 文献番号 1.5.11
- 235. 文献番号 9
- 236. 文献番号 9.12
- 237. 文献番号 5.9.11.15.36
- 238. 文献番号 10
- 239. 文献番号 46
- 240. 文献番号 15 より引用
- 241. 文献番号 15 より引用
- 242. 文献番号 15 より引用
- 243. 文献番号 15 より引用

- 244. 文献番号 1
- 245. 文献番号 9
- 246. 文献番号 11
- 247. 文献番号 10
- 248. 文献番号 10
- 249. 文献番号 7
- 250. 文献番号 45 pp.93 より引用
- 251. 文献番号 45 pp.93 より引用
- 252. 文献番号 10 pp.558-559 より引用
- 253. 文献番号 9 pp.25 より引用
- 254. 文献番号 9 pp.26 より引用
- 255. 文献番号 9 pp.26 より引用
- 256. 文献番号 7 pp.155 より引用
- 257. 文献番号 7 pp.156 より引用
- 258. 文献番号 7 pp.154 より引用
- 259. 文献番号 10 pp.560 より引用
- 260. 文献番号 7 pp.156 より引用
- 261. 文献番号 5 pp.69 より引用
- 262. 文献番号 5 pp.69-70 より引用
- 263. 文献番号 10 pp.560 より引用
- 264. 文献番号 7 pp.157 より引用
- 265. 文献番号 7
- 266. 文献番号 10 pp.564 より引用
- 267. 文献番号 5 pp.70 より引用
- 268. 文献番号 9 きのふのゆめ pp.43 内藤・久木翁口話 より引用
- 269. 文献番号 7 pp.157-158 より引用
- 270. 文献番号 15
- 271. 文献番号 9.12.結城達也氏所蔵文書・結城家過去帳
- 272. 文献番号 9.12
- 273. 文献番号 9. 結城家伝承
- 274. 文献番号 9 pp.94 近藤夫人口話 より引用
- 275. 文献番号 13 (二十四) pp.89 より引用
- 276. 文献番号 10.15
- 277. 文献番号 5 pp.70 より引用
- 278. 文献番号 10

- 279. 文献番号 5 pp.70 より引用
- 280. 文献番号 15
- 281. 文献番号 15
- 282. 文献番号 10 pp.577 より引用
- 283. 文献番号 5.9.16
- 284. 文献番号 9 pp.94 より引用
- 285. 結城達也氏所蔵文書・結城家過去帳
- 286. 結城達也氏所蔵文書・結城家過去帳
- 287. 文献番号 9
- 288. 文献番号 5
- 289. 文献番号 5.11
- 290. 文献番号 11
- 291. 文献番号 9
- 292. 文献番号 18
- 293. 文献番号 9
- 294. 文献番号 20
- 295. 文献番号 9
- 296. 文献番号 12
- 297. 文献番号 9.10
- 298. 文献番号 15
- 299. 文献番号 15 大意
- 300. 文献番号 10
- 301. 文献番号 5.結城達也氏所蔵文書
- 302. 文献番号結城家伝承
- 303. 文献番号 3.5.11
- 304. 文献番号 3.5.11
- 305. 文献番号 5
- 306. 文献番号 11
- 307. 文献番号 5.11
- 308. 文献番号 22
- 309. 文献番号 3.5
- 310. 文献番号 5
- 311. 文献番号 5.11
- 312. 文献番号 7 pp.379 より引用
- 313. 文献番号 3.5

- 314. 文献番号 22
- 315. 文献番号 22
- 316. 文献番号 5
- 317. 文献番号 11
- 318. 文献番号 5
- 319. 文献番号 5.11
- 320. 文献番号 10
- 321. 文献番号 30
- 322. 文献番号 3.5
- 323. 文献番号 5.3
- 324. 文献番号 5.11
- 325. 文献番号 7
- 326. 文献番号 7 pp.378 より引用
- 327. 文献番号 7 pp.378 より引用
- 328. 文献番号 11
- 329. 文献番号 11
- 330. 文献番号 5
- 331. 文献番号 33
- 332. 文献番号 64
- 333. 文献番号 66
- 334. 文献番号 31 pp.21 より引用
- 335. 文献番号 11
- 336. 文献番号 27
- 337. 文献番号 31
- 338. 文献番号 10
- 339. 文献番号 10
- 340. 文献番号 10 結城家所蔵文書
- 341. 文献番号 10
- 342. 文献番号 15
- 343. 文献番号 15
- 344. 文献番号 31 pp.22 より引用
- 345. 文献番号 15
- 346. 文献番号 32 pp.127 より引用
- 347. 文献番号 31 結城家伝承
- 348. 結城達也氏所蔵文書

- 349. 文献番号 64 大意
- 350. 文献番号 49
- 351. 文献番号 50
- 352. 文献番号 10 pp.563 より引用
- 353. 結城達也氏所蔵文書
- 354. 文献番号 53 、結城家伝承
- 355. 市野沢家伝承
- 356. 大森家伝承
- 357. 文献番号 56